

江守商事株式会社
創業100周年
記念誌

EMORI 100th anniversary

since 1906



「社員一人ひとりが、輝く企業へ」

本年、弊社は創業100周年の節目に記念誌を発刊する運びとなりました。

1906年の創業以来、時代は明治・大正・昭和・平成と激動の時代を変遷してまいりました。その道程は順風満帆とはいかず、幾多の苦難があったのも事実であります。その苦境に立たされた折々、皆様には常に弊社に対し温かくお力添えを頂きました。今日このような形でご挨拶ができるのも、ひとえに多くのお取引先や関係各位の皆様のご支援とご指導の賜物と心より感謝申し上げます。また、先輩諸氏には、一世紀に亘る歴史を築いていただいたご功績を本書に刻み、改めてこれまでの御礼を申し上げます。

折しも、日本経済は失われた10年によりややく終わりを告げ、景気回復も本格化してきました。経済のグローバル化が一段と進む中、弊社が国内外において果たす役割は更に大きくなり、責任の重さを痛感しております。

弊社はこの変化を好機ととらえ、基軸となる化学品事業をはじめ、アジアを中心に展開中の海外事業、また、電子部品・ソフトウェアに注力しているIT事業を更に積極的に推進してまいります。『グローバル・ソリューション・パートナー』と、『Mission with Passion』（責任ある仕事を、情熱を持ってやり抜く。）をスローガンに、お客様から選ばれる21世紀のベスト・パートナー企業を目指して邁進する所存でございます。

100周年の本年3月。期せずして東京証券取引所第一部の指定となりました。これを機に一層皆様のご期待にお応えすべく、役員および社員一同、信用・信頼を第一とすることはもとより、企業の社会的責任を自覚し社業に精励してまいります。今後も弊社に引き続きのご交誼を賜りますよう、宜しくお願い申し上げます。

本書の編纂に当たっては、戦時中の空襲や福井震災により、貴重な記録を損失しましたが、多くの皆様のご助言やご協力を賜り完成させることができました。社員の皆さんには、本書において先輩諸氏のご尽力を顧み、歴史の重みを感じるとともに、一人ひとりが輝く一助にならんことを願っております。

江守商事株式会社
代表取締役社長

江守清隆

CHALLENGE

創造する、力。

創業100周年は、
“ゼロから始める、創業元年。”
クリエイティブな環境を舞台に、
新しい歴史が創られていく。





GLOBAL

グローバル・ソリューション・パートナー。

江守商事はグローバルな視野で情報と技術を駆使し、
智恵とスピードでお客様に感動を呼び起こすソリューションの提供を目指す。
全てのお客様にとってなくてはならない“21世紀のベストパートナー”となるべく、
世界をフィールドにした江守商事の挑戦が続いている。

海外 world wide

中国、タイをはじめアジア地域を中心に11拠点※
(1支店、1事務所、7現地法人、2合弁企業)を海外に設置。
国内外のネットワークを駆使して、
商品の提案から調達、管理、配送までをトータルに担い、多様化、
高度化するユーザーニーズにきめ細かく対応。特に中国においては上海を基点に
さらなる市場の深耕・開拓を目指し、インフラ整備が進むタイでも
果敢なビジネス展開を進めている。
※2006(平成18)年3月末日現在



化学 chemicals

創業以来、ケミカル分野は江守商事の中核事業となってきた。
化学品、合成樹脂、繊維加工剤など、社会生活に不可欠な商品の提供はもとより、
長年培ってきた専門性の高い情報と技術を活用し、
幅広いユーザーニーズに応えている。

IT

information
technology

●電子部品

日本国内はもとよりアジア市場において、IT社会を支える電子部品の販売・調達及びアセンブリを中心とした事業を展開している。

●ソフトウェア

物流業界向け自社開発ソフト「リアルタイムDCシステム」をはじめとする付加価値の高いソフトウェアを提供。さらに、一般企業や金融業界、官公庁向けのシステム開発、ITサービスを展開している。

●ハードウェア

ユーザーニーズに応え、革新のソリューションを支えるコンピュータ、ネットワーク機器、周辺機器など、幅広い分野の情報機器を提供している。



環境

environmental
technology

江守商事は環境保全への取り組みを21世紀の企業の責務と位置づけ、工場廃水のリサイクルに着目したシステム、エコ商品の立案・構築・販売など、ケミカル分野で蓄積した専門知識やノウハウを活かした環境ビジネスを積極的に展開している。

CHARTER

新世紀憲章の誓い。

江守商事の
新しい歴史を創るのは、
社員一人ひとりの
力にほかならない。



江守商事は、お取引先・株主・社員・
地域社会の幸福のために存在する。

江守商事は、歴史を尊重し、未来を見つめ、信用と信頼を大切にする。
江守商事は、情報と技術を駆使し、智恵とスピードを提供する。
江守商事は、変化を恐れず、革新と創造を継続する。
江守商事は、情熱と責任を持って、困難に挑戦する。
江守商事は、法令を遵守し、公開企業としての社会的責任を果たす。
江守商事は、人を育て、世界に翔く。

A CHARTER FOR THE NEW CENTURY



We, Emori & Co., Ltd., believe that the satisfaction of our customers and partners as well as the well-being of our employees and the communities in which we live and work are the keys to our lasting prosperity and success.

Whereas, we acknowledge past accomplishments, we also look to the future, seeking always to maintain the confidence and respect of our clients.

Whereas, our excellent command of intelligence and technology is our driving force, we are in constant search for greater wisdom and alacrity.

Whereas, this is a world in which the only constant is change, we will always strive to place ourselves at the pinnacle of creativity and innovation.

Whereas, we possess a burning passion and a strong sense of mission, we are hereby determined to keep our eye on the ball, enthusiastically welcoming all challenges.

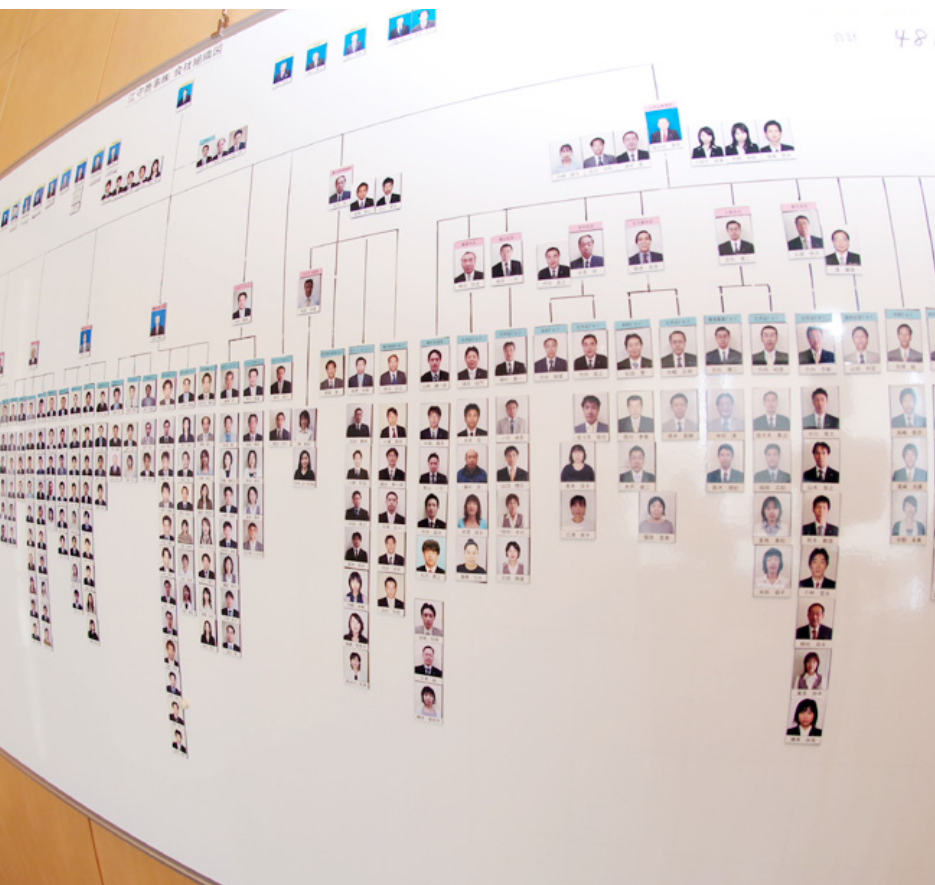
Whereas, we are a public company, we will faithfully respect the legal framework within which we operate, basing ourselves on a solid ethical foundation while maintaining a keen sense of corporate responsibility.

Be it resolved that we shall always encourage the personal development of our employees, thereby soaring to ever greater heights on the world stage.

HUMAN

人の、絆。

江守商事の成長を支えたのは、
社員一人ひとりの努力にほかならない。
時代や事業内容が変わっても、
何より“人と人のきずな”を大切にする
江守商事の社風は、決して変わることはない。



※左ページ左写真

社長室にはグループ全社員の
顔写真が貼付されたボードが掲げられている

※右ページ写真上から

上海江守貿易有限公司

シンガポール支店

EMORI (THAILAND) CO.,LTD.

2006 (平成18) 年度新入社員

2006 (平成18) 年「江守きずな会」(OB会) 総会

野球部員と社員たち



LEADERS

受け継がれる、精神。

江守商事100年の歴史は、
現状維持を是とすることのない、
革新と創造の連続であった。
その一方で、信用と信頼を重視する創業以来の
企業姿勢は脈々と受け継がれている。
こうした“江守イズム”を生み、
そして発展させてきたのは、
歴代のリーダーたちである。



江守 清

1906(明治39)年
薬種商江守薬店を開業



江守 清喜

1958(昭和33)年～1981(昭和56)年
代表取締役社長
1981(昭和56)年～1986(昭和61)年
代表取締役会長



江守 幹男

1981(昭和56)年～
1992(平成4)年 代表取締役社長
1992(平成4)年～2000(平成12)年
取締役会長
2000(平成12)年～会長



江守 清隆

1992(平成4)年～代表取締役社長

LISTING OF STOCK

東証一部上場への歩み。

江守商事は1994(平成6)年2月の
株式店頭登録(現ジャスダック証券取引所)、
2005(平成17)年4月の東証二部上場に続き、
2006(平成18)年3月に東証一部上場を果たした。
福井県内の企業では4社目、
33年ぶりの東証一部上場企業の誕生であった。



1994年(平成6)2月2日、
株式店頭登録(現ジャスダック証券取引所)

2005年(平成17)4月11日、
東証二部上場

2006年(平成18)年3月1日、
東証一部上場

CORPORATE SOCIAL RESPONSIBILITY

社会に貢献する、という使命。

江守商事は東証一部上場としての
大きな社会的責任を自覚し、
社会貢献活動にも一層力を注いでいく。



●財団法人江守奨学会(写真* / 上左)

1971(昭和46)年の設立以来、福井県内の盲・ろう・養護学校等の
特殊教育の児童・生徒に奨学金を支給するなどの支援を続けている。
同種の奨学制度は全国に例がなく、その活動は各方面から高く評価されている。
*教育奨励賞授賞式

●少年野球を指導(写真 / 右上)

江守商事野球部は2000(平成12)年の富山国体で優勝を果たすなど、
輝かしい成績を収めている。その一方で、地元の小・中学生への指導を通じて、
福井野球界の底辺拡大に貢献している。

●子供みこしを支援(写真 / 右中)

江守商事は地元の祭礼時、本社敷地を
子供みこしの休憩場所として提供。地域行事への支援を続けている。

●地域清掃活動(写真 / 右下)

江守商事は2001(平成13)年に環境方針を制定し、2002(平成14)年に
ISO14001認証を取得するなど、環境保全を企業活動の重要な要素と位置づけて
いる。その活動の一環として、社員が定期的に社屋周辺の清掃に取り組み、
地域の美化に努めている。

祝 辞

福井県知事
西川一誠



江守商事株式会社の創業100周年を心からお喜び申し上げます。

貴社におかれましては、明治39年に創業されて以来、大正・昭和・平成と経済社会情勢が激しく変化する中であって、福井県を拠点に、輝かしい歴史と業績を積み重ねられ、常に本県を代表する企業として発展してこられました。

これまでの100年間にわたる歴代社長をはじめとする役員の方々の的確なご判断と、その下で一致結束して活動を続けてこられた社員の皆様、関係者の皆様のためまざるご努力に対して、心から深く敬意を表します。

貴社は、前身の薬種商「江守薬店」時代に、既にその真摯な商いによって顧客からの高い信頼を得られました。こうした精神を伝統としながら、さらに積極的に事業展開を進めるとともに、現状維持を是とせず絶えず企業体質を強化するなど「攻めの経営」を実践してこられました。

経済のグローバル化が進む現在にあって、こうして培ってこられたチャレンジ精神は遺憾なく発揮され、成長分野であるIT分野への参入と、県内企業に先駆けたアジアを中心とした海外への進出などにより、本県が目指す「元気な産業」の実現に大きなご貢献をいただいております。

一方、昭和46年に設立した財団法人江守奨学会を通じた、障害を持つ児童への奨学金制度や特殊教育の振興などにより、本県の障害児の人材育成にも大きな役割を担っていただいております。

さらに、こうした貴社の社会貢献を大切にする社風を背景に、江守幹男会長には、福井県経済団体連合会会長として、産業界はもとより、北陸新幹線整備の実現やエネルギー研究開発拠点化計画など県政の重要課題の推進に対しても大きなご尽力をたまわっているところであり、心からお礼申し上げます。

結びに、貴社におかれましては、創業100周年と東京証券取引所市場第一部指定の記念すべき年である本年を一つの節目に、今後とも、江守清隆社長を先頭に、次の新しい歴史を切り開いていただき、本県の産業界を牽引する企業として、さらに飛躍されますことを心からご祈念申し上げ、お祝いの言葉といたします。

福井市長
坂川優



江守商事株式会社が創立100周年を迎えられましたことを、心よりお慶び申し上げます。

貴社におかれましては、明治39年当市毛矢町に「江守薬店」として創立されて以来、経済・社会情勢が大きく変動する中において、幾多の苦難を乗り越え、輝かしい歴史と業績を築いてこられました。

昭和20年代、福井市は大空襲、大震災、大洪水と立て続けに大きな災害に見舞われました。貴社も甚大な被害を受けられましたが、当時社長であった江守清喜氏を先頭に、社員の皆様の確固たる意志と不断の努力により再起を遂げられ、それはまさに不死鳥の街・福井の復興を象徴するものでございました。

その後、順調に業績を拡大され、東証一部上場を果たされましたのも、IT事業・海外事業という時代を先取りした事業展開に加え、能力主義の導入や組織のフラット化など数多くの社内改革を実行された成果であると存じます。

また一方、貴社は障害をもつ児童の教育のために「財団法人江守奨学会」を設立されるなど社会貢献にもご尽力されております。近年、企業には「社会の公器」としてのあり方が問われ、より一層の社会的責任が求められる中において、貴社の長年のこのご活動は誠に意義深く、心から敬意を表する次第でございます。

福井市は、施策の基本方針の一つとして産業力のアップを掲げ、将来を担う人材育成や、福井製品の販路開拓、情報発信などに取り組んでおります。その実現のためには、これまでに培ってこられた確かな信用と技術を礎とし、100年という節目を新たな出発点として未来への飛躍を期す貴社との連携がますます必要になってまいります。今後とも、地域住民と行政の「ベストパートナー」として地域の発展・幸福のために貢献されることを、そして世界の江守商事へと翔かれることをご期待申し上げます。

終わりにあたり、貴社ならびに社員の皆様のますますのご発展とご多幸を祈念いたしまして、お祝いの言葉といたします。

株式会社福井銀行
頭取 市橋七郎



江守商事株式会社におかれましては平成18年3月をもって創業100周年を迎えられ、誠におめでたく心からお祝いを申し上げます。

第二代目当主故江守清喜会長の深い信仰に基づかれた経営手腕で創業後の数々の苦難を乗り越えられ、繁栄の基盤を築かれました。

後継者である江守幹男前社長は先代の経営理念を良く継承される一方、新時代に対処する“ニュー江守の創造”を掲げられ、コンピュータ、電子材料などの新規分野を開拓され、情報技術商社に見事に変貌されました。

平成4年第四代社長に31歳の若さで江守清隆現社長が就任され、福井経済界に経営改革の清風を巻き起こしました。私も同年に頭取に就任し、経営者としてはライバルとして江守社長の数々の施策を驚きの気持ちで眺めていました。ITと海外をキーワードとした江守商事株式会社のグローバルな事業展開には感心するばかりです。

その後も休むことを知らない快進撃で、創業100周年を見据えた東証一部上場、又本社新社屋の完成等々と江守社長の気迫に圧倒されるばかりです。

今般ハードを一新されましたが、その中味に相応した社は「新世紀憲章」を制定され、更に新しく生まれ変わられる事と思います。

江守商事株式会社が100周年を契機に一層の発展をされますことを心から祈念しお祝いの言葉とさせていただきます。

日華化学株式会社
代表取締役社長 江守康昌



江守商事株式会社の役員、社員、関係者の皆様、100周年おめでとうございます。心よりお祝い申し上げます。

100周年を迎えられるということで、最初に思いうかんだのは子供の頃のことです。私自身がもの心ついてから、当時の江守商事三階の男子寮に住む若手社員の皆様には大変お世話になりました。また、兄弟とも野球を始めたきっかけは、おそらく江守商事野球部の皆さんの影響だと思えます。監督安井さん、ピッチャー島田さん、キャッチャー野村さん、主砲伏見さん、野次担当の張籠さんといった面々のおかげで、野球に親しむようになりました。かつては恒例だった日華化学との合同運動会では、私は知り合いのたくさんいる緑組の江守商事チームにいたことを思い出します。

故清喜会長は江守商事のことを「店」、日華化学のことを「工場（こうば）」と呼んでいました。別々の会社ではありますが、正に一心同体だったのです。日華化学は歴史の中の重大な場面で江守商事の支援を受けて立ち直ってきました。地震や洪水、経営危機など、幾多の困難を乗り越えてくることができたのは、江守商事の支援があったからと深く感謝しています。

江守商事は商社としての機能を存分に発揮し、一方で日華化学はメーカーとしての研究開発力を高めながら、両社は兄弟会社として歩みを一つにして福井から全国へ、世界へ向かって歩んで参りました。

特に、近年は江守商事グループとしてアジアを中心としたグローバルネットワークを推進し、日本のみならず世界に拠点を構え、日華化学の海外拠点とも深い連携を頂き大きく発展されています。また、IT、コンピュータソフト、電子部品、など時代をリードする先端産業への取り組みも積極的で快進撃が続けられています。その結果、100周年という節目の年に東京証券取引所第一部に上場を果たし、さらにそのシンボル塔としての新社屋を落成されましたこと、誠にご同慶の至りです。

我々日華化学株式会社も、65周年を迎えました。いま、製品を売らずして技術を売るという創業者の言葉を思い起こしています。日華のルーツである江守商事の100年を機に原点に戻り、メーカーとしてお客様が求める様々なニーズに技術で応え、お客様、社会、そして社員から信頼され選ばれる企業を目指して参ります。

江守商事の皆様の「常に挑戦し続け、全員が絶えず情熱をもってやり抜く」という姿勢を見習い、お互いが今後ともベストパートナーであり続けん事を切に願っております。

セーレン株式会社
代表取締役社長 川田達男



このたび、江守商事株式会社には、創業100周年を迎えられ、その記念として記念史を発刊されますことに対し、心からお祝い申し上げます。

貴社には、明治39年、現在地（福井市毛矢町）でご創業以来、戦災、震災など戦前、戦中、戦後の幾多の困難に直面しながら今日のご発展を築かれましたのは、創始者であります故江守清氏をはじめとして、二代目社長故江守清喜氏、三代目社長江守幹男氏、そして江守清隆現社長並びに従業員みなさま方のご尽力の賜物であり、深く敬意を表するものであります。

貴社は薬種販売業に始まり、医薬品、工業薬品、染料、化学製品、さらには未知の領域でありましたコンピュータ分野に進出されるなど常に時代を先取りした取り組みと地元ユーザーのニーズを開拓されることで、大きく発展され、北陸地域はもとより海外にわたる「情報技術の総合商社」の礎を築かれました。

貴社と弊社とは、ご創業以来、原染料をはじめとした幅広い製品を通してお取引をいただいておりますがその間、さまざまなことが思い浮かびます。特にバブル崩壊後の厳しい経済環境のもとでは、社員の意識改革、グループ制導入による組織の水平展開、情報事業の再編、成果主義の導入を果敢に実践、21世紀に入ってから『グローバル ソリューション パートナー』をテーマにタイ、インドネシア、中国、シンガポールに相次いで現地法人、支店、合弁企業を設立されるなど世界をビジネスフィールドとした積極的な展開に改めて敬意を表する次第であります。

経済社会を取り巻きます環境は、今まで以上の速さで変化していくものと考えます。そのことは当然に従来と全く違った経営の舵取りが必要になると予想されます。貴社におかれましては現代表取締役社長の江守清隆氏を中心に、優秀な経営陣と社員の方々が一体となられ、創業100周年を新たな基点として、長年にわたり蓄積されました企業力を発揮され、福井が生んだ世界に誇る「情報技術の総合商社」へとますます飛躍、発展されますことを大いに期待するものであります。

終わりに、江守商事株式会社は創業100周年を「ゼロから始める、創業元年」と位置づけ、新しいスローガンのもと、新しい歴史を築くべくスタートされたとお聞きしております。将来に向かって、より大きくご発展され福井経済の牽引役となられますことをご祈念致しまして、私のお祝いの言葉と致します。

長瀬産業株式会社
代表取締役会長 長瀬英男



先ず江守商事近年のご発展に深甚なる敬意を表し創業100周年を心よりお祝い致します。申すまでもなく江守商事の歴史は創業家の江守家においては語れません。そして江守家と私の属して居ります長瀬家とは本当に単なるビジネスパートナーの域を越えたファミリー同志の或る意味では親戚以上の親しい関係を永年に亘って保ち其の縁で私も幸いにして二代目清喜会長より現会長、社長と三代に亘り親しくさせて頂いて居りますので其の視点から感じました事を述べたいと思います。

故清喜会長と私の岳父にあたります故長瀬徳太郎はお互いに心から信頼し合う仲で傍目からも大変美しいまたうらやましい関係でした。人間艱難を共にすべし富貴を共にすべからずと言いますが戦前戦後の厳しい時代を共に生き抜いて来た経営者同士の共感と言ったものがそこには見受けられました。又故会長は何とも云えない暖かい雰囲気をお持ちで顔を拝見するだけで心のみ素直な気持ちに成れる方でした。私は長い人生で他にもうお二人そういう方を存じ上げて居ります。

三代目の幹男現会長とはもう50年に近いお付き合いになります。思い出は多々ありますが何と云っても強烈なのはお若い頃の江守グループ国際化の先頭に立たれた頃の印象です。「人間一人では何も出来ないが又一人が言い出さないと何も始まらない」と言う事を教えられました。以来先見性と実行力を兼ね備え尚且つ暖かい心を持った経営者として尊敬し兄事して居ります。近年は江守、日華とも良き後継者を得られて悠々自適も出来るのですが大局的見地から社業を見られると同時に地域社会発展の為におおいに活躍、貢献されて居られます。精悍な風貌と相俟って其の迫力と存在感は今もご健在で後進の励みになります。

四代目の清隆社長は学業を終えて暫く当社に籍を置かれました。スポーツマンらしく大変明るく礼儀正しい青年でご家庭での躰の良さがしのばれました。職場でも人気者だったようです。江守商事社長就任後の活躍振りは正に目を見張るものがあります。経営のあらゆる側面で大胆な改革を実行され業容を飛躍的に充実、拡大して経済界の注目を集めました。本当に素晴らしいことで正直期待を上回るスピードでした。誠に嬉しい事です。

二代目、三代目から名経営者としてのDNAを受け継いでいらっしゃるのですから更に精進して将来大成される事を期待して居ります。

以上種々勝手な事を申し上げましたが多年のご厚誼と老骨に免じてお許しください。

江守商事様益々のご発展と役員社員皆様のご多幸とご健康を心よりお祈りいたします。

江守商事創業100周年記念誌

目次

CHALLENGE	創造する、力。
GLOBAL	グローバル・ソリューション・パートナー。
CHARTER	新世紀憲章の誓い。
HUMAN	人の、絆。
LEADERS	受け継がれる、精神。
LISTING OF STOCK	東証一部上場への歩み。
CORPORATE SOCIAL RESPONSIBILITY	社会に貢献する、という使命。

祝辞

福井県知事	西川一誠	02
福井市長	坂川優	03
株式会社福井銀行	頭取 市橋七郎	04
日華化学株式会社	代表取締役社長 江守康昌	05
セーレン株式会社	代表取締役社長 川田達男	06
長瀬産業株式会社	代表取締役会長 長瀬英男	07

江守商事の軌跡

—1世紀の歩み—

第1部 不撓不屈

第1章 歴史の始まり	15
第2章 激動の昭和の中で	23
第3章 度重なる苦難の果てに.....	37

第2部 継承と創造と

第1章 北陸を代表する商社に成長.....	53
第2章 挑戦と飛躍	63
第3章 ニュー江守の創造を目指して	93

第3部 世界へ、そして未来へ

第1章 21世紀への挑戦	107
第2章 進化— <i>Global Solution Partner</i> として.....	123
第3章 新しい歴史の始まり	137

特別寄稿

会長 江守幹男	147
---------------	-----

資料編

企業概要	152
グループ概要	154
企業データの推移	157
歴代役員	160
年表	162
あとがき	171

凡例

敬称は原則として省略させていただきました。
企業名、役職等は記述当時の名称での表記を優先しました。
引用文は原文を尊重することを基本としました。
年号は西暦・和暦の併記を原則としました。

江守商事の軌跡

——1世紀の歩み——



“Global Solution Partner”を掲げ、情報と技術を駆使してグローバルに事業を展開する江守商事は、2006（平成18）年3月に創業100周年を迎えた。

1世紀に及ぶ長い歴史は、市井の薬種商から染料問屋、化学品商社、そして情報技術商社へ、家業から企業、さらには東証一部上場企業へと進化を続ける企業の歩みにほかならない。

明治、大正、昭和、平成。20世紀から21世紀——大きな時代の流れの中、江守商事は幾度もの危機を乗り越え、商機を捉え、自らの姿を変革していった。先見性とリーダーシップに富んだトップの決断と、それを支えた社員たちの努力。現在の江守商事は、数多くの人々の喜怒哀楽に満ちた行動の積み重ねの上に立つ。

2代江守清喜が商道の基本とした「報恩感謝・信用誠実・和衷協力」の精神を「新世紀憲章」へと昇華させ、絶えず新たな展開に挑む。継承と改革、そして創造を繰り返しながら、その視線の先には、世界が、そして未来がある。創業100周年という大きな節目は、江守商事が新しく生まれ変わるための出発点となる。これまでの軌跡を振り返るとともに、新たな挑戦への第一歩をここに記す。

第1部

不撓不屈

1 Chapter1 章

歴史の始まり

1906(明治39)年3月、江守清が福井市毛矢町に開業した薬種商「江守薬店」が、江守商事100年の歴史の始まりとなった。江守薬店は清の謹直・勤勉・清廉な働きにより、明治から大正にかけて顧客の信頼を深めていく。清が死去した後、2代店主となったのは長男の江守清喜であった。



江守商事の創業者、江守清。旧士族としての誇りを失わず、謹厳実直に商いの道を歩み続けた

江守薬店開店

1906(明治39)年3月5日、福井市毛矢町96(現在の毛矢町2丁目7)に一軒の薬種商が開店した。重厚な板造りの看板には、「江守薬店」という屋号が記されていた。

店主の江守清はこの年31歳。大阪の薬種商で13年間に及ぶ修行を終え、妻のゆきをとともに帰郷して開業したのである。江守薬店の所在地は、現在の江守商事本社の通りを隔てた向かい側であった。現在の毛矢町界隈は企業や商店が軒を並べる商業地区で、県都の南北を結ぶフェニックス通りの中央には、福井鉄道福武線が走っている。

しかし、江戸時代の毛矢町界隈は中級武士の居住地で、江守薬店が開店した明治末期も周辺に商家は少なく、毛矢町通り(現在のフェニックス通り)も狭い砂利道に過ぎなかった。毛矢町界隈が市街地化していくのは、道路網の整備が進んだ大正期以降のことである。

開店翌年の1907(明治40)年6月20日、江守家は子宝に恵まれる。開店を祝うかのように生を受けた男児は、清喜(きよき)と命名された。清にとっては待望の男児誕生であった。その喜びと、父親の清の喜びとなるようにという願いが、清喜という名に込められていた。江守薬店は間口三間の小さな店であったが、ここが江守商事の原点であり、100年の歴史の出発点となったのである。

創業者・江守清の足跡

江守商事の創業者江守(旧姓大平)清は1875(明治8)年2月16日、福井県今立郡西鳥羽村(現在の鯖江市鳥羽)に大平弥平の三男として生まれた。大平家は松平藩の中

級武士として由緒ある家柄であった。

しかし、日本中の数多くの武家がそうであったように、大平家は維新後に困窮な生活を余儀なくされた。そのため、1893(明治26)年1月、17歳の清は一念発起して大阪へ旅立った。縁故を頼って大阪市道修町2丁目(現在の大阪市中央区道修町)の薬種問屋・田畑利兵衛商店に住み込みの丁稚奉公に出たのである。いつの日か薬種商として身を立て、誇り高さ大平家を再興すること。それが清の願いであった。

道修町は江戸時代から国内最大の薬市場として発展してきた地域で、清が奉公に出た明治中期にも、表通りには数多くの薬種商が軒を並べていた。当時、丁稚奉公に出るのは小学校を卒業してすぐの10代前半の少年たちが多く、17歳で入店した清には何かと気苦労も多かったと思われる。しかし、清は生来の真面目さと武家の誇りを支えとして懸命に働き、薬種商としての仕事を覚えていった。

数年間の丁稚奉公を終えると、手代、番頭へと昇格していくのが一般的で、優秀な番頭にはのれん分けも許されていた。ちなみに、田畑利兵衛商店からのれん分けを許された者に、藤沢薬品工業株式会社(現アステラス製薬株式会社)の創業者藤沢友吉がいた。藤沢は清が入店した翌年の1894(明治27)年に独立しており、清にとっては目標となる大先輩であった。

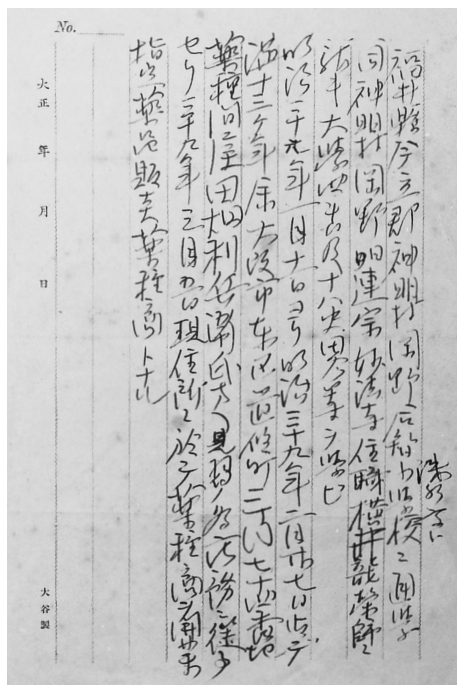
修行中の1900(明治33)年、清は遠戚の江守家の名跡を継ぐことになった。江守家の弥十郎・キヨ夫妻が相次いで死去し、清が養子として江守家を相続したのである。江守家も旧松平藩士の士族であったが、大平家と同様に維新後の生活は厳しく、相続時に財産らしきものは何も残っていなかったという。

江守清喜は若き日の父の軌跡を次のよ

うに記している。

「…農工商より高しとする士族意識がまだ根強く残っている明治二十年代に見知らぬ他郷とは言え恥も外聞も捨てて丁稚小僧から振り出しについたのである。経済界は明治二十年、三十年代大躍進を続け薬品類の相場は変動含みながら上昇を辿り業績は好調を続け、当時は明治二十七、八年日清戦争、三十七、八年の日露戦争、未だ嘗ってない戦時下、且つ父の誠心誠意ある精励振りも高く評価されたのであろう。早く番頭になり、次いで店全体を支配する支配人に抜擢されたのである」(日刊福井『私の走馬燈』=1978(昭和53)年7月1日付より)

1906(明治39)年2月、清は13年間勤めた田畑利兵衛商店を退職。結婚間もない妻ゆきをととも福井に帰り、念願だった薬種商を開業した。江守家には清の直筆による履歴書が現在も残されている。



江守清直筆の履歴書

「福井県今立郡神明村岡野、浅水高等小学校に通学、同神明村岡野日蓮宗妙法寺住職横井龍栄師に就き大学四書及十八史略等ヲ学

Column

明治から大正期の 薬業界

日本に洋薬が本格的に輸入されるようになった契機は、1877(明治10)年秋のコレラ流行であった。コレラの予防には石灰酸が有効ということから、洋薬が脚光を浴びたのである。老舗の薬種商の中で、いち早く洋薬の輸入に力を入れ始めたのが田辺、武田、塩野義などであり、洋薬への対応がその後の発展につながっていった。江守清が大阪で修業していた明治中期は、次第にドイツを中心とする洋薬が市場で台頭してきた時期であった。

大正期に入ると、国産の新薬が台頭してくる。1914(大正3)年の第一次世界大戦勃発により、ドイツからの薬品輸入が途絶え、国内で新薬の開発を余儀なくされたからであった。製薬会社は競って新薬開発に取り組み、次々と国産の新薬が上市されていった。そして、国産新薬は人々の生活に浸透し、大正期には薬の大衆化が急速に進んでいったのである。



比、明治二十六年一月十一日ヨリ明治三十九年二月二十七日迄満十三年余、大阪市東区道修町三丁目七十四番地薬種問屋田畑利兵衛方へ見習ノ為店務ニ従事セリ。三十九年三月五日現住所ニ於テ薬種商ヲ開業、指定薬品販売薬種商トナル

江守家は福井の空襲、震災で家財道具一式を焼失したが、不思議なことにこの履歴書は焼けずに残され、江守家の家宝となっている。

真摯な商売で顧客の信用を高める

江守薬店は小売りだけでなく卸売りにも力を入れていた。当時の毛矢町界限はまだ商業地ではなく、小売りだけの商売は不向きな土地柄だったからである。卸売り



母ゆきをと幼き日の江守清喜(右)

の得意先には足羽、丹生、今立といった郡部の開業医や酒造業者が多く、清は大きな医薬品や防腐剤の荷を背負い、徒歩や自転車で客先への配達を行ったのである。

江守清喜は自らの幼少期、すなわち大正期の江守薬店、そして父母の記憶を次のように回想している。

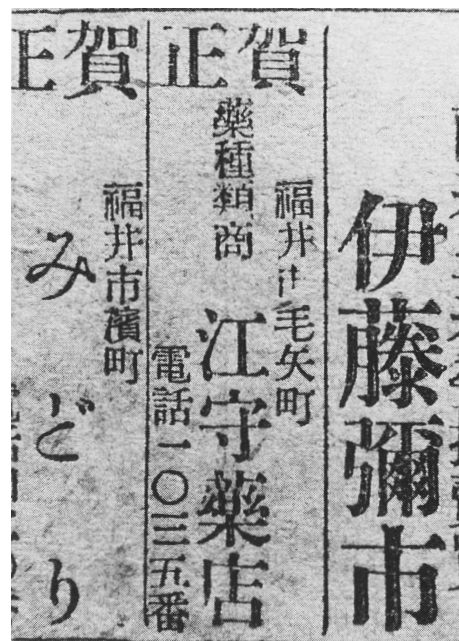
「…父と母が小さい店を興し、母は店の拭掃除から台所まで一切を切り盛りし、私が幼少の頃、豊さん、巧さん、要さん等、僅かの店員のおつた事は覚えておるが、兎に角僅かな人手でコツコツと店の経営に当たっておられたのである」(社内報『きずな』第9号=1976(昭和51)年発行より)

「…初めのうちは薬剤を背負って一軒、一軒、注文を受けたり配達をやったりで、やがて自転車が普及し始めたので私も休み毎これを手伝った。何分にも販路が広いので、四ヶ浦などへ行く時はまだ明けやらぬ夜半に起きて店を出て、その日は四ヶ浦に一泊して帰ってくるという状況で、子供心に父の努力、店員の苦勞がしのばれた」(日刊福井『私の走馬燈』=1978(昭和53)年7月2日付より)

「…店は外見では普通の『くすり屋』である。尚その他に煙草、ビール、サイダーも取扱っていた。三間間口であり畳敷である。(中略)売り上げの半分が『帖づけ』でありこれが洗濯石鹼一ヶ五銭、ピッキリ膏絆創膏一寸(約三センチ)五銭、洗濯ソーダ百匁五銭と云う状態、バット七銭、敷島十五銭、朝日十三銭、と云う具合、これ等が大半帖づけである。帖づけは当時二ヶ月分をまとめて請求する。これを切期と称し切期の前に請求書づくりをせねばならない。父は毎切期に二日ばかりで筆で一品一品巻紙に書いたものである。今から思えば大変な労働であり不合理きわまるものであったが、これが大正時代の商売人の商習慣であった。(中略)店の看板は時代調の部厚い縦長の板造りで可成り重い、それを朝かけ夜

おろす、店の中も金箔が光るギョウギョウしい看板ばかり、ただ私は当時我家は『くすり屋』としては威厳のある店だったと自負していた事をよく覚えておる。と云うのは、当時既に薬屋は小間物屋化、雑貨屋化して店の中がいろ色な品物でごったがえしチリ紙もあれば化粧品もあると云う状況であった。江守では、煙草だけはあるものの厳然として品格のある薬種商であった」(社内報『さずな』第1号=1971(昭和46)年発行より)

こうした清喜の回想からは、士族の誇りを失わず謹厳実直に商いの道を歩んだ清の姿が浮かぶ。当時、新聞広告を活用して積極的に宣伝を行う薬種商が多かった。しかし、江守薬店は元旦の年賀広告以外に目立った宣伝は行わなかった。清の謹厳実直な性格によるものであろう。江守薬店は真摯な商いによって、次第に顧客の信用を得ていったのである。そして、清の商いに対する姿勢は、清喜が家業を受け継いだ後も確実に継承されていくことになる。



1925(大正14)年元旦日の福井新聞広告

江守清喜、家業を継ぐ

江守清喜は足羽小学校から旧制北陸中学校を経て、1925(大正14)年に大阪薬学専門学校(現在の大阪大学薬学部)化学科に進学した。清喜が薬学を専攻したのは、もちろん家業の相続に備えるためであった。

清喜が同専門学校3年に在学中の1927(昭和2)年11月23日、清は52歳で不帰の客となった。清はその年の夏頃から狭心症と腎臓病を併発し、病床に伏していた。清は酒好きで毎晩のように二合から三合の晩酌を楽しんでおり、それが自身の健康を害する要因になったと思われる。

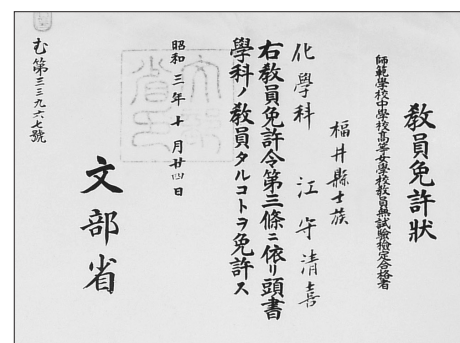
清喜にとっては早すぎる父の死であったが、清は自分の死を予期していたのであろう。病に倒れて間もなく、義弟の田賀政太郎(妻ゆきをの実弟)を店に迎え入れた。政太郎は当時、岐阜市の丸三染練に勤務していたが、清喜の後見人として店主代行の任を託されたのである。

清喜は1928(昭和3)年3月に大阪薬学専門学校を卒業し、同年4月から名古屋歩兵第6連隊に衛生部幹部候補生として入隊。10カ月間の軍務に就き、1929(昭和4)年1



田賀政太郎。清喜は田賀を“あんさん”と呼び、公私ともに深い信頼を寄せていた

月に除隊した。福井に戻った清喜は家業を継ぎ、江守薬舗(昭和初期に改称)の新しい店主となった。清喜が除隊して実家に戻った日、江守薬舗の店先は金屏風で飾られ、青年店主の門出を祝ったという。この年、清喜は若干22歳であった。



江守清喜の教員免許状



江守清喜の薬剤師免許証



名古屋歩兵第6連隊に入隊当時の江守清喜＝1928（昭和3）年4月

Column

江守清の 思い出

創業者である江守清が没してすでに80年近くが経ち、生前の清を知る人もほとんど現存してはいない。しかし、わずかに残された資料からは清の人物像をうかがい知ることができる。長男の江守清喜は父の人となりを次のように記している。

「父は武士の商法と云うのか、まことに真面目であり節度正しく質素であり社交には礼を重くし、すべてについて日々はキビシかった。特に（先祖の御恩）が口ぐせで何か事があれば（御先祖に相すまぬ、御先祖に申し訳ない、又先祖のお蔭である。）が全く私達の身に付いておった」（社内報『きずな』第1号＝1971（昭和46）年発行より）

「父は大変な親孝行の人であった。私の子供の頃、年に二、三回は、祖母（父の母親）に来てもらった、その時の母親を父が大切にされたことは、子供の私にもよくわかった。又父と母親の二人が夜中にいたるまで長い長い話をしておられ、とてもつきない様な夜が何回も何回もあったことを覚えておる。父はこれが何よりもたのしいことであった様だ。（中略）父は、ひたすら昔の大平家を、再建復興するのが念願であった。そして母親に喜んでもらえるのが唯一の父の喜びであり、楽しみであり、満足でもあった様である」（社内報『きずな』第2号＝1972（昭和47）年発行より）

「父は士魂商才の人と言うか、先祖は武家の血を引き信念の人であり、真に真面目な人柄で、曲がった事は絶対にきらいな正々堂々たるものがあつた。仏教信者として日蓮宗信仰の人であり涙ぐましいばかりの至孝の人であり、常に己を持するに厳」（社内報『きずな』第9号＝1976（昭和51）年発行より）

より）

また、清の甥にあたる大平主馬之助は次のように述懐している。

「…清氏は一口に言って剛直そのもので、変人ともとれる人であった。反面非常に誠実で、これがあるために商人に向かない人に見え乍ら多くの長くつき合う顧客をもった。当時県庁の役人といえ安月給で煙草銭さえあればよいという地方の名宝家の子弟が多かった。江守の店へこれ等の何人かが退庁の途上毎日のように来て、店主との懇談を楽しんだ。（中略）叔父は当時世間一般のことであるが、清喜氏にとっては恐い存在であり、傍目にも二人の間に対話らしいものはなかった。或る時、当時大阪の薬専に在学中であった清喜氏からの便りを読んで、叔父が涙を流しておるのを見たことがある。後日このことを清喜氏に伝えたところ、非常に感動していた」（『追想江守清喜』＝1987（昭和62）年発行より）

江守家と親交が深かった元セーレン社長の黒川誠一は、幼年時代に見た清の印象を次のように振り返っている。

「昭和の初めのころ、私は木田の自宅から毛矢町大通りを通して毎日通学しました。大通りと言っても、自転車はやっとすれ逢える程度の舗装もされない土の道でした。江守薬舗はちょうど今の江守商事さんの向かい側に東向きに立っていて、現社長のお祖父さんが店に端然と正座して居られるのをしばしばお見受けした。子供心に大変謹厳なお方とお見受けしていました」（『江守商事八十年史』＝1987（昭和62）年発行より）

2 Chapter2 章

激動の 昭和の中で

江守清喜は染料販売を強化する一方、日華化学を通じて化学品の製造にも進出。販売と製造の両分野で業容を拡大していった。しかし、戦況の悪化で事業は苦境に陥り、ついには福井大空襲によって甚大な被害を受けてしまう。それでも終戦後、新しい時代の到来とともに、江守清喜は再び商いの道を決かな足取りで歩み続けていった。



昭和30年代前半の江守商店店舗

信仰を支えとして

1929(昭和4)年4月、江守清喜は江守菓舗の店主となった。後見人の叔父・田賀政太郎の指導と協力を得ながら、実業の世界に足を踏み入れたのである。

年号が大正から昭和に変わってから、金融恐慌による不況や張作霖爆殺事件、治安維持体制の強化、さらには世界恐慌が発生するなど、内憂外患の出来事が相次ぎ、時代の空気は重苦しさを増していた。この時期、父の死によって凶らずも店主となった清喜青年の胸の内には、言いようのない不安感が募っていたと思われる。

そんな清喜に勇気を与え、以後の生涯を通じて心の支えとなったのは、日蓮宗への信仰であった。清喜は1930(昭和5)年5月、母ゆきをの勧めで日蓮宗総本山の身延山(山梨県南巨摩郡身延町)に参詣する。母ゆきをは夫清とともに熱心な日蓮宗信者であった。

清喜は福井の日蓮宗信者の代表者たちの一行に加わり、汽車で身延山に向かった。当初は信者たちに違和感を覚えたが、車中で日蓮上人伝を読み、信仰の話を書くにつれて考えが変わっていった。そして、参詣当日を迎えたのである。

「…その日直に型通りの御開扉、御真骨堂を巡拝する。御真骨堂は当時堂の内に入りぐるぐる廻りながら拝んだ。「何ゆえにくだけし骨の名残とぞ 思えばそでに玉と散りける」車中読んだ御祖師様のお骨が今、まのあたりに拝めるではないか、大難四ヶ度、小難数知れずの御苦難、茫然として泣いた。涙、滂沱の如し。私は涙のあふれ出るのを止め様がなかった。全く有難かった。この感激が深く私の心をとらえたのであろう。これが私の入信の大きい転期となったのである」(社内報『きずな』第2号=1972(昭和47)年発行より)

大きな感動を胸に抱き福井に戻った清喜は、間もおかず福井県南条郡南越前町西大道に、福井における日蓮宗の指導者である沢崎弥三郎師宅を訪ねて、教化を受けた。そして、沢崎師との出会いにより、清喜の日蓮宗への信仰は決定的なものとなった。清喜は沢崎師を親様(おやさま)と呼び、強い尊崇の念を抱いたのである。

「…私は一步一步修業を重ねさせて頂いた。ただ私の行は他の方から見れば誠に慚愧に堪えないものながら私は私なりに小さく一步一步親様の教えをいただいたものである。私は幸にして親様の御教化に依り信仰を得、信仰を基として事業の在り方、己が行くべき道も覚り、一面又たえず反省、懺悔をさせていただいた」(社内報『きずな』第3号=1972(昭和47)年発行より)

以降、清喜には数多くの試練が待ち受けることになる。清喜がそれらを乗り越える原動力となったのは、青年時に得た厚い信仰心であった。



沢崎弥三郎師。福井を代表する宗教指導者として、現在も数多くの信者から尊敬を集めている

Column

親様と
江守清喜

本文でも記したように、江守清喜は親様・沢崎弥三郎師との出会いにより、信仰の道を歩み出した。清喜は親様と敬った沢崎師への思いを次のように記している。

「…私は一生の目的として立派な実業家になりたいのが私の希望でありますと申し上げると「子供は大きくなったら兵隊になって陸軍大将、海軍大将になりたいと言うのが口癖じゃがの」とお笑いになった。然し私はこの度の身延山へお詣りしてしっかり御利益を頂戴して来た。「よかったよかった」とお喜びになり、これからはチョイチョイここへおい出なさいと言われた。(中略)私は大変な良き因縁に恵まれた。若くしてこの立派な指導者に教化を受けることが出来たのである。私はこのお経を拝すたびに不思議な御縁を以って今生に親様に遇い奉り得た事を心から有難く思う。これも亦倫に御先祖の余恵であろう。幸いにして我人生を力強く然も明るく希望に満ちて闊歩し得る事が出来た。親様の御教化は日々の報恩感謝であり人にはいつくしみであり、喜びであり勿体なさであり、修行の



江守清喜が心の拠り所とした妙見山歎喜寺。1945(昭和20)年1月18日に火災で本堂と庫裡が焼失した。江守清喜の尽力もあり、1981(昭和56)年に本堂が再建された

要は自己の完成である」(社内報『きずな』第3号＝1972(昭和47)年発行より)

清喜は、1931(昭和6)年に福井立正青年会を創設。初代会長となって「全身これ信仰のかたまり」と自称するほど熱心な活動を続けた。しかし、1934(昭和9)年5月13日、沢崎師は53歳で急逝する。悲嘆に暮れた清喜であったが、沢崎師から受けた数々の教えは確かに清喜の心に継承されていった。翌年、沢崎師の後は小川辰治師に引き継がれた。小川師は妙見山歎喜寺を開いて教化の道場とした。

清喜も事あるごとに同寺へ赴き、自らを省みることを欠かさなかった。その後、福井大空襲、大震災で被害を受けた江守家の菩提寺である妙長寺、歎喜寺の再建にも檀家総代として先頭に立ったほか、福井立正会の設立にも尽力した。また、仕事よりも仏事の日程を優先し、朝夕の勤行や月参り、厳寒の参籠等も欠かすことはなかった。その様を江守幹男(現会長)は次のように振り返っている。

「“経営即仏道”とよく口にしており、仏事を優先することが企業の繁栄につながると心から思っていた。自分を律して仏事に励む様子は、まさに宗教者、求道者の趣があった」

戦中戦後を通じ、清喜には幾多の困難が襲いかかった。しかし、その度に清喜は強靱な精神力で活路を見出していく。若きに日に得た信仰が清喜を支え、力の源泉になっていたのである。

方になってくれたと推察できる。

1932(昭和7)年に毛矢町通りの改修工事に伴い、店舗を現在地に移転。この年の5月には大平百合子と結婚し、公私ともに充実した日々を送っていた清喜であったが、1933(昭和8)年6月に田賀が悪性胆毒で急逝する。清喜は叔父の死を次のように回想している。

「…叔父は立派な人柄であり、良き協力者であり、良き指導者でもあった。生者必滅会者常離は世の習いとは云え家に帰って四年後この叔父と別離せんとは、私には、大きい痛恨事であり、深い悲しみであった」(社内報『ぎずな』第2号=1972(昭和47)年発行より)

深い感謝の念を表すかのように、清喜は政太郎の葬儀万端を取り仕切った。故人が地元の在郷軍人会の役員を務めていたことから、野辺の送りにには在郷軍人会音楽隊が先頭を歩く細かな配慮も見せた。幼い遺児たちには「今日からは自分が父親代わりになる」と話しかけたという。

この年、清喜は26歳。事業家として独り立ちし、さらなる事業の発展に邁進することが、叔父の恩義に報いることであり、最大の供養でもあった。

順風満帆 ～事業の拡大と発展

1939(昭和14)年7月、福井県地方課は同年9月施行の貴族院多額納税者選挙における互選人資格者名簿を発表した。県内全域では100人の名前が掲載され、その中に江守清喜の名前もあった。同時期に福井県報で公示された清喜の納税額は別記のようなものであった。

この時期は、後述するように宮下精練剤工業所への経営参画、日華化学の設立と、

Column

人絹王国福井、 染色王国福井

福井県の繊維業界では、大正末期から昭和初期にかけ、それまでの主力であった羽二重から人絹への転換が急速に進んだ。既存の絹織機がそのまま人絹織機に転用できたことに加え、繊維産地として長年培われてきた製織技術が人絹生産に応用できたからであった。

1932(昭和7)年には福井市内に世界で初めての人絹取引所が開設され、1937(昭和12)年には近代的ビル「人絹会館」が開館。1938(昭和13)年には県下の人絹生産量は全国の70%近くを占めるに至り、福井は自他ともに認める“人絹王国”としてその名を日本中に響かせたのである。

また、人絹産業の隆盛は、福井の染色加工産業の発展にも結びついた。輸出用羽二重の全盛時、染色加工は輸出地の横浜や京阪地区で行われていたが、1923(大正12)年の関東大震災で横浜の染色工場が壊滅したことをきっかけに、県内で染色加工を行う動きが加速していった。1930(昭和5)年には県内の染色加工業者が福井輸出染色同盟会を結成(翌年に福井県輸出織物染色工業組合に改称)し、品質向上と加工数量の割当を進め、業界そのものが著しく発展するようになった。そして、福井県は全国の輸出人絹染色加工の約50%を占め、“福井染”として全国屈指の染色加工地となったのである。

製造分野への進出を果たしており、業容の拡大が一層進展していたのである。

- 直接国税総額 金1010円89銭
- 納税細別
 - ・地租
 - 94円72銭
 - 納税年間 昭和13年6月2日～昭和13年12月31日
 - 94円72銭
 - 納税年間 昭和14年1月1日～昭和14年6月1日
 - ・営業収益税 但シ 商業ニ付納ムルモノ
 - 141円60銭 (昭和13年分)
 - 218円82銭 (昭和14年分)
 - ・所得税 但シ 商業ニ付納ムルモノ
 - 714円57銭 (昭和13年分)
 - 1107円14銭 (昭和14年分)

戦前、貴族院多額納税者選挙の互選人資格者になるということは、その地域を代表する資産家であることの証でもあった。父の残した小さな薬局を受け継いで10年、清喜は30代そこそこの若さで名実ともに福井有数の実業家になっていたのである。

昭和10年代に入ると、江守薬舗の事業は染料、工業薬品関連の販売が中心となっていた。染料は大阪の岡本染料店、工業薬品は京都の前田商店が主な仕入れ先であり、それらを酒伊繊維工業（現サカイオーベックス）、福井精練加工（現セーレン）、浦瀬染工場（現ウラセ）、丸三染練工場、第一染色整理工場、昭和染色などに納品していた。当時、染料と工業薬品の月の売上は10万円を超え、従業員も10人前後になっていた。住み込みの店員は閉店後も帳簿の整理などの残務に追われ、深夜まで働くことが当たり前であったという。

工業薬品の製造に乗り出す

これまで記してきた通り、江守薬舗は医薬品の販売から染料、工業薬品の販売へと業態を転換し、昭和初期から急成長を続けていった。しかし、江守薬舗は販売という業態にとどまらず、製造分野への進出を果たすことになる。

その第一歩は、毛矢町にあった宮下精練剤工業所への経営参画であった。1938（昭和13）年5月、江守清喜は懇意にしていた同工業所の経営者、今井寿雄から相談を受ける。日中戦争の激化によって、製造している亜硫酸ソーダ液やロート油の原料となるヒマシ油等が入手困難になったため、自社の閉鎖、売却を検討しているとのことであった。清喜は次のように回想している。

「…私は今日迄の歴史ある工場を閉鎖とは何事ぞ、と力付けこれが経営に乗り出したのであるが、幸か、不幸か今日に至る礎えと成ったのである」（社内報『きずな』第5号＝1973（昭和48）年発行より）

清喜は今井を励ますとともに、自ら経営に参画することで、宮下精練剤工業所を再建しようとしたのである。清喜は大阪薬学専門学校出身であり、技術開発や製造といった分野への興味、関心が非常に高く、宮下精練剤工業所の再建には並々ならぬ熱意で取り組んでいった。

清喜はまず、同工業所が製品の90%を福井精練加工（現セーレン）に納入している形態を改め、江守薬舗の事業で培ってきた仕入れルートや人脈を活用し、販路の拡大と新製品の開発を進めた。

「…私は早速各工場に働きかけ、油剤（主としてロート油、モーポール油、デザイズ、ホワイト油）の他簡単な製薬を始めた。第一着手



戦前(昭和14年頃)の江守薬舗店員。後列左から木内繁、平佐多晶、土田行男、能登松次郎、前列左から野村三男、杉山健二、本田清治。木内が抱いているのは江守清喜の長女寿恵子

Column

昭和初期の 江守薬舗

1931(昭和6)年に入社した平佐多晶(故人、元代表取締役副社長)は昭和初期の江守薬舗の様子を次のように回想している。

「昭和の始め頃より従来の絹織物(羽二重)から人絹織物に変わりつゝあり店もこの頃から化学品、工業薬品、染料を取り扱うようになったのであり、当時としてはかなりの勇断であろう。その度に看板も何回か変っている。私が入社したのは昭和六年である。その頃はまだ店の看板は江守薬局の時であり現在の太味谷道具店の南隣にあり間口三間の小さな店であった。店には売薬、和漢薬、煙草が並べてありその奥の方に薬局があつて一部染料もその前に置いてあつた。店員は木内繁(関東工場)、中村清一(戦死)、小生と三人であつた。毛矢町通りも現在のような大通りでなく三間位の道幅でありデコボコの砂利道で毎日朝晩水をまくのも仕事の中でありそれをやらないと店の中が埃で真白になってしまうのである。現在のようにどんな田舎道でも完全に舗装されている状態に比べれば大変な変わり方である。当時は便利な自動車もなく機動力はすべて人の力である。お得意先への配達には自転車リヤカー、荷車であり、芒硝、洗曹達、晒粉(その頃は現在のように染色助剤とか精練剤、柔軟剤な

どなかつた頃で染色は芒硝で固着、精練や晒は、石鹼と洗曹達、晒粉位で処理されていた)等かなり重たい物を荷車、リヤカーで砂利道を運ぶのは大変な労働であつた。時代が違うとは言え今の若い人にやらせたら一日で顎を出してしまうのではなからうか。その頃から福井も絹織物から人絹織物に変わり機屋も加工場も織物商社も全盛時代に入り遂に織物王国と呼ばれるようになったのである。今の機屋も染屋も商社も其の夢が忘れられないのではなからうか。我が社も織物の生産が増えるに伴って加工される染料工業薬品が飛躍的に伸びたのである。当時の一ヶ月の売上は十万円を越えたと記憶している」(社内報『きずな』第9号=1976(昭和51)年発行より)

が硝酸石灰(塩縮加工剤)であり、幸いに二大工場から大量の注文を受けたのである。四斗ガメに硝酸を仕込み石灰を入れ、亜硝酸ガスの息がまる黄煙の中をかき混ぜた事、特に神明祭のハヤシ方で福井中が殆んど休みの日を一生懸命操業した事等、実になつかしい思い出である」(同前出)

文中の二大工場とは、福井精練加工(現セーレン)と酒伊繊維工業(現サカイオーベックス)の大手2社であり、宮下精練剤工業所は再建に向けて順調に滑り出していった。

日華化学設立

宮下精練剤工業所は1939(昭和14)年5月、社名を合資会社日華化学工業所と改めた。それには次のような経緯があった。

1938(昭和13)年の秋、中国・天津から日置なる人物が江守薬舗を訪れ、大量の塩酸を注文した。江守薬舗では原価5円20銭の1斗入2瓶の箱詰めを25円で受注し、100箱を天津に送った。2カ月ほどして日置が再訪し、100箱を追加注文した。天津で水害が発生し、先の購入分が流出してしまったというのである。日置は相当に困っている様子であった。清喜が塩酸を何に使うのかを尋ねると、塩酸はアミノ酸製造の原料に使用されていた。中国大陸ではアミノ酸の需要が高く、主原料の大豆とソーダ



1941(昭和16)年9月、合資会社日華化学工業所は日華化学工業株式会社となった。その当時の事務所と従業員たち。前列右から5人目が江守清喜

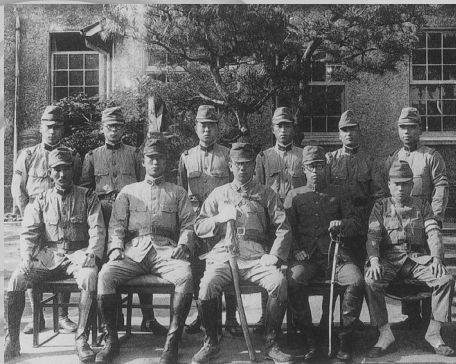
Column

帝国陸軍少尉 江守清喜

鯖江陸軍病院に衛生材料科長として赴任した江守清喜は、その穏やかな人柄で病院内の堅苦しい雰囲気とを和ませていたという。また、軍人らしからぬエピソードがいくつも残っている。

清喜は福井市内の和菓子屋の主人を軍属として臨時に雇用し、みそせんべいを日曜日に病院の売店で販売させた。当時は菓子類も不足しており、入院患者はもちろん、兵士たちにも大好評であったという。患者の給食にも目を配り、本職の料理人を雇い入れ、給食の質を改善した。一日も早い患者の回復を願う清喜の優しさからであった。

また、自宅から通えることを知らず、盛大な見送りを受けて入隊した手前もあり、しばらくは鯖江市内の妻の実家から通隊していた。将校は帯刀をして通隊するのだが、清喜はしばしば軍刀を自宅に忘れることがあり、その度に当番兵が取りに行く羽目になったという。



鯖江陸軍病院勤務時の江守清喜（前列右から2人目）

灰は現地で入手できるが、塩酸が欠乏している。そのため、アミノ酸の製造ができないうことだった。

そこで清喜は日置に宮下精練剤工業所でアミノ酸を製造し、天津に輸出することを持ちかけた。日置は非常に喜び、即座に商談が成立したのである。清喜は早速、アミノ酸製造の準備に取りかかった。当時、東京に宇式令吉というアミノ酸製造の第一人者がおり、宇式に技術指導を受けるとともに宇式が開発したアミノ酸製造装置を導入し、製造を開始したのである。

これがきっかけとなり、日本の「日」と中華の「華」を組み合わせ、宮下精練剤工業所は合資会社日華化学工業所に改称することになったのである。1941(昭和16)年9月には、日華化学工業株式会社(資本金180万円)に改組し、清喜が社長に就任した。そして、現在地(福井市文京4丁目、当時は牧ノ島)に新工場を建設した。工場から出るアミノ酸と塩酸の臭気が近隣住民の不評を買ったことが移転のきっかけであった。

移転地(現在地)は工業地域に未指定であったため、新工場はアミノ酸の貯蔵庫という名目で建設された。操業当初は隣接する染色工場から水や蒸気の供給を受けていたという。

戦時下の苦境

日華化学の設立により、事業をさらに拡大した江守清喜であったが、戦時という時代の大きな流れに抗うことはできなかった。1937(昭和12)年の日中戦争勃発を機に進んだ産業の国家統制は、1938(昭和13)年に制定された国家総動員法によってさらに強化された。1941(昭和16)年9月には、日華化学がアミノ酸製造で福井県唯一の農

林省中央指定工場に、さらに繊維油剤製造でも軍需省中央指定工場となり、戦時統制の枠内に入ることになった。

同年12月の太平洋戦争開戦に伴って経済統制は厳しさを増し、物資不足は深刻化していった。原料の入手も次第に困難になっていったが、江守薬舗が当時、県下唯一の工業薬品専門店で指定されていたことが日華化学に有利に働き、操業に大きな影響が出ることはなかった。

しかし、1942(昭和17)年の企業整備令により、アミノ酸の製造は福井と石川両県合同で行うという指令が発せられた。清喜はやむなく、金沢市の出島久雄と共同で有限会社中部第二アミノ酸工業所を設立した。資本金18万円のうち、清喜の出資額は4万5000円で、日華化学のアミノ酸製造部門が事実上吸収された形となった。

さらに、日華化学の重要な柱であった繊維油剤の製造も、原料の油不足から大きな打撃を被り、新たに蒸留工場を建設して松根油(松の根から出る油を原料に製造。“勝根油”と呼ばれて航空機の燃料にされた)の製造を行うようになった。

戦局がますます悪化した1944(昭和19)年には、日華化学は軍部の指令により鉄意610工場と改称され、軍需省燃料局に所属することになった。軍部から暁部隊の1個分隊が派遣され、30数名の兵士が操業に加わり、松根油を精製したテレピン油や切削油、潤滑油等を製造することになったのである。

この年の1月には、清喜自身が召集を受け、鯖江陸軍病院の衛生材料科長(階級は少尉)として軍務に就くことになった。日華化学は社長不在となるため、清喜と懇意の間柄であった大阪の木村千里を福井に招き、専務として後事を託した。木村はかつて岡本染料店で北陸地区の営業を担当し

ており、江守薬舗に染料を納入していたのである。

福井大空襲

1945(昭和20)年7月19日午後11時頃であった。米軍のB29の編隊128機が福井市上空に来襲し、約2時間にわたって1万発近い焼夷弾の豪雨を降らせた。福井大空襲である。その日は偶然にも、福井の空襲に備えた対策会議が開催されていた。7月12日に敦賀市が空襲を受けており、軍、県、警察の関係者が集まり、緊急時の対応を検討したのである。江守清喜も陸軍病院の代表者の1人として協議に参加していた。

清喜は会議参加者と夕食をともにし、酩酊状態となって電車で帰宅した。自宅で横になって間もなく、敵機襲来を告げるサイレンが市内に鳴り響いた。以下は清喜自身の回想である。そこには大空襲を体験した者だけが描写できる地獄絵図と、恐怖と絶望、そして歓喜が記されている。

「…市中は右往左往の一大修羅場と化し、正に我福井市は敵の空襲下に曝されるに到った。直ちに仏様と先祖の位牌を包んで母に渡し、八重子(江守商事平佐多専務前夫人)さんと二人に足羽河原へ逃げる様に伝え、私は河



空襲により、焼土と化した福井市内

原の堤防に伏せて空襲の状況を見ておった。また酔が醒めず悠々と眺めていたが、その中、後の福井精練会社へ焼夷弾が落下するに到り、『さてこれは愈々えらいことになった』とようやく酔から醒めた。私はこれ以来、如何なる場合と云えども無茶な酒は飲んではいないと堅く自覚しておる次第である。飛行機は引きつづき引きつづき低空で来襲し、全市へ隈無く焼夷弾を投下した。下の大火災は上の米機に反映し、真赤の大きい翼は全く悪魔の形貌となり心身を震わしめた。私は板垣村より花堂に入り、日赤前を通り木田四ツ辻附近迄来た。(この辺は焼夷弾を受けなかった) 処が私の家附近はまだ焼けていないではないか。前側は既に全焼しており、福井精練附近もドンドン燃えている。『よし、この機会』と猛火の中をまっしぐらにくぐり我家に飛び込んだ。既に途中で誰一人も居ない。ただドンドン燃えるまゝである。私は家の乳母車に秤と云い神棚と云い手当たり次第に積み、自転車一台を横に持ち火の中を真っしぐらにくぐった。今一度今度は裏の倉庫を開け、バケツの水を確かめ、願わくば安全ならん事を念じ、近くにあった自転車に乗り木田四ツ辻附近迄逃げた。既に火はすぐ近くまできておりしかも大風を伴ない猛烈な火勢であった。終生を通じこの時程危険を犯した事はない様に思う。当時私は五十軒余の貸家があり、母は『家賃でも食って行けるではないか、余り手を張るな』が特論であった。既に全部を焼いた住宅も、五つの商品倉庫も今は無く、心の中では『まあよい。敵の本土上陸も愈々近いのだから後か先のことだ』位に考え、何もかも諦め切っていた。丁度竹内(江守商事部長)宇佐美(江守商事部長)と遭い、三人が豊島鉄橋附近へ来たのであった。処がだ、処が我が家の方に倉庫が一棟、巖然として残っているではないか!! 目をこすった。確かに我倉庫である。心は歓喜に変わった。火の中をつき走りつき走り我倉

庫の前に来た。まだ周囲は燃えており倉庫自体を、たきつけている様である。少しでも火を消さねばならない。防火用水の水は全部乾し上っている。やむなく横の下水に流れる泥水を汲みあげかけた。全く夢中であった。幸いに八十部隊の兵隊に手伝ってもらい無事安穩なるを得たのである。ようやく病院の握り飯を食って腹ごしらえをし、日華化学へ向った。福井工専(現福井大学)は全焼である。勿論日華化学も全焼とのみ思い込んでおった。処が在る。在るではないか! この時の私の歓喜も亦例え様がなかった。たゞ落ちるは涙のみであった。真に泣いた。嬉しくて泣いた。この刹那『我まだ在り』と喜んだのである…(社内報『きずな』第8号=1975(昭和50)年発行より)

被害は戦災戸数約2万3000、罹災者約9万3000人、死者約1600人。戸数の焼失率96%、市民の被災者率は93%に達し、福井市内は文字通り焼土と化した。しかし、幸いにも江守薬舗の倉庫1棟と日華化学の社屋は焼失を免れ、戦後の再建に大きく貢献することになるのである。

再建へ

1945(昭和20)年8月15日、戦争は終わった。この年の11月末、江守清喜は進駐軍に鯖江陸軍病院の衛生材料を引き渡し、召集解除となった。江守薬舗の店主、日華化学の社長として、再び事業の世界—自らがいるべき場所—に戻ってきたのである。

この年の10月、江守薬舗は仮店舗を構え、福井市内の事業所の中でもいち早く営業を再開し、焼けずに残った倉庫に収められていた染料や石鹼を販売した。物資不足の折から飛ぶように売れたという。召集されていた従業員も相次いで戦地から復員した。当時の従業員は10人ほどで、次のような業務分担となっていた。

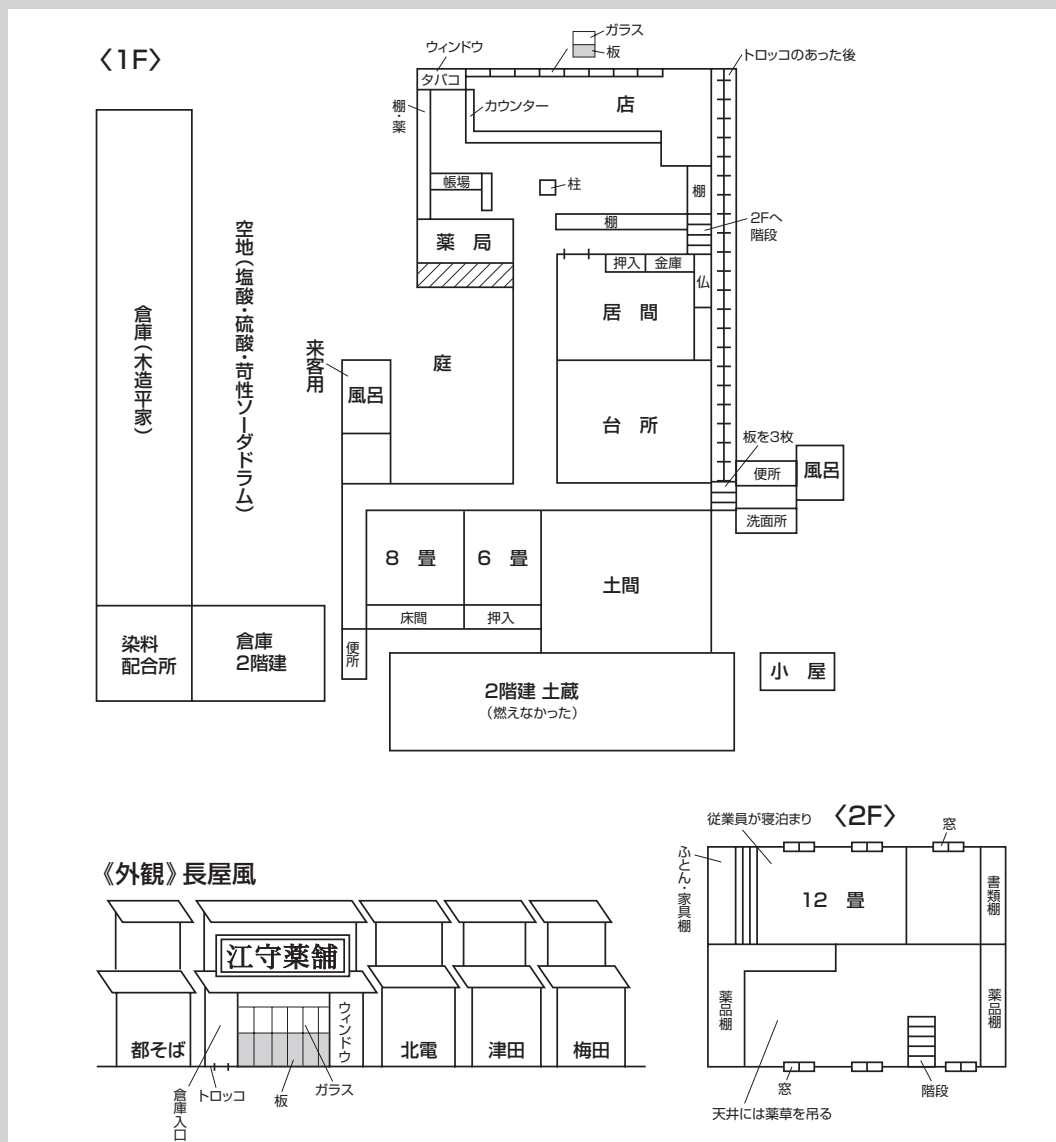
Column

戦前の 江守薬舗店内図

1932 (昭和7) 年、江守薬舗 (当時) は毛矢町通りの改修工事を契機に、現在地へ移転した。

江守家の住宅と店舗を兼ねた当時の建物は戦災で焼失し、写真類も残っていない。

以下の図は『江守商事八十年史』編集時に、当時を知る関係者の記憶をもとに作成された図を再現したものである。



1943 (昭和18) 年頃～焼失まで

店主 江守清喜
番頭 平佐多晶
次番頭 能登松次郎
営業 能登善七、大崎久仁
事務 能登善七(兼務)、
土田行雄、田賀道德
配送 竹内泰治、宇佐美寛、
家接光雄、宝田正之

1946(昭和21)年春には本店舗を建設し、商号も江守商店に改めた。創業以来続けていた医薬品と煙草の販売を廃止し、染料と工業薬品の専門店となった。従業員の懸命な努力もあって経営も次第に軌道に乗り、名実ともに再出発を果たしたのである。

その一方で、清喜は日華化学の再建にも取り組んでいった。終戦直後に高い需要があった石鹼、肥料用の硝酸石灰の製造を通じて、復興へ向けて一歩ずつ歩んでいった。

3 Chapter3 章

度重なる 苦難の果てに

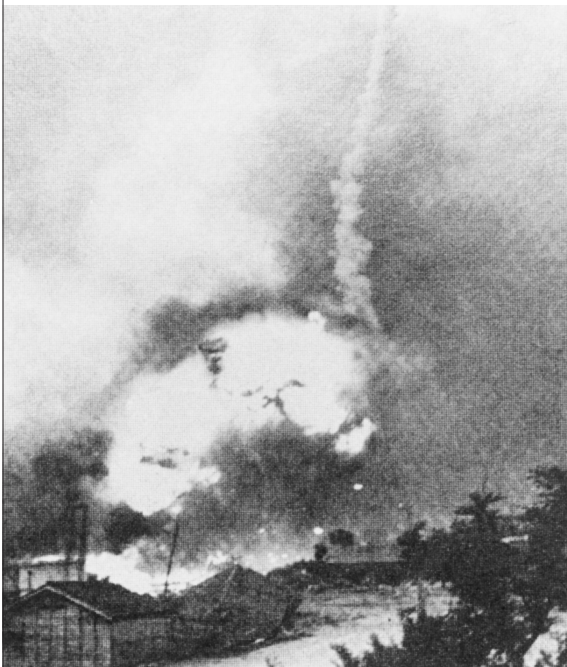
戦後、新生江守商店を度重なる苦難が襲う。大地震と水害により、清喜は家族を失っただけでなく、江守商店、日華化学ともに壊滅的な被害を受けたのである。さらに、日華化学の深刻な経営危機……。しかし、江守清喜は不撓不屈の精神力で陣頭に立ち、従業員とともに苦難を乗り越えていった。



創業50周年を記念して、江守家で従業員とその家族の記念撮影を行った。清喜は祝い事には従業員とその家族を集め、皆で喜びを分かち合うことを常としていた

福井大地震

1948(昭和23)年6月28日。この日は朝から蒸し暑い日だったという。午後5時13分27秒(当時はサマータイム制のため午後4時13分27秒)、福井県を激しい揺れが襲った。震源地は北緯36度8分、東経136度17分、高椋村(現坂井市)末政付近。マグニチュード7.3、震度6の大地震であった。



福井震災により発生した火災で、江守商店のドラム缶が飛上る瞬間。この写真は当時のタイム誌に掲載された

被害は福井県内の1市6郡13町75村(当時)に及んだ。中でも県都福井市が最も深刻な被害を受け、市内は修羅場となった。発生時は夕刻とあって、福井の市街地は家路を急ぐ人で賑わい、多くの家庭では夕食の準備を進めていた。そのため、発生直後から市内のあちこちで火の手が上がり、倒壊した家屋を次々と炎が包んでいった。福井市内では空襲後のためバラック建ての家屋が多く、市内の建物の約90%が何らかの損害を被ることとなったのである。大地震の被害状況は次のようなものであった。

・被害者数	21万4500人
・死者	3848人
・行方不明	10人
・重軽傷者	2万1790人
・家屋全壊	3万3482戸
・家屋半壊	8471戸
・焼失家屋	4162戸

また、この大地震は復興途上にあった福井の産業にも甚大な被害をもたらした。特に基幹産業である繊維産業が壊滅的な被害を受けた。1393の繊維工場が全壊し、全設備の54%を失うことになったのである。

もちろん、江守商店と日華化学も大きな被害を受けた。江守商店は店舗と倉庫が全壊して焼失。さらに店舗前に設置してあった発煙硝酸が発火し、炎は付近へ燃え広がった。日華化学は工場も建物も全壊した。そして、江守清喜にとっても、生涯最大の悲劇が訪れた……。

妻と娘、会社を失う

大地震当日、江守清喜は商談のために大阪にいた。取引先と夕食中に激しい揺れを感じた清喜は、福井で地震が発生したことを知る。「狼の大群に襲われた小羊のような気分」(社内報『さすな』第11号=1978(昭和53)年発行より)になった清喜は、直ちに福井に戻ることにした。以下は清喜の回想である。

「…一路福井をめざして帰路に就いたのは午後八時頃であった。持参のラジオは刻々福井の災害を放送している。福井市は人絹会館、放送局、電話局を残して全滅であり、火災はすでに十五、六ヶ所から出ている。三国は高潮で全滅、隣りの石川県大聖寺も潰滅状態など、電波は次から次と災害の大きさを伝えて来る。私は聴くに堪えず、思わずわが耳をわが手でふさいだ。自動車が京都へ入る手前で、第一回のパンクをした。私はどうしても身体

の震えがとまらない。自分の足の腿を抓ってみた。それでもなんだか夢を見ているようである。『夢なら醒めよ、幻なら消えよ』と念じながら、抓つてみると痛い。確かに現実の出来事だと再確認し、時に煙草を一本、確かに貰つて喫つた。ようやく心は落ち着きを取り戻し、震えが止まった。この時ほど煙草の有難さを身に泌みて感じたことはなかった」(同前出)

その後もタイヤのパンクが続いたが、清喜は帰路で遭遇した福井県の商工課、農林課一行が乗った大型ジープ、福井精練加工(現セーレン)の黒川誠一らの自動車に相乗りをして、ようやく鯖江市(当時は今立郡神明村)の妻の実家に到着した。

そこで清喜を待っていたのは、悲しすぎる現実であった。自宅が全壊し、妻と三女が圧死していたのである。実はこの日の早朝、清喜は大阪から江守商店に電話をかけていた。すると、普段なら店にはいない時間にもかかわらず、不思議なことに妻が電話に出たのである。他に何か用はありませんか——これが清喜が最後に聴いた妻の声であった。

ぶつけようのない悲しみと怒り、そして後悔……身を震わせる清喜であったが、彼にはまだやらなければならないことがあった。再び清喜の回想に戻る。

「…この世には神も仏もないものかという



震災後の江守家。左側のトラックには江守商店の社名が記されている



震災後の江守商店焼け跡。手前の板には連絡先として「岩堀町 平佐多晶」の文字が見える

驚天動地する思いで、この凶報の前にうちのめされたが、私にはこの悲しみを超えてさらに知らねばならぬ事業経営者としての使命が残されていた。それは多数の、わか子同様の従業員が働く店や工場の安否を確かめることであつた」(同前出)

清喜は自分の心に鞭打って福井市内に入った。自宅は倒壊と火災で跡形もなく、江守商店は瓦礫と化していた。日華化学も全壊しており、煙突だけが立っていた。そして、30人ほどの従業員が茫然自失の体で廢墟に立ちすくんでいた。その時の様子を清喜は次のように記している。

「…私は工場のこの様を見て真にふるい立った。『よし復興だ。必ず立派に復興をする。福井の工場の中で一番初めにエントツから煙を出す。私自身の不幸などは取るに足らぬ』と心から下知した。心の底から叫んだ」(日刊福井『私の走馬燈』=1978(昭和53)年7月8日付より)

人間は苦境に立たされた時にこそ、その真価を発揮するという。ならば、江守清喜の福井大地震後の立ち居振る舞いは、清喜が不屈の人であることをはっきりと物語っていた。

再建への歩み

かけがえのない妻と娘、そして江守商店と日華化学のほとんど全てを失ってしまった清喜は、悲しみを復興への力に変えた。江守商店と日華化学を再建することが、妻と娘への何よりの供養になる。清喜は直ちに再建に向けて動き始めた。その姿は当時の従業員たちの胸を打った。

「…帰福されるやあらゆる悲しみを心に秘めて、さあ復興だと自ら陣頭に立たれたのである。私は社長の心中を知り、唯々涙のみ、慰める言葉もなかったのである。物心共に大打撃を受けた社長が、流れ出ずる涙を心の中に秘めて、江守商事並びに日華化学復興に立ち上がったのである。常人にこの勇猛心が起きるであろうか。これこそ真の信仰であり信念の発露であろう。この時、これほど力強い自信にあふれた社長の姿を未だ曾て見たことがなかったと思う」（江守商事元副社長平佐多晶、江守商事創業七十周年記念誌『業務三昧』＝1976（昭和51）年発行より）

「…早速かけつけた会社は廃墟と化していた。もちろん私の家も木端微塵に粉碎された。翌日、私はどうにか形にとどめたものを荷車に積んで明里町の親類へ預けるために呉服町にさしかゝった。その時、九十九橋の方向から一台の小型トラックが進んできた。そして荷台の上には仁王のようにつつ立っている社長の姿があった。悲憤さのたゞよう社長を仰いだ途端、『和田、終つたら出てこいよ！』とするどい言葉が落ちてきた。大隊長の攻撃命令を受けた時のように、私は明日の出社を大声で約束した」（日華化学元取締役和田早苗、同前出）

再建に向けて陣頭に立つ清喜の姿は、従業員を奮い立たせた。江守商店で、日華化学で、全社一丸となった復旧作業が続けられたのである。

相次ぐ苦難を乗り越えて

大地震から1カ月が過ぎようとしていた1948（昭和23）年7月25日、福井市内を流れる九頭竜川の堤防が決壊した。数日前からの豪雨により、地震で亀裂を生じていた堤防がついにその機能を失い、濁流が市内へ流れ込んでいった。市の半分が浸水し、家屋や田畑への被害に加え、電気や通信、交通網も麻痺するなど、地震に続いてまたしても福井市は深刻な打撃を被ったのである。

水害は日華化学を強襲した。バラック建ての仮社屋は関連書類とともに水浸しとなり、残っていた資材も濁流に流された。復興へ向けた努力は文字通り水を差されてしまったのである。

江守清喜はこの惨状を妙見山歓喜寺で知った。震災によって失われた心の落ち着きを取り戻すべく、同寺に参籠していたのである。日華化学の社員から「九頭竜川の堤防決壊、工場は浸水七、八尺余、全く手のつけようなし」と報告を受けた清喜は顔面蒼白となり、身体が崩れるのがはっきりと見てとれたという。

さらに8月2日、新たな悲報が清喜に届いた。生後間もない五女の和子が栄養失調でこの世を去ったのである。この日をもって清喜は参籠を中止して山を下り、再び復興へ陣頭指揮に乗り出した。悲しみと苦難に満ちた現実には敢えて身を置き、仕事に没頭すること。これが自らを支え、相次ぐ苦難を克服していく唯一の道だったのかもしれない。

8月中旬に復興金融公庫が災害地視察のために福井を訪れ、復興資金融資が進展した。日華化学も900万円の借り入れを受け、再建の見通しを立てることができた。

Column

母ゆきをの死

江守商店が福井大地震と水害で甚大な被害を受けた1948(昭和23)年は、江守清喜の42歳の厄年にあたる。この年の3月、足羽小学校の同窓会が戦後初めて開かれ、清喜は開会の挨拶を担当し、次のように述べている。

「厄は役に通じる。これからが社会に世間に本当に役立つ年になった。すなわち役年である。お互いに健康に注意して頑張ろう」

しかし、この年の4月16日朝、母ゆきをが突然の脳溢血で倒れ、一言の言葉も残さぬままに逝った。ゆきをは“女太閤”“福井の女傑”と称されたほど機転が利き、社交的ではない夫の清を支えていた。江守商店の営業部長と呼ばれることもあったという。清喜は母への思いを次のように記している。

「…私は二十一才で父を亡い、四十二才の今日迄一人息子として何不足なく育てられ母の慈しみの下に育てられた。母の総ての力は、ただ私の成長と、如何にして道を踏みはずさざるかに掛けられていた。妻も子もある自分ながら実に淋しかった。終生の悲しみこれに過ぐるものはない。前述した様に、貸家は燃えて無くなったが、私の家には

恒産があった。『あれやこれやと手を出すな、楽に食って行けるではないか』が、母の一つの言葉であった。したがって日華化学の仕事の始めたことを、母としてはあまり賛成ではなかった。私は、何とかして母を一度日華化学へ案内したいのだが、どうしても足を向けてくれない。一個の石鹼、五合の醤油さえ手に入れるのに不自由な此の世に、どんどん石鹼が出来、大量のアミノ酸が造られる。如何に母が喜んでくれることかと思った。たしか三月頃と思う。恒例の会社の慰安会(会場は了勝寺)があり、余興として、従業員の劇があった日である。うまく母を説きふせて会社へ案内した。今井(当時の工場長)さんは工場内を実に熱心に、母に説明していただいた、母も勿論喜んでくれたが翌日からはまたもとの母に戻った。その翌月、母は亡くなったのである、幸いに物資の統制もボツボツ解除になりかけて、多少の供養も出来、また葬式の日はいよいよ恵まれ、盛大に営まれたことはせめてもの慰めであった」(社内報『きずな』第9号=1976(昭和51)年発行より)



江守清喜の母ゆきをの葬儀。当日は晴天に恵まれ、葬儀は盛大に営まれた



建築中の江守商店店舗

そして、9月10日からはようやく江守商店の店舗の普請が始まった。この頃、毛矢町周辺の焼け跡にはバラックが建ち並び、他の商店の多くはすでに営業を再開していた。江守商店が他店より動きが遅れたことには理由があった。地震で火災を発生させ、近隣に迷惑をかけたことに清喜は深い自責の念を抱き、他店が再建を終えるまで普請を遅らせていたのである。普請を終えて開店したのは11月1日であった。

業務三昧

1948(昭和23)年12月8日、日華化学の工場竣工式が行われた。同社の事実上の復興を祝うかのように、この日は晴天が広がり、初冬にしては暖かな一日であったという。地震で倒壊した工場としては、最も早い再建であった。

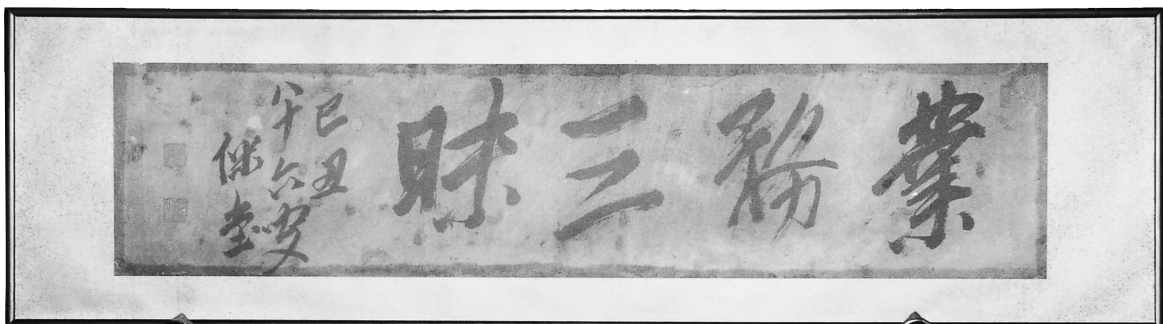
竣工式には、当時の福井県知事小幡治和、福井銀行の市橋保治郎頭取、上坂巖副頭取、福井精練加工(現セーレン)の黒川誠三郎社長など、約80人の来賓が日華化学の再出発を祝った。この席上、86歳の高齢にもかかわらず出席した市橋頭取は工場竣工を我がことのように喜んだ。以下は江守清喜の述懐である。

「…市橋頭取は工場のこの建築の状況を見られ実に喜んで下さった。そして、『あなたからいろいろ報告を聞いていたが百聞は一見にしかず、この復興の姿はあなたの業務三昧の結果であり、且つ従業員一同の自己を滅しての精進の賜物である。これを“日華三昧”と名付けよう』と激賞していただいた。今もなお事務所に掲げてある『業務三昧』なる額は、その時の市橋頭取の感激の書である」(社内報『きずな』第12号=1979(昭和54)年発行より)

以来、“業務三昧”という言葉は、清喜を形容する際に深い敬意とともに用いられるようになった。この額は今もなお、日華化学の創業記念館に掲げられ、社業の発展を静かに見守っている。

1945(昭和20)年の空襲以来、地震、水害と3年余りの間に相次いで過酷な試練に見舞われた江守商店と日華化学は、この日をもってようやく、そして改めて再出発が始まったのである。

地震、水害に見舞われた1948(昭和23)年の江守商店の売上高は4800万円であっ



日華化学の再建を祝って、福井銀行の市橋保治郎頭取(当時)から贈られた「業務三昧」の扁額

た。しかし、翌1949(昭和24)年は1億1800万円、1950(昭和25)年は1億2800万円を記録しており、江守商店の復興は順調に進んでいった。

油脂大暴落で 日華化学が経営危機に

第2次世界大戦後、疲弊した日本経済を急速に回復させるきっかけになったのは、1950(昭和25)年6月に勃発した朝鮮戦争だった。参戦したアメリカ軍が膨大な軍事物資を日本に発注したことが呼び水となり、産業界は“朝鮮特需”と呼ばれる空前の好景気に沸き返ったのである。

日華化学もその恩恵を受け、工場はフル操業の状況が続いた。しかし、その一方で油脂類を中心とした原材料が高騰を続けていた。アメリカ軍が中国沿岸を封鎖したことで、東南アジアからの輸入が滞ったからであった。こうした事態に対応するため、日華化学では相当な無理をしてヤシ油やヒマシ油、牛脂、オリーブ油等を仕入れ、在庫として確保しておくことになった。朝鮮戦争が長期化するという判断からであった。

しかし、1951(昭和26)年になって状況は大きく変化する。アメリカ国内で戦争終結の世論が高まったことを受け、4月には連合軍総司令官のマッカーサー元帥が突如解任。これを機に朝鮮戦争は急転直下、終息へと動き始めた。そして、7月に終結を迎えたのである。

その結果、日本の諸物価は急速に下降線を描き始めた。そして、高騰を続けていた油脂原料も暴落し、日華化学の経営を圧迫することになったのである。高値で仕入れた原料を使って製造した製品は安値でしか売れず、操業すればするほど赤字になるとい

Column

涙の身延山行

1948(昭和23)年、江守清喜は母と妻子を相次いで失った。その悲しみに耐え、気丈に江守商店、日華化学の再建に陣頭指揮をとった清喜であったが、胸の内に秘めた悲しさをはき出した時があった。その年の10月に行った納骨時の出来事で、清喜の回想は次の通りである。

「…十月十五日の夕方の汽車で、母、妻三女と五女、四柱の納骨に山梨県身延山へ出発した。この年の正月『先代までの江守家は子供が少なかったが、今年はまだ生まれるから八人になる。賑やかなことだ、有難いことではないか。』と喜び合った。それが今、肉身四人の遺骨を納めるのである。断腸の思いであった。その日はやや寒く秋風の強い夕ぐれであった。一かかえの遺骨をしっかりと抱えた私は、山から街道へ下りるまで真に大声をあげて泣いた。いくつもの悲しみ、数々の苦しみ、それ等を押えに押えて来たためであろうか、セキが一時にはずされたようである。腹の底から涙が溢れ出た。今漸く工場の建築の見通しも立ち、暫く暇を見ての出発である。いくらかの緩みであろうか。一人も見ておらない。泣きに泣いた。大声も風で消された。地震後のたまりにたまった涙が一時に溢れ出た。それも街道へ出た時には、また元の私に帰った。終生忘れ得ざる悲しい思い出である。妻の死にも、子供の不幸にも、事業の前には淡々としてとらわれない自分を我ながら不思議に思ったのである。これもあまりの出来事に気が立っていたためであろう。然し身中深く秘めた涙があったのであろう。私も人の子である」(社内報『きずな』第12号=1979(昭和54)年発行より)

う悪循環に陥ってしまったのである。この状況を江守清喜は次のように記している。

「…ついに意を決して融資先である福井銀行の佐藤営業部長(前取締役会長)の自宅を訪れて、包み隠すことなく実状を告げて援助を懇請したのは、昭和二十六年四月二十九日のことであった」(社内報『きずな』第14号＝1981(昭和56)年発行より)

清喜の全資産は担保として福井銀行に預けられ、江守商店からの資金援助も実施された。江守商店が顧客から受け取った手形はそのまま日華化学に持ち込まれたという。しかし、それでも経営状態は回復の兆しを見せず、従業員の給料も遅配されることになった。当時、日華化学で営業を担当していた江守幹男は次のように振り返っている。

「私が入社2年目の時に朝鮮戦争が始まり、日華化学は銀行から借入れをしてまで油脂を大量に購入した。油脂の大暴落によって経営が悪化してからは、代理店や問屋に代金の先払いを頼みに回った。そうしないと社員の給料が払えなかった。早めに手形を切ってくれた得意先も多かったが、それでも給料の遅配があった」

8月に入ると、日華化学への資金援助の影響で江守商店の経営悪化が表面化してきた。日華化学が不渡りを出せば、江守商店の連鎖倒産は免れない。まさに最悪の事態であった。この時の心境を清喜は次のように振り返っている。

「…それやこれやで月給は遅配に遅配を重ね、工場は細々ながら煙突から煙を出すという状態で、深い自責感と絶望感から幾度と自決をさえ考えた。その生死ギリギリの限界点において支えとしたものは『今自決したならば、多くの関係者への迷惑は増すばかりである』という経営者としての責任感である。歯を喰いしばってこの困難に辛うじて堪えた」(同前出)

この時期、清喜は各方面に援助を要請するため、車の中で寝泊まりすることもしばしばで、血の小便が出たという。清喜は経営者として、最大の危機を迎えていたのである。

苦渋の決断

極めて厳しい状況の中、日華化学では経営陣による対策会議が開催された。出席者は木村千里(元専務)、品川一雄(元常務)、黒川誠三郎(福井精練加工、元取締役)、滝波清(福染興業、元監査役)、平佐多晶の5人であった。江守清喜は「自分が出席すれば腹の割った話ができないだろう」という配慮から、自宅で待機していた。

席上、江守商店を存続させるためにも日華化学倒産止むなし、という意見が大勢を占めた。しかし、江守商店を代表して出席していた平佐多は強い難色を示した。日華化学が倒産すれば江守商店も倒産は免れないという考えからであった。結局、結論は見出せなかった。

ここに至って、清喜はついに決断を下した。血を吐く思いで出した結論は、大規模な人員整理であった。当時の社員71人のうち、実に36人もの解雇を行うことを決めたのである。ちなみに、解雇対象としたのは、江守家の親類縁者や生活に余裕のある社員ばかりであったという。人員整理が実行に移された日、清喜は会社の玄関前に全社員を集合させた。そして、涙ながらに語った。

「こうした事態を招いたのは、すべて私の責任です。これまで、苦勞をいとわずに働いていただいた皆さんには、何とお詫びを申しあげればいいのかわかりません。しかし、これは一時的な処置と考えていただきたい。会社が良くなれば、必ず皆さんを迎え入れたいと思っていますし、その時はまた日華で働いて欲し

いのです。そのために、私たち残された人間は、歯をくいしばり、あらゆる努力を続け、一刻も早く迎えられる体制を作るために頑張り続けます。本当に、皆さん、有難うございました」(『日華化学創業50周年記念誌』より)

その一方で、再建を支援してきた福井銀行が重役会で最終的な決定を行った。日華化学を切って、江守商店を残す。もちろん、それは福井銀行にとっても苦渋の決断であった。当時、融資担当の営業部次長中村豊(元福井銀行専務)は次のように述懐している。

「…当時銀行としては、何とか融資の方法を考え、会社を潰すなどの意向があった。これは当時の江守清喜社長の誠実さに対する信頼と、福井銀行一行主義に対する銀行としての信義でもあった。しかし銀行には融資規則があり、監督官庁の検査もあり、無条件融資は許されない。万事休すである。その時江守社長は『私の命を担保に』との申し出があったが、それも無理である。しかし江守社長は経営者と事業は一体であるとの信念があり、事業のためには命を賭してとの悲愴な決意が窺われた」(『追想江守清喜』より)

1951(昭和26)年9月7日夜、福井銀行営業部長の佐藤裕治(元会長)が江守商店を訪れ、清喜に銀行の決定を知らせた。……清喜は覚悟を決めた。

起死回生

翌早朝、江守清喜は仏壇の前に正座し、このような事態を招いたことの自らの不徳を先祖にわびた。そして、静かに読経を始めた。心を無にして、ひたすら読経を繰り返す清喜であった。すると、暗闇の中に一条の光が射し込むように、清喜の心に一つの案が浮かんできた。

金の借り入れはできない。ならば、物を借り受けすればいい。つまり、取引先から

Column

戦中戦後の 江守商店

江守清喜の叔父田賀政太郎の二男、田賀道徳(元取締役、現顧問)は、幼少より清喜を「あんちゃん」と呼んで家族同様に育て、1943(昭和18)年に江守薬舗(当時)に入店した。その当時の思い出を次のように語っている。

「当時は清喜氏をはじめ店員の多くが召集されて人手不足だったため、手伝いに行ったことがきっかけで入店することになった。戦中から戦後にかけて、古着を染め直すための染料がよく売れた。当時の店員は江守家に住み込みの丁稚奉公で、盆と正月だけ自宅に帰ることができた。給料は小遣い銭以外は全て貯金され、自宅に帰る時にまとめて渡されていた。日曜になると入場券をもらって映画を見に行くのが娯楽だった。夜遅くに近所の銭湯に行ったが、みんな身体が染料まみれだったため、湯を汚すと嫌がられていた。元日には店員が江守家で雑煮をごちそうになる習慣になっていて、みんな動けなくなるほど腹一杯食べたものだ。清喜氏は仕事に対して意欲的で、それが店全体の雰囲気にもなっていた」



昭和20年代中頃の江守商店従業員。右から2人目が田賀道徳

染料を借り受け、それを染色会社に預けて手形をもらう。そして、その手形を現金化するのである。清喜は直ちに福井銀行に向かい、佐藤にこの案を告げた。佐藤も賛同し、即座に実行に移されることになった。清喜は江守商店の主要な取引先であった長瀬産業と田岡染料に協力を依頼し、両社から1500万円相当の染料を借り受けることができた。長瀬産業が4分の3、田岡染料が4分の1の割合だった。

借り受けた染料を福井精練加工（現セーレン）、酒伊繊維工業（現サカイオーボックス）、福染興業に預け、これを裏付けとして手形化し、それを担保に福井銀行から融資を受けることができたのである。まさに、起死回生の方策であった。その一方で、清喜は日華化学の仕入先に自ら足を運び、支払手形の一時棚上げ交渉をまとめていった。こうして日華化学は倒産を免れ、江守商店も経営の悪化を食い止めることができたのである。

清喜は経営危機を招いた深い反省から、1951（昭和26）年10月に福井銀行取締役の久保義隆を社長に迎え、自らは副社長に退いた。久保は福井県の繊維産業の重鎮であり、清喜は久保の指導や助言を謙虚に仰ぎながら、日華化学の再建に精力を注ぎ込んだのである。

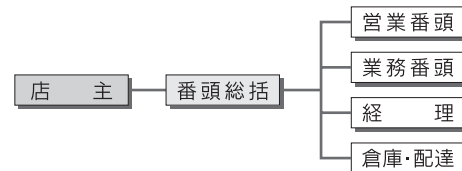
この顛末を振り返り、当事者の一人でもある佐藤は次のように記している。

「…この交渉の成功はその時の江守清喜会長の熱意もさることながら、江守商店と日華化学と関係会社との平常取引が、多年にわたり相互信頼の上にならっていたことによるところが多いと思います」（『江守商事八十年史』より）

清喜が実行した方策は、商売の常道から外れた窮余の一策であった。それでも取引先各社が要請に応じたのは、佐藤が指摘する相互信頼があったからであろう。大量の

組織図

1952（昭和27）年3月現在



染料借り受けを快諾した長瀬産業の長瀬徳太郎社長（当時）は、清喜にこう話しかけたという。

「人間は一生に何回か危機を伴うが、それに挫けずしっかりやってほしい。江守商店をよくするには日華化学を応援することが大切だ。長瀬産業でも極力、日華の製品を売るようにしましょう」

清喜への深い信頼がうかがえる温かい励ましであった。むろん、こうした信頼関係は長年にわたって育まれるものである。清喜が生涯を通じて重視した「報恩感謝」の姿勢が、江守商店と日華化学を救う大きな力となったと言えるだろう。

Column

福井銀行佐藤部長からの 葉書

日華化学の経営危機が深刻化し、江守清喜が自ら命を絶つことすら考えていた時、一枚の葉書が清喜を励まし、勇気づけた。差出人は佐藤裕治。当時の福井銀行営業部長で、後に同行の会長まで務めた人物である。差し出しの日付は1951(昭和26)年の6月10日で、出張で東京に向かう列車の中でしたためられたものである。

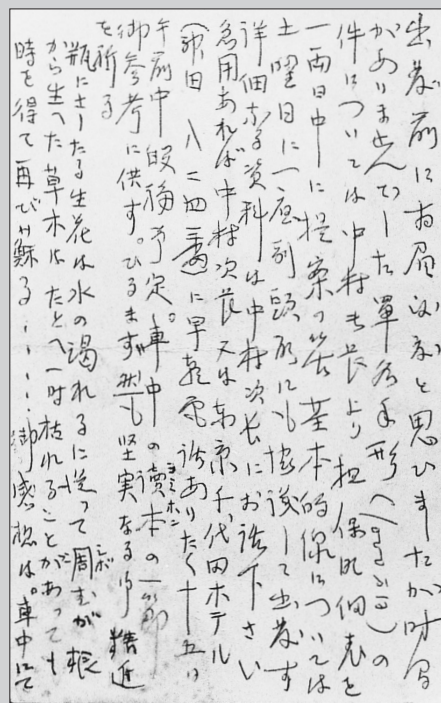
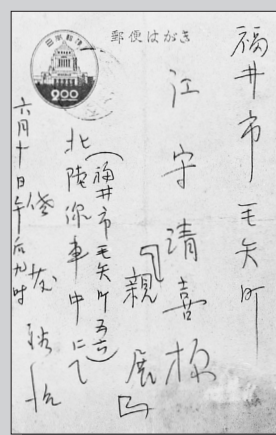
出発前に拝眉致度と思ひましたが時間
がありませんでした単名手形(1000万円)の
件については中村次長より担保明細表を
一兩日中に提案の筈基本的線については
土曜日に一応副頭取にも協議して出発す
詳細なる資料は中村次長にお話下さい
急用あれば中村次長又は東京千代田ホテル
(神田八二四番)に早朝電話
ありたく十五日午前中帰福予定。
車中の讀本の一節御参考に供す。
ひるまず然も堅実なる御精進を祈る

瓶にさしたる生花は水の渴れるに従って
凋むが根から生えた草木は
たとへ一時枯れることがあつても
時を得て再び蘇る……御感想は。車中にて

清喜はこう記している。

「…この葉書が如何ほど、意気阻喪していた私を
勇気づけたことか。私はこれの子々孫々に伝える
べく、家宝として今なお大切に保存しておく」(社内
報『きずな』第14号=1981(昭和56)年発行より)

日華化学の経営危機から半世紀以上が過ぎ、清
喜と佐藤が故人となった今でも、この葉書は江守
家の家宝となっている。



福井銀行の佐藤裕治営業部長(当時)からの葉書。現在も江守家の家宝として大切に保管されている

創業50周年

経済白書が「もはや戦後ではない」と謳い、神武景気が始まった1956(昭和31)年。江守商店は創業50周年を迎えた。戦争、天災、そして経営危機と、相次ぐ苦難を乗り越えてからは事業も順調に推移し、店主の江守清喜をはじめ、従業員一同は感激とともに大きな節目の年を迎えたのである。

4月28日には、福井市内の妙長寺で先祖と物故者に対する報恩感謝の法要が営まれ、翌日には従業員とその家族が江守家に招かれて感謝と慰労の宴が催された。そして、5月17日には創業50周年祝賀宴が開花亭で開催された。清喜がこの宴に招いたのは、長瀬産業の長瀬徳太郎社長、大池、芝山、長瀬の常務3人、林京都支店長、福井銀行の上坂巖頭取、中村、川崎、佐藤の3役員、そして日華化学の久保義隆社長であった。いずれも、清喜にとっては恩人であり、深い感謝の念を抱いている面々であった。清喜はこの宴を次のように回想している。

「…戦災、地震、油の暴落等の数々の苦難をのり切り得ての五十周年である。これ等恩人を前にしての、私の挨拶であるが、感無量、涙澎湃としてとまらず、全く声涙共に下がるの状態であり、如何ともしがたく、トギレトギレの挨拶をした。私の、終生忘れ得ざる感激であり、又、私として本懐之に過ぎるものはなかった」



江守商店(当時)創業50周年記念祝賀会で。右から久保義隆(日華化学社長=当時、以下同)、上坂巖(福井銀行頭取)、長瀬徳太郎(長瀬産業社長)。いずれも江守商店にとって不可欠の恩人である



創業50周年を記念して社員たちに記念品(卓上時計)が贈られた

(社内報『きずな』第16号=1983(昭和58)年発行より)

この年、創業50周年を記念して、江守商店は社是、社訓を明文化した。

これらは清喜の商人として、そして人間としての考え方をまとめたもので、常日頃から従業員に論じていたことであった。社訓と社是は額に入れられ、店内に掲げられた。波瀾万丈の半世紀を経て、江守商店は新たな歴史を刻み始めていた。

社 是

- 一、社会に対する奉仕と責任を使命とし、絶えざる技術の進歩と優秀なる商品を提供し、顧客に最も信頼される商店たること
- 一、企業の永遠の繁栄を計り、従業員が希望と誇りを持ち、一生をかけて悔ゆることなき職場たらしむること
- 一、常に和と礼儀を重んじ誠心を込めて業務に当たり、総ての取引先に対し最も信頼される最良の商店たること

社 訓

和衷協力
誠実勤勉
信用奉仕



創業50周年を迎え、江守家の前で当時の社員たちによる記念撮影が行われた

Column

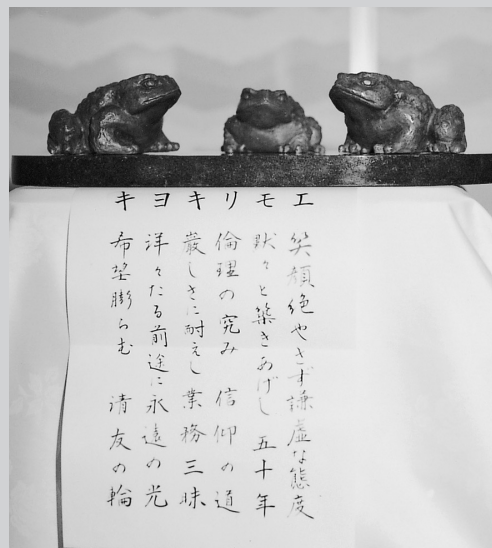
カエルと清喜

1953(昭和28)年9月4日付の朝日新聞「話のバトン」に、江守清喜が「学ぶ“カエルの三徳”」と題して紹介されている。

「私の雅号というほどのことでもないのですが、別名をダイズ(大蛙)というのです。このわけを一つお話ししましょう。私は生まれつきガラガラ声で、カエルが鳴いているのによく似ているんですな。中学時代には“ガワガワ”という余りあいきょうのないニックネームをもらったものでしたが、それが因縁というわけでもないでしょうが、カエルに非常に興味を持つようになったのです。作者は知りませんが古い川柳に“手をついて目は上にあるカエルかな”というのがあります。つまり手をつくのは謙譲を現しているんですな。それにもかかわらず目は上にある。抱負の高いことを示しております。この川柳がたまたま好きなんです。カエルはときどき口から自分の内蔵をとり出して水で洗う習性があるんですヨ。これはザンゲの精神ともいえます。それからカエルが背後とか左右へ飛ぶときには必ずその方向へ向いてからピョンとやる。その間はいささかのゴマカシもない。これらの習性を私は勝手にカエルの三徳と名づけて処世訓にもし、また終生忘れまいと号にもしたわけです。私はいま薬品、染料、塗料など扱っておりますが、特殊な品物なので、ともすると私がしゃべることはサモ学があるように聞えたり、感じようによっては生意気にも受取られがちです。これではまるきり商売になりませんので、常にカエルの三徳を頭に刻んで自分を戒め、店の者に四六時中いい聞かせております。ここへ店を開いて五十年余りになりますが、まアどうにかやってゆけるのは、私のガラガラ声の余得ともいえましょう。ですからあの一見ぶかっようなカエルを見るたびに、一そう愛着の念に駆られるんですな。イヤ、いまで

は尊敬の気持さえ起るんですヨ。チト大げさなと思われるかも知れませんが、私は本気なんです。しかし総ての動機がそうじゃないのですか?じっとその習性を観察すると私どもが歩む人生行路に符節するものがあるって、いろいろ教えられるところが多いのじゃありませんか…」

当時、清喜は46歳。戦災や地震、日華化学の経営危機など相次ぐ苦難を乗り越え、ようやく行く手に光が見え始めていた時期であった。そうした苦境の中にあって、“カエルの三徳”は清喜にどんな力を与えたのだろうか。



1979(昭和54)年6月に開催された経営実務50周年感謝会では、“カエルの三徳”にちなんで3匹のカエルをモチーフにした置き物が清喜に贈られた

第2部

継承と創造と

1 Chapter 1 章

北陸を代表する 商社に成長

1958(昭和33)年5月、江守商店は法人化し、株式会社江守商店として新たなスタートを切った。家業から企業へと進化を遂げる過程で、江守商店は技術商社への脱皮を進めていく。さらに、福井県外の営業拠点の積極的な拡充に努め、北陸を代表する商社としての地位を確立していった。



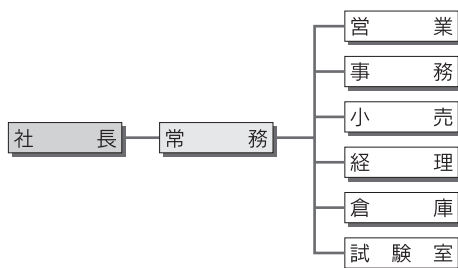
本社新社屋完成時に行われた社員一同の記念撮影。前列中央が江守清喜、同右から5人目が江守幹男

株式会社江守商店

1958(昭和33)年5月26日、江守商店は法人化して株式会社江守商店となった。資本金は750万円、授權資本は3000万円で、社長には江守清喜が就いた。清喜はそれまで「江守商店は家業、日華化学は企業」という考え方を持っていた。しかし、昔ながらの商家の形態では時代の趨勢に取り残されてしまうと判断し、近代企業へ生まれ変わることを決断したのである。設立時の組織体制と役員は次の通りであった。

組織図

1958(昭和33)年5月現在



代表取締役社長	江守清喜
常務取締役	平佐多晶
取締役	能登松次郎
監査役	江守千代子
監査役	樋口福太郎



1962(昭和37)年に完成した本社社屋

この時期、日本経済は神武景気からなべ底不況を挟んで岩戸景気が始まり、高度経済成長の萌芽が始まろうとしていた。



法人化間もない1958(昭和33)年頃の社名プレート

法人化した翌年の1959(昭和34)年度の売上高は前年度から約7000万円増の5億5100万円、1960(昭和35)年度には7億2500万円に達し、江守商店は時代の流れにも乗った順調な成長軌道を描くようになったのである。また、1963(昭和38)年には、「職務分掌及び権限規定」を策定し、企業としての近代化と合理化を図った。

1962(昭和37)年8月に完成した3階建ての本社社屋ビルは、毛矢町通りでは最初の鉄骨建てのビルであり、江守商店の成長の証であり象徴であった。

技術商社への歩み

江守商店は法人化前の1956(昭和31)年、本店敷地内に試験室を開設した。『江守商事八十年史』はその概要について、次のように説明している。

「…昭和31年江守清喜社長は今後の染料販売には、技術の専門家が必要と着眼し、未だ地方の間屋が誰も考えていなかった試験室をつくった。県工業試験場より大家和也(故人)を採用し担当者とした。この試験室は2間半×



他社に先駆けて開設した試験室は技術商社への第一歩であった＝1956(昭和31)年頃

Column

一流メーカーとの
太いパイプを築く

江守商店は昭和30年代からいち早く技術商社への道を歩んだ。そして、その実現には、当時の一流メーカーとの太いパイプが大きく貢献したと言える。換言すれば、次々と発売された新商品を販売できる立場にあったことが、技術商社への脱皮を可能にしたのである。

長瀬産業は日華化学の経営危機以降も江守商店との関係は強固なままで、同社を通じて江守商店はチバガイギー社との取引関係を構築していった。東亜合成化学工業（現東亜合成）とは1946（昭和21）年に特約販売店契約を結び、江守商店は苛性ソーダや合成塩酸等の販売を行った。また、1956（昭和31）年に開設した花堂倉庫を同社の福井地区の拠点として活用していた。三井化学工業（現三井化学）や三菱化成（現三菱化学）とも代理店契約を結び、染料や化成品の販売に努めただけでなく、ユーザーの要望をメーカーに伝え、商品開発面での協力も行った。東亜ペイント（現トウペ）も江守商店内に駐在員事務所を開設し、両社共同で市場開発を進めた。信越化学工業とは1958（昭和33）年に同社のシリコン製品の販売店となってから関係が始まった。江守清喜がシリコンに強い興味を持ち、同社の担当者に専門的、技術的な質問を投げかけ、担当者がたじたじになったというエピソードが残っている。

こうした各社との良好・強固な関係はその後も続き、江守商店の大きな財産となっていったのである。

5間の木造平屋であったが、チバ社のクロランチン染料の拡販のためのものであった。翌32年、県工業試験場より島川勝治、倉庫精練より湯口幸雄を採用し、当時地方問屋にはめずらしい大卒で、しかも工学部の繊維染料卒をつぎつぎと入社させた。当時、長瀬産業京都支店より、島田英昭氏がセールスエンジニアとして来社され、移動図書館の如く、100kgぐらゐの資料を持ち込み、染色工場への技術PRを行った。江守清喜社長の社員への訓示は、「今からの営業はセールスエンジニアが必要な時代になる」ということを強調された。

当時、地方商社の機能はメーカーから仕入れた商品を顧客に販売することが中心で、在庫や配送、資金回収に力を注いでいた。営業スタイルもいわゆる“御用聞き”あるいは“手もみ営業”で問題はなかった。特に北陸は西に木の芽峠、東に親不知という交通の難所があったために独自の経済圏を確立しており、従来の手法を変える必要性を感じる商社は少なかったのである。

そうした状況が続く一方で、江守商店と密接な関係にある繊維産業には技術革新の波が押し寄せていた。戦後、アメリカからナイロンが紹介され、それが刺激となって日本でも合成繊維に関する技術開発が進んだ。それに伴い、各メーカーも新しい染料や薬剤等を次々と開発していったのである。“人絹王国”と称された福井県も合成繊維への転換が始まろうとしており、江守商店の顧客にも新染料や薬剤等に対する興味・関心が高まっていた。

清喜は顧客のニーズが商品そのものに加えて、関連する技術やノウハウにもあることを読みとり、「今後の営業活動には、技術の専門家が必要」と判断したのである。すなわち、技術商社への脱皮を目指したのであり、試験室の開設はその第一歩だったのである。清喜が卓越した先見性を持ってい

たと同時に、日華化学というメーカーの経営者であったからこそ慧眼であった。清喜は日華化学の企業理念として「製品を売るに非ずして、技術を売る」ことを基本に置くなど、技術や研究開発に対して強いこだわりを持っていたのである。

昭和30年代以降、江守商店が順調に成長を続けた大きな要因に、この技術商社志向があったことは論を待たないであろう。

顧客に対しては商品とともに技術指導やノウハウを提供する一方、取引メーカーにはユーザーニーズを的確にフィードバックしていく。試験室の機能を活用し、顧客の要望に応じた試験を繰り返す。社内外の勉強会を通じて商品、技術に関する知識を蓄えていく。

こうした活動によって、江守商店は取り扱い商品の幅を広げるとともに、顧客、メーカーからの信用と評価を一層高め、他社との差別化要因ともなっていた。さらに、いち早くこうした提案型の営業スタイルを目指したことが、その後の事業展開の広がりを支えていったのである。

経営の根幹は「人」にあり ～運命共同体としての大家族主義

1986(昭和61)年に研修制度へ変更されるまで、江守商店は長く寮制度を継続していた。対象は全男性社員で、原則として結婚するまで入寮を義務づけていたのである。江守商店の裏手にある江守家と棟続きの家屋に10畳ほどの部屋があり、そこが社員寮になっていた。1962(昭和37)年に新社屋が完成すると、社屋内に社員寮が設置された。寮制度の主な目的は次のような点にあった。

- 規則正しい集団生活の中で誠実な人間をつくる
- 集団生活を通じ、お互いに切磋琢磨して人間性を陶冶する
- 先輩と後輩がお互いに助け合い、チームワークのとれる人間をつくる

江守清喜は何よりも“人づくり”を重視する経営者であり、次のように記している。

「…思うに企業は人であり、「人」「物」「金」により成り立っており、この調和こそはじめに企業は繁栄するものでありましようが、特にこの中の最も大切なるものは「人」であり、「人」によって「金」「物」即ち商品も立派に運用され、「人」によって「信用」も確立するものであります(『業務三昧』より)

また、清喜は事あるごとに社員に向かって次のように話していた。

「…江守清喜会長は社員達によく「物を売るだけの人間ではダメだ、うちは物売りを育てているんじゃないぞ。社会人として立派な人になって貰いたい。それがわが社の大方針だ」と説いていた。物を売る前に人をつくる。これが江守商事の基本方針である(『江守商事八十年史』より)

この強い信念が寮制度の実施につながり、清喜は寝食をともにしながら手塩にかけて社員を育成していった。寮では月に一度、読書会や物故者法要が行われ、寮生の人間性向上が図られた。定時制高校に通う寮生もあり、清喜は学期末になると通知表を念入りにチェックするのが常であった。また、帰寮時には事務所に座り、遅れた寮生を叱りつけることもあった。その一方で、寮生には妻子よりも先に入浴させていた。寮生の垢で汚れた湯を使っていた江守家の子供たちは“風呂の湯は白く濁ったもの”と思っていたという。こうした清喜

Column

寮生活の 思い出

実際に寮生活を体験した社員たちにとって、そこでの生活はその後の人生における有形無形の財産となった。体験者の回顧談を紹介する。

「…『神様に合掌』『仏様に合掌』『毎日の業務に対する感謝』『先祖様に対する感謝』等、親に教えてもらえなかった『心』を教えられました。寮では田賀道徳先輩等六人の生活で、朝夕の挨拶はもちろんの事、全員が揃ってから朝食も夕食もみんなが申しあわせたように規律正しく家族的に兄弟のように食卓を囲んだものであります。ときにはだれかが九時にあるいは十時になっても待っていたものです。今の時代のように自分だけが良ければよいのとは違い協力しあって他人もみんなが幸福になる事が世の中が良くなり、それが自分の幸福になるんだと言う、協力しあって幸福をつかむ『心』を教えられました。いつも会長は言われていた、『江守が皆さんの両親から大切な君達を預っている以上、業務につ

いてはもちろん人間的に立派に育てほしい』と、こうして寮に入り同じ屋根の下で生活を共にし、家族的に兄弟のように喜びも苦労も共にわかちあう精進の大切さを、何かあるたびに話されていました。今すこし家族的と言う事についてふれて見たいと思います。自分の家庭のようにわけへだてなく自分勝手な人間にならないよう。また、気儘な人間に育たない誠実な人間になるようにとのお考えだったようです。今考えると、また同じ事を言っておられると内心若いころは思ったものです。それが何年か過ぎる事によって心に言葉が浸透し、なるほどと思うようになりました。(中略)家族的な寮生活の中から『感謝する心』『協力しあう心』『誠心誠意信用を大切に作る心』等、商売人として必要な心を教えられた思い出です」(安井正栄、『追想江守清喜』より)

「…その家族主義とも言えるものはすべてに徹底されており、社員は家族であり社員の親も家族の一員であるとの考え方である。その大家族主義の最たる象徴が寮制度であり、寮制度とは江守本宅へのホームステイであったと思う。当然寮は寄宿舎ではなく家庭であり、その家長は会長であると言う考え方をされていた。寮の朝は早い。六時過ぎに起床して清掃、ラジオ体操、ランニング等を毎日実行して行く、しかし我々が寝ぼけ眼で起きてくるとすでに本宅では朝の勤行が始まっており、その一日たりとも休まず勤行されるという自分に対する厳しさと祖先への感謝を身をもって我々に模範を示されておられた。又、その勤行をされる前の時間には寮のある会社本館三階へ来られ、朝日の見える窓から昇る朝日を拝まれる姿を幾度も拝見し、私はその後姿に何か熱いものを感じたものです」(黒瀬則雄、同前出より)



早朝マラソンは寮生の日課のひとつだった

の薫陶を受けた社員たちが江守商店の社業進展に尽力していったのである。

そして、こうした経営者の姿勢が、結束力、団結力の強さから“運命共同体的な大家族主義”と称される江守商店の社風醸成につながっていったのであり、それは今もなお、社内に脈々と息づいている。

積極的に 営業拠点を拡充

江守商店は1961(昭和36)年5月、大阪市浪速区の日華化学大阪営業所内に大阪出張所(現大阪支店)を開設した。本社以外では初めての営業拠点であった。当時、大阪は化学品流通の中心であり、化学品の仕入れと販売、さらには情報収集が目的であった。

翌1962(昭和37)年8月には、名古屋出張所(現名古屋支店)を開設。大阪と同様、日華化学の名古屋出張所内に事務所を設けた。この年に江守商店の重要な顧客である酒伊繊維工業(現サカイオーベックス)の名古屋工場が設立されたことが、名古屋進出の契機となった。

さらに、1964(昭和39)年4月には、敦賀出張所(現敦賀支店)を開設した。敦賀市の企業誘致により、永大産業、クレハナイロン



1961(昭和36)年に開設された大阪出張所(現大阪支店)は1976(昭和51)年に日華ビル内に移転。同年に大阪営業所に昇格した



1972(昭和47)年頃の名古屋出張所(現名古屋支店)

が同市に進出したことを受け、嶺南地区の商圈確保を目指したのである。

江守商店がこうした積極的な拠点展開を実行に移した背景には、危機感があった。先に述べたように、北陸はその地理的特徴が交通網整備を阻害していたことから、独自の経済圏を確立していた。つまり、他地区からの競争相手が参入しにくい状態にあったのである。

しかし、1962(昭和37)年6月以降、こうした状況は変わることになった。北陸本線が福井駅まで複線電化されるとともに、北陸トンネルが開通したのである。その結果、関西や中京方面から北陸への交通の便が大きく改善された。そのことは、関西、中京資本が北陸に進出しやすくなったことを意味していたのである。

そうなれば当然、福井の市場における競争の激化が予想され、地元企業はその対応策を練る必要に迫られた。福井県内では確固たる地位を築いていた江守商店も例外ではなかった。

様々な対応策が協議された末に、江守商店が出した結論は積極的な営業エリアの拡大を図ることであった。関西、中京の企業が福井に進出しやすくなるということは、福井から関西、中京へ進出しやすくなるということ。危機を好機に、マイナスをプラスに転じる、まさに逆転の発想であった。

Column

昭和30年代の
江守商店

1956(昭和31)年に江守商店に入社した豊田愷二(元専務取締役、現監査役)は、その当時の思い出を次のように語っている。

「私が入社した当時、江守商店には20数名の社員がいた。女性を初めて採用したのも、この頃だったと思う。当時の寮には私を含めて20人ほどが生活していたと記憶している。入社して5年近くは、仕事を覚えるために倉庫や配送業務を行った。トラックや三輪車で顧客回りをした。当時は日華化学の再建期でもあり、当時の江守清喜社長は不在のことが多かった。平佐多さんが業務を取り仕切っていた。昭和30年代は日本経済も江守商店も右肩上がりの時代で、とにかく忙しかった。昭和36、7年頃だったと思うが、月間売上が初めて1億円を超えた時、江守社長が全社員にオーダーメイドのスーツを新調してくれたこともあった。江守社長は社員を大切にする方で、事あるごとに“江守は金儲けだけではなく、立派な社会人を世に送り出す会社だ”とおっしゃられていた。また、楽しく思い切り仕事をやらせてもらった。そうした雰囲気は現在の江守商事にも受け継がれていると思う」



1958(昭和33)年頃の社内風景

さらに、江守商店にとって追い風となったのは、日華化学と福井精練加工(現セーレン)や酒伊繊維工業(現サカイオーベックス)など地元の主要顧客が全国展開を図っていたことであった。つまり、進出地でも顧客企業との関係が維持できたのである。

この戦略によって、本格化した高度経済成長の波に乗った江守商店は、さらに大きく飛躍する体制を整えていった。

躍進する江守商店

昭和30年代後半から40年代前半の江守商店の軌跡は、まさに“躍進”と形容するにふさわしいものであった。

法人化した際の資本金は750万円であったが、1964(昭和39)年には資本金を1500万円に増資し、その後も1965(昭和40)年に2250万円、1966(昭和41)年に3000万円に増やしている。さらに1969(昭和44)年には3750万円に増資した。先に記した営業拠点の拡充と業容の拡大による資金需要に対応するための措置であった。1967(昭和42)年10月には、そうした業容拡大に対応するため、本社隣に別館を建設した。

年間売上高も急激に伸長している。1960(昭和35)年度の年間売上高は7億2500万円であったが、1965(昭和40)年度は16億2800万円と倍以上に伸びている。社員数も同年度には56人と増えており、業容の拡大を示す形になっている。取り扱う商品の幅も染料から化学品、合成樹脂など大きく広がった(表1)。



1967(昭和42)年7月に制定された江守商店の社章。江守の「E」がモチーフになっている

創業60周年を迎えた江守商店の主な営業品目

1967(昭和42)年の営業案内より

(表1)

染色関係	・染料、顔料	織布関係	・糊剤	
	・精練漂白薬品		・油剤	
	・染色仕上油剤		・金属洗浄剤	
	・繊維加工樹脂		・染料品 等	
	・捺染糊剤		製紙関係	・紙力増強剤
	・その他繊維処理剤 等			・消泡剤 等
化学工業薬品関係	・工業薬品	クリーニング関係	・各種洗剤 等	
	・溶剤		塗料関係	・油性ペイント
	・タール中間物、石油化学 等	・錆止ペイント		
	合成樹脂	・シリコーン樹脂		・ラッカー、エナメル
・合成ゴム		・合成樹脂塗料		
・熱硬化性樹脂		・金属処理剤、研磨剤 等		
・成型製品		セメント混和剤	・セメント湿潤分散剤 等	
・硝子繊維 等	諸機械		・ボイラー 等	



創業60周年の社員記念撮影—1966(昭和41)年4月

1968(昭和43)年4月には、東京に出張所を開設した。大都市圏では大阪、名古屋に次ぐ開設で、日華化学の東京営業所を事務所として利用した。開設当初は仕入れ先である三菱化成(現三菱化学)や信越化学工業等への営業活動を行うとともに、福井精練加工(現セーレン)の関東進出への対応も行った。さらに、その後のアジア進出の窓口としても機能を果たすようになっていった。

1969(昭和44)年4月には富山出張所が開設されたが、翌年5月に設立された富山化成株式会社に吸収されることになった。富山化成は流通の合理化、顧客との密着化、販売の促進等の目的で、江守商店と日華化学、田村安司郎商店の共同出資によって設立され、以後は江守商店の富山における営業拠点として活動を続けた。

1970(昭和45)年4月には、石川県に金沢出張所が開設され、北陸3県における営業拠点が確立した。

江守商店は営業拠点網の整備に取り組む一方で、新規市場への参入にも努めた。1966(昭和41)年には医薬品市場に参入し、医薬品バルクの取り扱いを開始した。さらに、1969(昭和44)年からは原子力産業に関わりを持つことになった。日本原子力発電電敦賀発電所への試運転用薬品の納入が

きっかけであった。江守商店はすでに敦賀出張所を設けていたため、地元の化学工業薬品の専門商社として、日本原子力発電から納入指定業者に指定されることになったのである。

1970(昭和45)年度の江守商店の年間売上高は40億6900万円、社員数も93人に達していた。福井県内はもちろん、北陸を代表する規模の化学商社と呼ぶにふさわしい企業規模に成長を果たしたのである。



富山化成社屋

2 Chapter2 章

挑戦と飛躍

1981(昭和56)年、江守商事創業75周年を機に、江守幹男が新社長に就任した。江守幹男は専門商社への挑戦と飛躍を目指し、新たな方針を打ち出していく。そのさなかの1986(昭和61)年2月18日、闘病中の江守清喜が79年の生涯を閉じた。しかし、その深い悲しみを乗り越え、全社一丸となった新しい江守商事の創造が始まっていったのである。



江守商事創業77周年、日華化学創立45周年記念を兼ねて開催された江守清喜会長喜寿祝賀会＝1983(昭和58)年5月1日

江守商事へ社名変更

1970(昭和45)年11月1日付で、株式会社江守商店は社名を現在の江守商事株式会社に変更した。当時の江守商店の業容は、すでに“商店”という枠を超えており、事業内容にふさわしい社名への変更を求める機運が社内的にも高まっていたのである。

さらに、社名変更の前年に江守商店(当時)は田辺経営の経営診断を受けた。業容拡大に伴い、経営近代化を進めることが目的であった。その報告の中にも、社名変更の必要性が説かれていた。

新社名の候補には、「江守物産」「江守産業」などが挙がり、幹部会で討議された。その結果、社長の江守清喜が江守商事株式会社とする決定を下したのである。“商店”から“商事”への変更により、対外的には江守商事に対するイメージアップにつながり、社内的にも社員の士気向上につながっていった。

先の田辺経営による経営診断では“北陸の雄たれ”という勧告がなされていた。当時は売り手市場であり、その実現には積極的な営業が不可欠であった。しかし、その一方でメーカーからの商品入手も難しく、社内では仕入れの確保をどうするかについての議論が重ねられたという。『江守商事八十年史』では、次のように当時の様子が描写されている。

「…そのような状況下でもあったので、当時の営業会議はいつも夜遅くまで続き、時には午前1時を回る時さえあった。しかし、社員は若く、意気軒昂で、北陸地区(福井、石川、富山)を完全に制覇するという意気込みに燃えていた。当時の江守商店の戦略は北陸の江守になることが基本であった」

江守幹男が副社長に就任

江守商事では社名変更以降、経営の近代化を促進するための動きが活発化していた。その最終的な布石となったのは、1971(昭和46)年11月に江守幹男が代表取締役副社長に就任したことであった。この人事の目的は次の点にあった。

「…益々厳しくなる競争に対し、商社としての機能をどう強めるかに心を配った江守清喜社長の決断であった。会社経営の近代化のためには、若い力が必要という考えのあらわれであった」(『江守商事八十年史』より)

清喜の娘婿である江守幹男は日華化学の副社長を務めており、当時42歳。清喜を始めとする江守商事の経営陣からの強い要望を受けて、副社長就任を受諾したのである。江守幹男は就任後、全社員を前に次のように語っている。

「江守商事は北陸トンネル、北陸自動車道の開通でこれまでの福井における強力な商権を失うことになる。しかしそれは同時に外へも自由に羽を拡げられる諸刃の剣のようなものである。わが社の経営体質は内海航路向きの吃水の浅い船である。まず荒波の外洋で航海できるよう吃水の深い体質に変えていかなければならない。また表日本の大型商社を迎撃するための武装を早急に行いたい。このような考え方のもと、今後の経営方針としてはつぎの諸点を重視して対応していくので、皆さんも頑張ってください。」

第1に、専門商社への脱皮である。ご用聞き的な販売では競争に勝てない。営業マン1人1人が技術的な武装をし、ユーザーから頼られる商社にならなければならない。そのためにも一次店の商権をより多く確保し、名実共に専門商社としてメーカーからもユーザーからも信



幹部社員を前に経営方針を説明する江守幹男＝1974（昭和49）年11月

Column

社内報 『きずな』の発刊

江守商事の社内報『きずな』は1971（昭和46）年から発刊されている。当初は年2回の発刊で、現在は年1回（1月発刊）となっている。発刊の目的は、社員と拠点の増加に伴い、希薄化しがちな社内のコミュニケーションを深めることにあった。

誌名の『きずな』は社内から集まった案の中から選ばれた。ちなみに江守幹男（現会長）が『きずな』で応募している。1992（平成4）年1月号（第25号）からは体裁が変更され、A4サイズでカラー写真も使用されるようになった。しかし、題字は江守清喜の揮毫が創刊号から使用されている。創刊から30年以上を経て、社内報『きずな』は社内のコミュニケーションを深めるツールであるとともに、その時々々の社の動向を記録した重要な資料ともなっている。



頼を得なければならない。

第2は、商品力の強化と商品開発の促進である。付加価値の高い商品の選択と開発商品の積極的な販売を今後とも力を入れていく。社員の皆さんも、1人1人がこういう発想を持って仕事に取り組んで貰いたい。

第3は、技術サービスの強化である。ユーザーに開発商品を周知徹底させることが、ライバルに一步先んじるポイントになる。当然それは情報の収集と提供が伴うわけで、そういう努力をしないと競争には勝てない。

第4は利益の確保である。正当な利益は当然頂くべきもので、堂々とユーザーに利益を要求できるような営業マンになって欲しい。それには相当な勉強が必要である。会社としてもそういう機会をできるだけつくるが、社員1人1人の努力も大切であることをとくに申し上げたい。

第5は、出張所の活性化である。これからは福井の本社より出張所の伸び如何である。どうも出先は一寸遠慮しているんじゃないかと思う。どんどん売上げを拡大して貰ってさっつかえないわけだから、ぜひお願いしたい。出先の人たちの色々な苦労もよくわかるので、魅力ある会社づくりをしたい。

第6は、貿易部を発足させたい。国際化時代にふさわしい輸出入に取り組んでいく。当面は韓国、台湾等東南アジアに重点を置く。

以上6つの重点事項を申し上げたが、いずれにしろ社員の皆さんの一致協力がなければできないことであるから、ともども江守の発展のため努力したい（同前出）

それは今後の江守商事の経営方針であり、専門商社としてさらなる発展を目指す新たなリーダーの決意表明でもあった。

施設の拡充

江守商事が社名変更を行った1970(昭和45)年を機に、江守商事は大きくその姿を変えていった。そうした動きを、まずは施設の面からたどってみる。

・南福井倉庫

1971(昭和46)年4月、JR(当時国鉄)南福井駅近くの約1万㎡の敷地に南福井倉庫を建設した。1956(昭和31)年に完成した花堂倉庫、1958(昭和33)年に完成した本社倉庫など、それまで分散されていた倉庫を集約した施設で、当時としては最新式の立体倉庫であった。鉄道引き込み線も備え、江守商事の総合物流センターとしての機能を有していた。社長の江守清喜は南福井倉庫の建設について、次のように述べている。

「…地域社会への奉仕を使命としている江守商事としては、余分に買いだめしなくても、必要な時に必要な品を買っていただくことが、顧客先へのサービスであると考え、それには完備した総合倉庫の中に、豊富に商品を取揃えておく必要があり、漸くその目的を達成しました」(『業務三昧』より)

・花堂加工工場

南福井倉庫の新設によって役割を終えた花堂倉庫は、合成樹脂の加工工場として活用されることになった。花堂倉庫が加工工場に衣替えしたのは、次のような経緯からであった。

「…電線メーカーの倉茂電工株式会社から、電線に使用する軟質塩ビコンパウンドの自家生産量をオーバーする分を、他から購入したい旨の話があった。わが社は塩ビコンパウンドの原料、(塩化ビニールや安定剤等)を納入していたので、ぜひわが社に生産をやらせて欲しい旨申し入れた。『それは好都合、江

Column

経営信条

第2部1章で記したように、江守商事は創業50周年を迎えた1956(昭和31)年に社是・社訓を明文化した。そして、1971(昭和46)年には社訓を具体化した経営信条が定められた。

- 一.報恩感謝以て国家社会に奉仕する
- 一.信用誠実以て社業の繁栄に徹する
- 一.和衷協力以て業務の遂行に努力する

以来、この経営信条は朝礼で社員一同が斉唱する習慣となった。1996(平成8)年の創業90周年を機に、新たな社是社訓(企業理念・目的・行動指針で構成)が制定されたが、江守清喜の哲学が込められた「報恩感謝・信用誠実・和衷協力」のフレーズは、企業理念に盛り込まれており、その精神は今も江守商事に脈々と息づいている。

経営信条
 一 報恩感謝以て国家社会に奉仕する
 一 信用誠実以て社業の繁栄に徹する
 一 和衷協力以て業務の遂行に努力する

守さんなら、地元でもあり、是非たのむ』ということになり、話がとんとん拍子に進んで花堂倉庫を加工工場にした。出来た製品は全量倉茂電工が買い取ってくれることになり、製造技術、設備、機械等も一から指導して貰いスタートした」(『江守商事八十年史』より)

当初は花堂加工所という名称であったが、その後間もなく福井化成工業所に変更された。製造品目は軟質塩ビコンパウンドに加えて、染色酸や硬質塩ビコンパウンドも手がけるようになり、1973(昭和48)年3月には北陸化成工業株式会社として独立した。



福井化成工業所(旧花堂加工工場、現北陸化成工業)での作業風景

・ サービスセンター

1971(昭和46)年11月、本社社屋の隣に鉄筋3階建の江守サービスセンターが完成した。当時、江守商事の顧客は約1000軒を数え、その40%が小口ユーザーであった。サービスセンターは小口ユーザーに、よりきめ細かなサービスを展開することを目的に

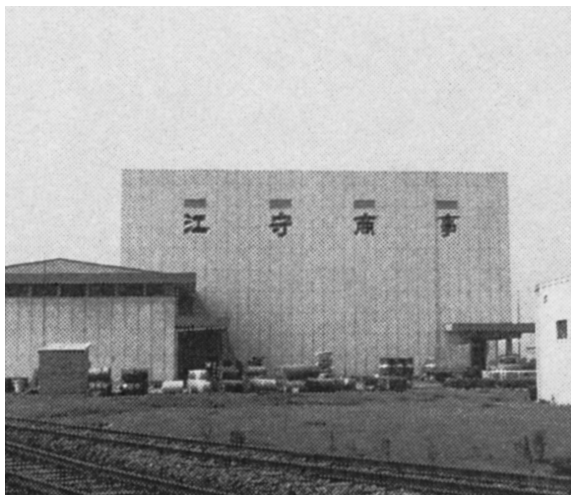
開設され、経理面では独立採算性を取っていた。江守清喜はサービスセンター開設に関して、次のように述べている。

「…会社にとって大口ユーザーが生命線であることは変りがないが、さりとて小口ユーザーをお粗末にするのでは商売冥利につきる。大口、小口の差別なく一視同仁に奉仕することこそ、真の商人道ではないか」(『業務三昧』より)

開設当初のサービスセンターの取り扱い品目は、塗料、FRP資材、製紙資材、接着剤などであった。その後、製紙資材、FRP資材は本社扱いとなったが、営業努力による商権の拡大と工事までを手がけるようになったことでサービスセンターの売上は拡大。1979(昭和54)年12月に江守塗料株式会社として独立した。

・ 敦賀、金沢出張所の社屋建設

1971(昭和46)年7月、敦賀出張所の社屋が完成。それまでは市内のビル内に事務所を設けていたが、出張所業務の拡大により、新たに社屋を建設したのである。新社屋は2階建て、敷地面積347.61㎡、延床面積201.80㎡であった。1974(昭和49)年3月には、金沢出張所の社屋が完成した。敷地面積は720.06㎡で、事務所、倉庫、試験室を含む延床面積は541.2㎡であった。



竣工直後の南福井倉庫



1974(昭和49)年3月に完成した金沢出張所(現金沢支店)



北陸化成工業の事務所



1971(昭和46)年7月に新築された敦賀出張所(現敦賀支店)



本社社屋に隣接して開設したサービスセンター

Column

江守 奨学会

1971(昭和46)年4月、財団法人江守奨学会が福井県の認可を受けてその活動を開始した。県内の盲・ろう児童、生徒に対する奨学資金の提供が目的で、当時としては全国的にも例のない試みであった。江守清喜、江守商事、日華化学が1000万円ずつを基金として5年間積み立て、その利子を福井県立盲・ろう学校の児童、生徒への奨学金として運用するのである。奨学金の返済義務はなく、支給による結果や効果の要求もなかった。

江守奨学会は全国的に大きな反響を呼び、当時の福井県知事も感謝を表明する異例の会見を行ったほどであった。創設者であり初代の理事長を務めた江守清喜は、奨学会設立の経緯を次のように記している。

「…当時私は昭和四十四年二月から福井県教育委員長に就任していた。四十五年十一月のこと、福井市文化会館で開かれた「心身障害児と親の集い」に出席した時、眼や耳の不自由な少年少女達によって演ぜられた器楽合奏に深い感動を受け、臉の熱くなる思いで、この障害児達にこそ、温かい愛の教育をおくるべきであると考えた。心身障害児なるゆえをもって、個人の価値はゆがめられ自由な精神が蝕まれがちであることの現実に、常に心の痛みを感じて来たのである。特に私には眼の不自由なひとりの娘があり、障害児を持つ親の悲しみは、何人にも増して理解できたし、娘がお世話になった恩返しもしたいと思った。そこで考えついたのは「盲聾児達に奨学資金」を贈る制度だった。これまでに各種の奨学金制度はあるが、より高度な勉学への援助という形式のもので、心身ともに恵まれない子、また底辺に在る子へという趣旨のものは皆無にひとしい。特に盲聾児を持つ家庭では、世間態をはばかりたり、寮生活を嫌ったり、家庭の

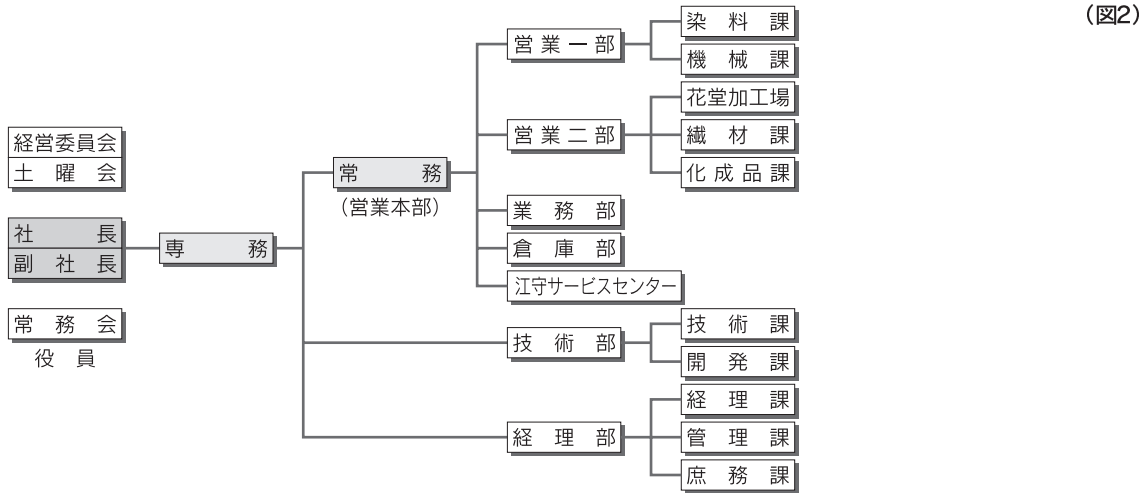


江守奨学会創立10周年記念会=1980(昭和55)年11月27日

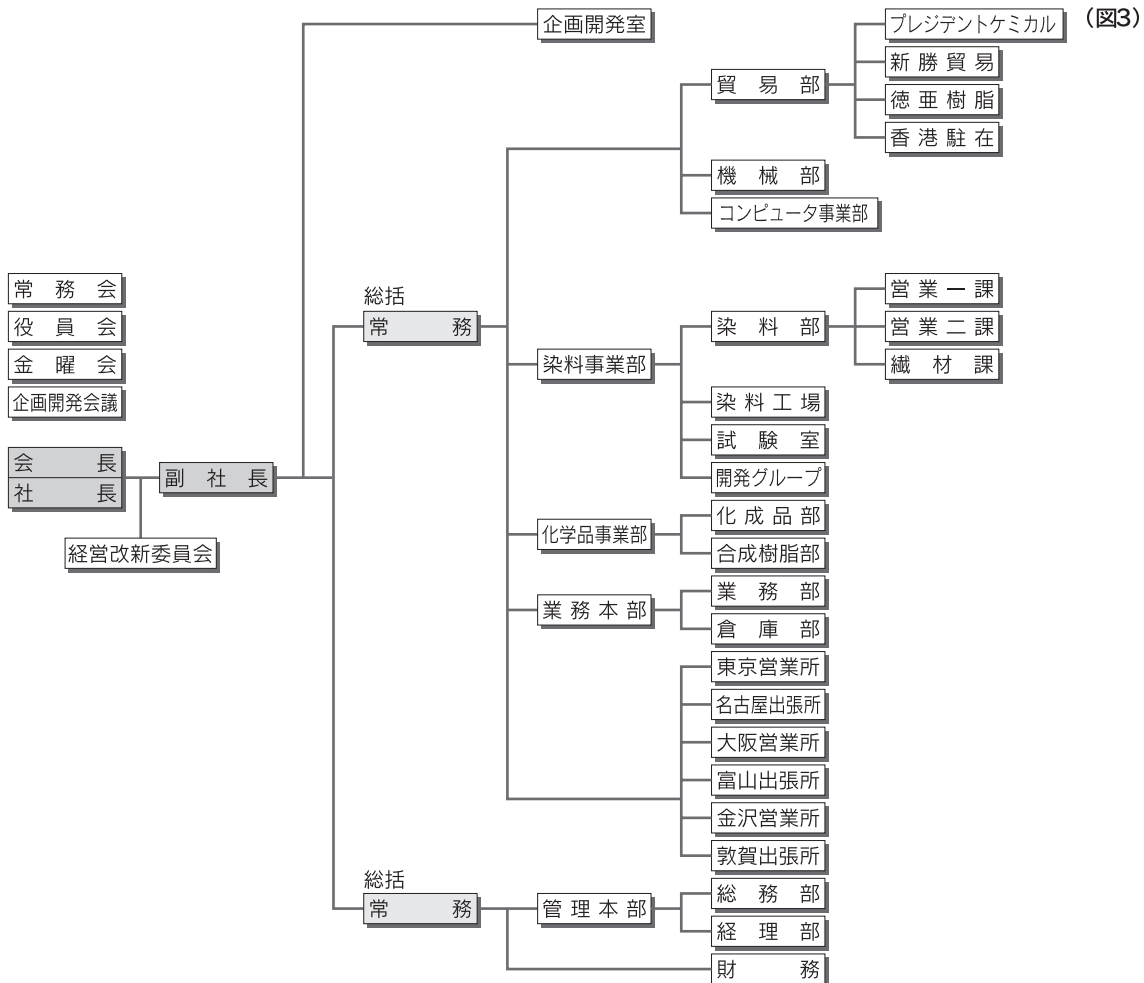
事情から県立盲聾学校へ入学させるのを躊躇する傾向があり、こうした子らに適正就学の機会を与えたとともに、保護者にも理解して貰い、かつその負担を少しでも軽くしようというのがその設立のねらいであった」(社内報『きずな』第21号=1988(昭和63)年発行より)

その後、基金は増額され、支給対象も拡大された。また、各学校への備品寄贈や各種助成、教育奨励賞の表彰等も継続的に実施された。江守清喜のもとには、奨学金を支給された児童・生徒とその父兄から多数の礼状が送られてきた。つたない文字や点字文を念入りに読み、絵画などは自室の壁に貼って嬉しそうに眺めていたという。2006(平成18)年度までに、江守奨学会のサポートを受けた児童・生徒の数は3105人。46人と21団体が教育奨励賞を受賞している。

組織図 1972(昭和47)年4月現在 (図2)



組織図 1982(昭和57)年12月現在 (図3)



Column

オイルショック時
の対応

昭和40年代後半と50年代前半、二度にわたって発生したオイルショックは、日本の産業界に深刻な打撃を与えた。江守商事も例外ではなかったが、当時の主要商品である染料や塗料が石油関連品であることを考えれば、その影響は甚大であったと言える。実際、江守商事の1975(昭和50)年、1977(昭和52)年度、1980(昭和55)年度の経常利益は前年から大きく減少している。

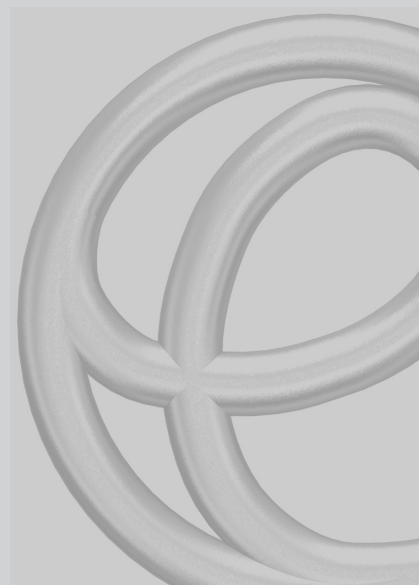
しかし、こうした苦境にあっても、江守清喜は自らの信念を毅然として貫いている。

「…店は一大方針を決意した。即ち、「各ユーザーお得意に対し品切をしてはならない、且つ便乗値上げは一切まかりならない」今日まで染料にしる、薬品にしる、江守商事だけを頼って来られた方々に対しては、不行届きがあってはならない、操業がとぎれることがあってはならない、お得意に対しては一切御迷惑はおかけするな、「まだ入荷しません、品切れです」、は江守の信用を落すばかりである。要は江守の信用に於て商品入荷の努力が足りない、願くは、この時こそ最大の努力をせよ。この間一部からは当然、儲けられるものまで儲けぬのかと苦情も出たが、幸いにしてこの難関を切り抜けることが出来、信用には、いさゝかも傷けなかったのであった」(社内報『きずな』第8号=1975(昭和50)年発行より)

また、社内に対しても大家族主義を堅持している。社長を兼務していた日華化学における清喜の対応を、江守幹男は次のように述懐している。

「…一時は七〇%台に操業度が落ちこんだことがあった。然し各社の一時帰休、人員カットという騒然とした最中、社長は「我社は帰休も人員カットもしない。乏しきを分ち合い、新たなる対応に全社結束して当る」ことを宣言したのである」(『業務三昧』より)

江守清喜の経営者として、そして人間としての強さと優しさが表れたエピソードであった。



Column

商流改革への挑戦～ 三栄化成品、 サンコーを設立

昭和40年代の終盤、江守商事の主力事業だった染料分野は競争が激化していた。鉄道、高速道路網の整備が進み、福井に大都市圏から大手商社が次々と進出してきたのである。

当時、大手染料メーカーは問屋制度を敷き、大都市圏に拠点を持つ大手商社が一次店となっていた。江守商事は一次店から商品の供給を受ける二次店であった。それまで、冬季は雪に閉ざされ、“陸の孤島”となっていた北陸の市場にあって、充実した在庫機能を持っていた江守商店は有利に事業を進めることができた。しかし、交通インフラの整備によって、江守商事は一次店の大手商社と激しい競争を強いられることになったのである。

強い危機感を持った江守商事が出した結論は、自らが一次店になることであった。1976(昭和51)年5月、長瀬産業、三菱化成(現三菱化学)と合併で、三菱化成とチバガイギー社の染料と染料助剤を専門に扱う三栄化成品株式会社を設立したのである。商社がメーカーと組んで染料の専門商社を設立したのは、国内初のケースであった。

三栄化成品の設立は、業界内に大きな衝撃を与えた。当時の流通チャネルの否定であり、秩序の破壊であったからである。業界内では「江守が日本海海戦を起こした」という声が上がったほどであった。三栄化成品設立を主導した江守幹男(当時副社長)は次のように振り返っている。

「三栄化成品を設立できたのは、江守商事に営業力、資金、信用があったから。業界内の反発は大きかったが、流通チャネルは必ず変わると思った。流通の経路は短くなっていく。そうなれば従来の二次店商売で勝てるはずがない。当時、すでに電機メーカーが販社を設立して商流の改革を実行に移しており、江守商事はその流れに積極的に飛び込んでいった」



発足当時の三栄化成品の社員。当時の営業部門の幹部だった島川勝治(前列中央、元代表取締役専務、現相談役)、豊田愷二(前列右から2人目、現監査役)の姿も見える

江守幹男は日華化学の経営にも携わっており、メーカーの立場から商流の変化を間近に感じていた。そして、1970(昭和45)年に代理店制度(日華会)を立ち上げ、メーカー主導による販売網の確立を目指したのである。

「この時も業界内で相当な反発を受けたが、その経験が江守で役立った。モノの流れがどうなっていくかが読めたからだ」(江守幹男)

三栄化成品は染料の一次店として事業を展開し、江守商事の染料事業に大きく貢献していった。同様のケースとして、1986(昭和61)年12月に株式会社サンコーを設立した。三井東庄の販売代理店である江守商事と森六(石川県金沢市、本社・東京)が、両社の北陸地区における染料販売部門を統合したのである。

染料の流通チャネルはその後、一次店、二次店の集約化が進み、各染料メーカーは販売網を再編していった。その流れに乗り遅れた一次店、二次店の多くが衰退していったが、江守商事はいち早く商流改革に挑み、成長につなげていったのである。この当時、江守幹男と互いの販売政策を巡って激論を交わした大手商社の幹部は「江守商事は猫だと思ってかわいがっていたら、実は虎だった」と言ったという。それは、業界の反発を受けながらも旧習打破に突き進み、成長を続けた江守商事に対する誉め言葉であった。

事業展開の広がり

前述した組織の変遷からも読み解けるように、江守商事の事業は大きく広がっていった。こうした動きを、豊田愷二（現監査役）は「地続きの事業展開」と評する。つまり、染料という主軸事業から、多様化・細分化する顧客のニーズ、時代の流れに応じて枝分かれしていったのである。

例えば、化成品は戦前から染色用の工業薬品を販売していたことに加え、日華化学との関係を通じて取り扱い商品の幅が拡大。それに伴い、顧客層が繊維、染色関係だけでなく、眼鏡製造や和紙関係等にも広がっていった。さらに、繊維素材の技術革新による各種化学薬剤への顧客ニーズの高まりに対応していく過程で、さらなる市場の開拓を進め、事業としての成長を続けていった。

その後も、顧客ニーズに対する対応を重ねた結果、需要が増大した合成樹脂、電子材料分野が“独立”していった。電子材料は、福井県内の電子工業関連企業に合成樹脂製品の販売を行ったことがきっかけとなり、電子デバイス類やシリコン、コンデンサなどを手がけるようになったのである。

機械分野は顧客の染色工場にボイラーや染色機械等の販売、冷暖房機器工事の施工を手がけたことを契機に、染工場のFAシステムにまで領域を拡大。その後はコンピュータ事業を担っていった。

「地続きだったからこそ、スムーズな事業展開が行えた」（豊田）のであり、江守商事がいち早く標榜した技術商社としての提案型営業スタイルがその実現を支えていった。徹底した顧客ニーズの追求が既存市場の深耕と新たな市場を開拓し、事業を広げていく——。江守商事の成長には、この連鎖があったと言えるだろう。

さらに、こうした事業の広がりに関連会社

設立にもつながり、現在の江守商事グループ形成の基盤となったのである。

世界への 飛躍を目指して

江守商事は1972（昭和47）年9月、東京出張所を営業所に昇格させるとともに、所内に貿易部を新設した。先に記した副社長江守幹男が掲げた経営方針に沿った組織改正で、江守商事の本格的な国際戦略がスタートしたのである。

当時、国内はもちろん北陸の繊維産業はすでに成熟化しており、台湾や韓国などの繊維産業が急成長を続けていた。さらに、日本経済の停滞と対米輸出が制限される日米繊維協定の影響を受け、繊維業界には不況風が強まっていた。そのため、北陸でも繊維業者の東南アジアを中心とした海外進出の動きが活発化しつつあった。

そうした企業の中には江守商事の顧客も多く、江守商事もまた海外の市場に目を向けたのである。つまり、昭和30年代からの県外進出と同様、顧客の海外進出に歩調を合わせるようになったのである。

江守商事にとって有利だったのは、日華



東京出張所は1972（昭和47）年に営業所に昇格し、貿易部が設置。1984（昭和59）年に東京支店（現在は東京支社）となった

Column

清友会

江守清喜は福井県の経済界で“再建王”としても知られていた。取引先の経営が破綻した際、その企業の経営再建を手がけることが多かったからである。自社の損害を軽減するという側面もあったであろうが、やはり信仰に基づく“報恩感謝”の念から生まれた、他者への慈愛が清喜にそうさせたと思われる。間近で清喜に接していた江守幹男は次のように語っている。

「会長が企業の再建に取り組んだのは、やはり宗教心、人柄からだろう。また、会長は非常に向学心が強く、考え方も新しかった。経営の要点もわかっていたから、再建も成功することが多かった」

そのため、清喜が経営に携わる企業も増え、1978(昭和53)年12月には各社の親睦組織「清友会」が発足した。相互のコミュニケーションを深めるとともに、情報交換の場として活用することが目的であった。発足に加わったのは、江守商事、日華化学、エフ・アール・ピー工業、共同コンピュータ、スバル食品、福井資源化工、岩野製紙の7社であり、清友会主催の大運動会などが開催された。また、毎月1回各社の幹事が集まって幹事会が開催された(幹事会の名称はEG会)。EG会では次のような点が話し合われた。

- ・江守清喜社長を中心に、各社トップの意思疎通を図ること
- ・各社の計画、実施状況の伝達と報告
- ・高級人事の報告
- ・各社の協力関係の強化



清友会主催の運動会で。中央は江守清喜



徳亜樹脂の落成式で挨拶する常務取締役の島川勝治(元代表取締役専務、現相談役)

化学との連携が可能だったことにある。日華化学は江守幹男が中心となって昭和30年代後半から韓国や台湾等へ製品輸出や現地企業との合弁化を進めており、その過程で培った海外とのパイプやノウハウを活用することができたのである。もちろん、江守商事自身がいち早く技術商社化を進めてきたことも、現地企業とのパートナーシップを築く上で追い風となった。

新設された貿易部は、台湾、韓国の市場調査を行うとともに、1973(昭和48)年からは日華化学と韓国企業との合弁企業「三慶日華化学」(翌年に韓国精密化学と改称)に化学原料の納入を始めた。さらに、同年には韓国に駐在所を開設している。

1974(昭和49)年には、台湾の企業と合弁企業「江福股份有限公司」を設立。現地に駐在員を置き、台湾の企業に染料の納入を開始した。この年の1月に日華化学とタイの企業グループとの合弁企業「SIAM TEXTILE CHEMICAL CO.,LTD.」が設立され、江守商事では同社に原料の輸出を行うことになった。さらに、1975(昭和50)年1月に設立された日華化学とインドネシア企業との合弁企業「P.T.INDONESIA NIKKA CHEMICALS CO.,LTD.」にも原料の納入を開始した。

1976(昭和51)年には台湾の新勝貿易公

司に経営参加し、現地で三井東圧の染料販売を開始した。1978(昭和53)年には、江福股份有限公司と新勝貿易会社が合併し、台湾市場における営業活動が強化された。

また、1979(昭和54)年1月には東亜ペイント、日華化学、台湾企業グループと合併企業「徳亜樹脂股份有限公司」を設立し、繊維コーティング用アクリルゴムの生産販売を行い、韓国等への輸出も開始。この年の7月にはタイの「PRESIDENT CHEMICAL CO.,LTD.」に資本参加、「SIAM TEXTILE CHEMICAL CO.,LTD.」向けの原料を同社を経由して納入するようになった。

1983(昭和58)年4月には、香港の企業を買収して香港江守「EMORI & CO.,(H.K.) LTD.」を設立し、東南アジア諸国や中国との貿易業務の拠点とした。

1986(昭和61)年11月には、セーレン、韓国の大手合繊メーカー、コーロン社と合併で「コーロン・セーレン」を設立。同社は自動車用内装材の製造販売会社で、江守商事は染料等の染色材料を供給することになった。

江守商事はその後、“**Global Solution Partner**”をスローガンに掲げ、グローバルな事業展開を積極的に推進していくことになる。その土台は、この時期にノウハウの蓄積や人材育成に努めたことによって築かれたのである。

Column

重水の輸入

福井県には原子力発電関連の施設が多く、江守商事は敦賀出張所(1986(昭和61)年営業所に昇格)を通じて、原子力産業へ関わってきた。1972(昭和47)年から1979(昭和54)年にかけて、関西電力が発電所5基を建設したことにより、薬品の納入量は大きく増加。また、1978(昭和53)年に動力炉核燃料開発事業団(動燃)が敦賀市に新型転換炉「ふげん」を建設したことに伴い、動燃への薬品やイオン交換樹脂等の納入も始まった。

「ふげん」は従来の軽水炉型の原子力発電所とは異なり、重水を使用する。そこで、江守商事では中国から重水を輸入して動燃に納入することになった。当時副社長だった江守幹男がこの年の夏に福井県経済界代表訪中団の一員として訪中した際、中国進出口化工総公司に重水の輸出を持ちかけたことがきっかけであった。中国側との商談の結果、1980(昭和55)年12月に最初の輸入が実現した。中国からの重水輸入は日本初のことであり、“パンダ重水”の愛称がつけられ、マスコミでも大きく報道されることになった。



江守商事が全国で初めて中国から輸入した重水のタンク

コンピュータ分野へ進出

江守商事は現在、IT分野を事業の大きな柱としている。その中心を担う各種システムからソフトウェアの開発・販売、サポートサービス等の情報システム分野の源流は、1971（昭和46）年に遡る。この年から江守商事は社内の電算化に取り組み始めたのである。

当時、江守商事は業容の急速な拡大が続き、従来の事務処理では限界に達しようとしていた。また、福井県内の官公庁や大手企業が電算システムの導入を開始しており、江守商事でも事務処理を電算化する必要に迫られていた。そこで、共同コンピュータの協力を得て、社内の電算化を推進していった。共同コンピュータは福井商工会議所が中心となり、地元中小企業のコンピュータ共同利用を目的に1968（昭和43）年に福井共同電子計算センターとして設立。江守清喜も社長を務めていた。

江守商事の社内電算化の流れは次のようなものであった。



日立製作所北陸支店とコンピュータ特約店契約を締結。左は桑山支店長、右は平佐多晶（当時専務取締役、元代表取締役副社長）＝1979（昭和54）年8月

- | | |
|-----------------|---|
| 1971年
(昭和46) | 伝票発行業務から社内の電算化を開始。 |
| 1973年
(昭和48) | 5月に共同コンピュータからSEの派遣を受け、本格的なシステム構築をスタート。 |
| 1974年
(昭和49) | 2月に南福井倉庫内に電算室を設け、共同コンピュータへの委託方式で本社の売掛金、買掛金の管理を行う。5月からは本社の月次在庫管理のシステム化を開始。 |
| 1976年
(昭和51) | 5月に各営業拠点の電算化に着手。当時としては画期的なファクスを使ったネットワークを構築し、各拠点の売掛金、買掛金、在庫管理システムを移動。6月には日立製作所のオフィスコンピュータ「HITAC-5」を本社に導入。 |
| 1977年
(昭和52) | 7月に共同コンピュータとのオンラインによる仕入れ、買掛金管理システムの構築に着手。 |
| 1978年
(昭和53) | 6月に南福井倉庫内の電算室を本社に移転し、8月に日立製作所の「HITACL-320,3」を導入。 |
| 1980年
(昭和55) | 日立製作所の「HITACL-330,4」を導入し、経理オンラインシステムを構築。 |

こうした過程で、江守商事は日立製作所との関係を深めていった。そして、1977（昭和52）年に日立製作所からオフィスコンピュータの取り扱いを打診されたのである。共同コンピュータの経営を通じて、コンピュータに強い関心を抱き、大きな将来性を感じていた江守清喜は直ちにコンピュータ市場に参入することを決めた。

1978（昭和53）年6月に機械部内にオフコ

ン業務を立ち上げ、8月に日立製作所と継続取引契約を締結し、北陸地区代理店となった。発足当初の陣容は3人(社内配転1人、共同コンピュータから出向2人)で、ソフト開発は共同コンピュータに委託していた。

1979(昭和54)年4月には北陸三県に営業担当を配置し、8月に全国7番目の日立コンピュータ特約店となった。日立製作所が江守商事のような化学商社と特約店契約を結んだのは、当時としては初めてのケースであり、それは日立側の江守商事の営業力に対する高い評価の表れであった。

1981(昭和56)年4月には、オフコン事業がコンピュータ事業部として機械部から独立し、本格的な営業活動を開始した。この年の7月、コンピュータ事業部の次長として日立製作所北陸支店から江守商事に出向(1989(平成1)年転籍)した宇野勝治(現常勤監査役)は当時を次のように振り返っている。

「営業とSEの一貫体制を整備して、将来的には社内でシステム、ソフト開発を行うことを目指した。当時、社内には従来の事業とは性格の異なるコンピュータ事業に対して及び腰の雰囲気もあった。しかし、清喜会長、幹男社長がコンピュータへの理解が深く、自由に動くことができた」

こうしてコンピュータ事業部は日立製作所の協力を得て、社内SEの教育に取り組んでいったのである。また、この年の8月には社内にOAコーナーを設置し、パソコンやワープロ、ファクスなどを展示。1982(昭和57)年4月には、日立OAシステム特約店となった。

OAショールーム開設 を機に事業を拡大

コンピュータ事業が本格化した1982(昭和57)年9月、江守商事は本社に隣接する別館内に「江守OAショールーム」を開設した。日立の特約店では北陸初、全国でも2番目の開設であった。

OAショールームにはオフコンやパソコン、ワープロ、ファクス等の最新機種だけでなく、銀行のCD、ATM等の端末、ロボットなども展示された。さらに、実際に操作を体験したり、OA化による合理化、省力化のアドバイスや提案を行うコンサルティング機能を備えていた。

OAショールームの開設は、江守商事にとって、コンピュータ事業を拡大する大きな契機となった。広く“OAの江守”をアピールしたことに加え、開設と同時に福井銀行、越前信用金庫からCDとATMを受注し、その後の福井銀行を始めとする金融機関に対する事業展開に弾みがついたからである。



日立コンピュータ特約店プレート



日立OAシステム特約店プレート



本社に隣接して開設されたOAショールーム

1983(昭和58)年6月には「福井OAフェア」に初参加し、11月には富山エリアにおける日立OA機器拡販のため、ティ・アイ・エス計算センターと業務提携し、富山コンピュータを設立。

さらに、1984(昭和59)年1月にはサブディーラー育成を目指して「江守OA販売店会」を発足。3月には、福井銀行と江守商事・日華化学間で同行初となるファームバンキングもスタートした。4月には福井県庁にワープロを納入し、官公庁への実績が加わった。

1986(昭和61)年7月には江守商事が中心となって、社団法人福井県情報システム工業会を設立し、江守幹男が会長に就任。同年度のコンピュータ事業部の売上は7億5200万円に達し、人員も32人に増えていた。

コンピュータ事業は江守商事にとって後発部門であったが、社会のOA化への流れ、そして江守商事に対する信用の大きさが事業拡大の追い風となり、存在感を着実に増していったのである。



OAショールームは開設と同時に多数の来客者を迎えた

1977(昭和52)年の主要取扱商品

染色関係	・染料
	・顔料
	・精練漂白剤
	・染色助剤
	・繊維仕上加工材
	・繊維加工樹脂
	・捺染糊剤 等
化成品関係	・化学薬品
	・合成樹脂
	・溶剤
	・原子力発電資材
	・可塑剤
	・顔料
	・製紙用薬剤
	・繊維用糊剤
	・ガラス繊維
	・界面活性剤
機械関係	・医薬原料
	・農薬原料 等
	・染色関連機械
	・省力化機械
	・産業廃水処理設備
	・集塵装置
	・冷暖装置
	・各種ボイラー
	・染色及び化学用はかり
	・各種計測器
・オフィスコンピュータ 等	
塗料関係	・一般建築塗料
	・外装内装特殊塗料
	・吹付防水塗料
	・塗装機一式
	・FRP基材
	・家庭塗料
	・各種ワックス等

江守幹男が社長に就任

江守商事が創業75周年を迎えた1981(昭和56)年6月、株主総会後の取締役会で社長に副社長の江守幹男が選任された。それに伴い江守清喜は会長に就任した。江守幹男は1977(昭和52)年6月に日華化学の社長に就任しており、名実ともに清喜の後継者となったのである。

清喜は数年前から社長就任を打診していたが、江守幹男は「江守商事と日華化学両社の社長兼務は無理」として固辞していた。しかし、今回は清喜からの命令であった。清喜にすれば、74歳という自らの年齢を考慮するとともに幹男の経営者としての力量を認め、若いリーダーに江守商事の将来を託す時期が来たかと判断したのであろう。同時期に取締役営業本部染料部長に就任した豊田愷二(現監査役)は、新社長の誕生を次のように振り返っている。

「日華化学での実績や江守商事副社長としての働きぶりを間近で見ていたため、社内的には何の不安も違和感もなかった。幹男社長は強力なリーダーシップで社員を引っ張っていった」

新社長となった江守幹男は早速、1982(昭和57)年度の経営方針の策定を行った。その内容は、江守商事が置かれた状況の厳しさを示すとともに、かねてからの路線である専門商社化をより推進することに主眼が置かれていた。

《江守商事 昭和57年度 経営方針》

昨年の世界経済は、第二次石油ショックの影響を受け、先進工業国は「不況」・「インフレ」・「失業」等の三重苦にあえいだ。

そして、発展途上国は、さらにこれらの経済的破綻が増幅し、顕在化して世界全体の経済は大きく沈滞した。

日本経済は、このような環境の中で、産業間の跛行性はあるものの先端産業の国際競争力を背景に、着実に成長し、世界から「繁栄の孤島」と羨望の目で見られるに至った。

しかし、日本の輸出主導型体質は貿易摩擦を招き、先進国は保護貿易政策を取る方向に向かわんとしている。

本年は、このような輸出主導型経済より、内需回復に期待がかけられている。しかし、わが国の行財政計画は破綻をきたし、個人消費も活力を欠き、実質経済成長率は3~4%程度と想定され、低成長時代はなおも続くものと思われる。

さて、日本の化学工業は安い原料(石油)と、大きな国内市場を基盤に成長発展を見たが、第一・第二次石油ショックで成長を支えた環境条件はほとんど失われてしまった。

とくに、全化学工業の40%以上をしめる石油化学が、国際競争力を失い、その存立基盤を問われる、重大な年になろうとしている。

染料・顔料・界面活性剤等の、ファインケミカルスは、素材型産業と比較し、技術開発力を中心に、多様化された市場ニーズに取り組み、企業間格差はあるものの、技術力のあるメーカーは成長をとげている状況である。

このような、厳しい環境の中でわが社は昨年、75周年を迎えたのである。全社員が「専門商社への挑戦と飛躍」を期し、努力を重ねた結果、下の表の成果を得る見込である。

	目標達成	対前年(55年)成長比
売上高	104%	109%UP
粗利益	103%	118%UP
経常利益 (引当前)	100%	116%UP

Column

江守清喜と
江守幹男

江守幹男は江守清喜の婿養子である。旧姓は中尾で、1929(昭和4)年2月26日に東京の浅草で生まれた。実父は布問屋を営んでいたが東京大空襲で焼け出され、父の生まれ故郷である福井に一家で疎開。しかし、福井でも空襲に遭い、度重なる苦労がたたったのか実父が死亡。長男の幹男は慶応義塾大学を中退して家族を養うことを決意した。母親が清喜夫人と従姉妹同士であり、伯母(清喜夫人の姉)の勧めで幹男は日華化学への入社を願うため、妙見山歓喜寺で清喜と面会することになった。1948(昭和23)年7月のことである。当時、清喜は41歳、幹男は19歳であった。江守幹男は次のように記している。

「…その当時、父も大地震で日華化学、江守商事共倒壊。江守商事は全焼し更に家族も妻子二名を失うなど人生の一大悲運に遭遇した直後であった。私共はその様なことは知らずに会ったのであるが長い読経の直後らしく声は年より可成り枯れており小柄な色の白い柔らかな人で物静かな声で母と丁寧な言語で東京から福井に至る過程等を話し合っていた様である。私には「中々苦労した様ですな」と敬語で話しかけられ、即入社決定となり、これがこれからのお互いの人生の転機になった訳である。人生とは人との出会いであると謂れているがつくづくその感が深く、この御引き合わせは仏天の御加護と不思議な様に感謝している次第である…」(『追想江守清喜』より)

日華化学に入社した幹男は、営業畑で頭角を表していく。清喜は幹男の仕事ぶり与人柄を高く評価し、長女寿恵子の婿として江守家に迎え入れた。幹男は江守商事にも1958(昭和33)年から籍を置き、後継者として清喜の薫陶を受けていった。



江守清喜と江守幹男。深い信頼で結ばれた師弟であり、親子である=1983(昭和58)年4月

「私と義父は考え方が似ており、話し合いをしてもすぐに結論が出た。考え方は非常に新しく、向学心の強い経営者だった。だからこそ、江守が染料問屋の時代に、日華化学のようなメーカーを作ったのだと思う。その一方で、人間形成に熱心な教育者であり、信仰を何より重視した宗教者だった」(江守幹男)

生前の清喜には次のようなエピソードがあった。

「…「江守さんは本当に立派な方を養子さんに貰われてケナルイわ」と生前江守会長はよく他社のオーナーから羨ましがられたようである。そんな話を社長室でニコニコしながら嬉しそうにごくうちの人に洩らしていた」(『江守商事八十年史』より)

また、清喜は地元紙に連載した自叙伝を幹男へのメッセージで締めくくっている。

「…幸いにして息子幹男は私の跡を継ぐ宿命にあり、更に更に大きく風雪に耐えねばならない。恐らく幹男は「如何なる事もやり抜く」決意であろう。願くば依って以て経済界に否、世の中に大きく貢献の使命を果たしてもらいたいものである」(日刊福井『私の走馬燈』=1978(昭和53)年7月16日付より)

なお、関連企業も大むね、良好な経営成績を残し、江守グループ全体の経営成果も、不況の化学界にあって、良好の結果を得たと、高く評価したい。

さて、本年は、わが社を取り巻く経済環境は、昨年以上に極めて厳しいものがある。とくに、化学工業界は不況に対処し、体質改善をはかるべく流通改革を検討している。

われわれ専門商社としての流通業の、死活を分ける厳しい選択の時代に突入したのである。「専門商社としての機能」を顧客からも、仕入先からも問われ選別される。サバイバル(生き残り)時代の到来ともいえる。しかし、現在は電子関連産業を始めとして、セラミックス・バイオテクノロジー・

C1化学・高分子新素材開発等、戦後第二の技術革新時代を迎えている。

わが社は企業体質を革新し、北陸三県を中心に、広く日本及びアジアの各拠点に対し、専門商社としての「江守商事」の使命を果たすべく、次の重点政策を推進する。

《重点政策》

1. 重心を下げる

- ① 経費節減、特に交際・接待費
- ② 省力化・営業・経理・倉庫のコンピューターによる事務一元化
- ③ 遊休資産の活用
- ④ 借金体質の改善
- ⑤ 損益分岐点を下げる



創業75周年記念式典が盛大に行われ、全社員が妙見山歆喜寺で行われた報恩法要に参列した＝1981(昭和56)年10月

Column

涙の創業75周年
記念式典

1981(昭和56)年に創業75周年を迎えた江守商事は、この年の10月31日に記念式典を執り行った。まず、妙見山歓喜寺で江守家代々、物故社員等への報恩法要が営まれた。続いて記念式典が開催され、特別功労者(平佐多晶、能登松次郎)表彰、永年勤続者(30年以上、20年以上)表彰、記念論文入選者表彰などが行われた。

特別功労者への表彰では、平佐多への表彰状を読む会長の江守清喜が絶句し、しばし言葉を失う一幕があった。その場面を社長の江守幹男は次のように記している。

「…七十五年の歴史をふり返ると東洋の盟主、近代国家日本の根底をくつがへした日中・大東亜戦争、それによる社屋焼失・敗戦。一から出直しの営業活動、そしてやっと再建された社屋を又もや福井大地震において全壊焼失・再び社屋再建。トピック記事を追うだけでもこの様な大事件の羅列でありそこに懸命に企業と命運を共にした主従がいたのである。(中略)筆舌に尽し難い辛酸をなめ「のれん」を守り通し社業を拡大、安定化させた人々の労苦を人一倍知っていたのが会長であったと思う。あれを想いこれを想い、遂に絶句されたので私は表彰状の様な型のあるものと違いその涙がなによりも永年の御苦労に対する感謝のあらわれであった様に思えるのである」(社内報『きずな』第15号=1982(昭和57)年発行より)

清喜の姿を見つめる幹男の目にも涙が溢れていた。度重なる苦難を乗り越えてきた江守商事の75年の歴史を象徴する一場面であった。



涙ながらに平佐多晶(元代表取締役副社長)への表彰状を読む江守清喜。ハンカチで口元を抑えている



特別功労者表彰を受ける能登松次郎(元常務取締役)

Column

江守清喜会長
喜寿祝賀会

1983(昭和58)年は江守商事にとって、慶事が重なった年となった。会長の江守清喜が喜寿、江守商事が創業77周年、日華化学も創立45周年を迎えたからである。この年の5月1日には、福井市文化会館において、清喜の喜寿祝賀会と江守商事創業77周年、日華化学創立45周年の記念式典が開催された。

式典には、福井県知事や福井市長を始め、海外からも両社と関係の深い企業家等の来賓が出席。アトラクションもダークダックスに加えて、台湾人歌手が美声を披露するなど、積極的な海外事業を展開する両社の式典にふさわしい、国際色豊かな内容となった。また、清喜の喜寿を記念して、清友会が清喜の胸像を寄贈した。この胸像は現在も日華化学創業記念館に設置され、社業の進展を見守っている。



江守清喜の喜寿を祝って、清友会から胸像が贈呈された

2. 商権の拡大

- ①一次店化への強化(二次店的発想より脱皮)
- ②営業力増大による商権の奪取
- ③メーカー対策の強化、重点メーカーの設定
- ④営業企画力を強化しメーカーからの信頼性を高め新商権を確保する

3. シェアの拡大

- ①営業力・技術力の強化
- ②ローラー作戦、既成市場の見直しと顧客対策の再検討
- ③新市場・新商品の積極的展開
- ④二次店の育成と設立
- ⑤海外戦略、台湾・韓国・タイ・インドネシア・香港・中国etc

4. 企画開発の充実強化

- ①長・中期企画開発の推進
- ②わが社の長期ビジョンの設定
- ③企画開発力を発揮し将来の商権確保

5. 利益の追求

- ①売上額より粗利額重視
- ②関係会社間の取引(キャッチボール)禁止
- ③利益の確保により将来の「江守商事」への投資を行いやすくする

6. 与信度の厳守

- ①売上代金回収管理の徹底
- ②審査機能の拡充強化

7. 教育の徹底

- ①専門教育 営業・経理・企画etc
- ②一般教育 英会話・各種技能取得etc
- ③幹部教育 管理者・経営者

- 8. 運命共同体意識の確立
- 9. 関連会社（江守商事マジョリティー）の独立と援助関係の明確化
- 10. 労務関係の改善
 - ① 諸規定の明確化
 - ② 給与・退職金・年金・旅費・社宅・諸手当の改善と明確化

社内体制の変革

新体制となった江守商事は、矢継ぎ早に社内体制の変革を実行していった。企業体質の変革に加え、専門商社として時代の流れに即応していくことを目指したのである。

1981（昭和56）年3月の機構変更で、総務部と倉庫を統括する管理本部を設置したほか、富山化成ビル内に富山出張所を設置した。1982（昭和57）年12月には、事業部制（染料事業部、化学品事業部）を導入し、責任と権限の一層の明確化を目指すとともに、業務部を設置して在庫のオンライン化を図った。

その目的について、江守幹男は次のように説明している。

「…一番大きな目的は、江守商事の隅々まで若い活力を充たす為であります。組織の活性化により、野性味豊かなバイタリティを引き出し、男っぽい雰囲気のある会社になりたい為であります。（中略）ものを大量に作っても売れる時代ではありません。このような素晴らしい柄ならば是非ほしいとか、価格は高いが本物の味がするとか、お客さんの希望に合った一ひねりしたものを作らなければ売れない時代であります。従ってメーカーや染工場に、専門的な知識と情報を提供出来る商社でなければ相手にしてくれない時代になりつつあります。だから事業部制にして、専門的に、福井、石川、富山、大阪、東京、名古屋と各地をプロの厳しい目で管理し、情報や知識を縦横

Column

技術開発センター 設立



技術開発センターに設置された自社開発のCCM（コンピュータ・カラーマッチング）。経験と勤に頼っていた染料の配合率をコンピュータで計算するシステムで、技術商社としての江守商事を大きくアピールした

1984（昭和59）年5月に設立された技術開発センターの目的は、染料分野を中心に情報技術商社としての機能をさらに向上させていくことにあった。江守商事は昭和30年代から社内でも染色試験を行い、顧客ニーズに対応するとともに技術ノウハウの蓄積に取り組んできた。1976（昭和51）年には染料工場を設置。本格的に自社開発の染料生産にも着手し、衣類だけでなくカーシート用の染料開発などを行っていた。

技術開発センターはこうした機能を集約し、営業部門や関係メーカーとの連携を深めつつ、より高度で幅広い分野の技術ノウハウの蓄積に努め、多様化する顧客ニーズへの的確な対応を目指したのである。

技術開発センターは1988（昭和63）年9月に、北陸カラー株式会社として独立。小ロット染色や各種染色試験等を通じて、江守商事の染料事業を支えている。

に活用していこうとする組織であります。それは責任体制を明確にしていくシステムでもあります」(社内報『きずな』第16号=1983(昭和58)年発行より)

機構の変更は以降も推進され、1984(昭和59)年7月には東京営業所が支店に昇格した。支店内には開発部が設置され、中央における拠点機能の強化と新技術の開発、さらには関東市場の拡大と海外展開の充実を目指した。

同年5月には試験室が南福井倉庫の敷地内に移転し、技術開発センターとなった。

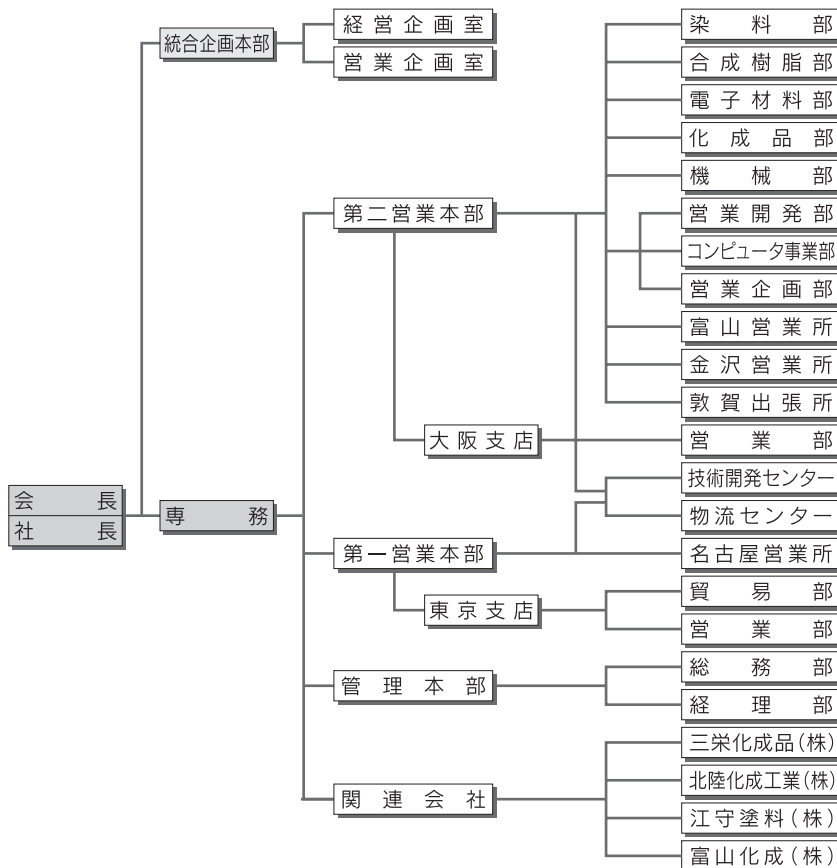
1985(昭和60)年には事業部制をさらに

発展させ、本部制(営業本部、管理本部)が導入された。それに伴い、3月に大阪営業所が支店に、名古屋出張所が営業所にそれぞれ昇格し、拠点機能をさらに高めていった。6月には青年重役会制度が発足。若手社員の代表がテーマに沿って議論を重ね、中期経営計画の策定と重要な業務計画に意見を答申することになった。

同年11月には日江興産株式会社が発立。江守商事グループ各社の損害保険、生命保険業務等を担当し、グループ内の福利厚生面の向上に貢献していった。

組織図

1985(昭和60)年7月現在



悲しみを乗り越えて ～江守清喜死去

1986(昭和61)年2月18日、江守商会长の江守清喜は脳梗塞のため、79年の生涯を閉じた。1984(昭和59)年秋に自宅で足を骨折して入院、余病を併発して闘病生活を送っていたが、ついに不帰の人となったのである。眠るような静かな最期であったという。この年は江守商事創業80周年という大きな節目の年でもあった。

密葬は2月20日に江守家の菩提寺である妙長寺で営まれ、27日に江守商事と日華化学等の合同社葬が福井市体育館で執り行われた。法名は本覚院久遠興栄日清大



江守清喜の棺を乗せた霊柩車が江守商事本社の前を通過。多くの社員が故人との別れを惜しんだ＝1986(昭和61)年2月20日

居士。

社葬当日は、関係者の悲しみを表したかのような寒さであった。大本山北山本門寺貫主の片山日幹猊下大道師のもと、穏や



福井市体育館で営まれた江守清喜合同社葬。弔問客は2500人に上り、広い会場内は悲しみに包まれた＝1986(昭和61)年2月27日

Column

江守清喜の
公職・受賞歴

江守清喜は江守商事、日華化学を始め、グループ各社、関連会社の社長を務める一方で、数多くの公職を歴任した。清喜の豊かな見識や高潔な人柄が各方面に広く知れ渡っていたためであった。また、産業界、地域社会への貢献から多数の受賞・受章歴も持っている。

◆主な公職

福井市社会教育委員
 福井市公平委員(委員長)
 福井県教育委員(委員長)
 福井県精神衛生協会会長
 福井県産業廃棄物処理協会会長
 福井市商工会議所常議員
 福井北ロータリークラブ会長
 福井県公害対策委員(委員長)
 福井県産業廃棄物処理委員長
 北陸経済連合会常任理事

◆主な受賞・受章

紺綬褒章(5回受章)
 福井市産業文化賞
 福井県教育功労賞
 勲四等旭日小綬賞
 文部大臣教育行政功労表彰
 従五位叙位

かな笑みを浮かべる清喜の遺影を前にして、葬儀委員長の市橋保福井銀行頭取が告別の辞、中川平太夫福井県知事、大武幸夫福井市長、長瀬彰造長瀬産業社長、海外合弁代表の陳雲龍台湾日華化学董事長、友人代表の品川秋視品川病院長(福井県教育委員長)、社員代表の平佐多晶(江守商事監査役)らが弔辞を述べた。

会場には県内外、海外からの弔問客が約2500人参列し、故人の遺徳を偲んで次々と焼香を重ねていった。この日、福井駅は喪服に身を包んだ弔問客で溢れたという。葬儀終了後はグループ会社の社員が残り、生前の清喜の愛唱歌であった「旅の夜風」を肩を組みながら合唱した。

広い会場には、清喜の生涯を言い表したかのような歌が、社員たちの涙声とともに響き渡った。忌明けの6月1日には、妙見山歓喜寺において江守商事80周年報恩法要と清喜の追悼法要が営まれ、江守商事の全社員が参列した。精神的支柱でもあった清喜を失った悲しみを乗り越え、いかに新しい江守商事を創造していくか——。それが社長の江守幹男や幹部はもちろん、社員一人ひとりに問われていた。



江守家の菩提寺である妙長寺で営まれた密葬＝1986(昭和61)年2月20日

Column

父・江守清喜の
思い出

にこやかに夫人に語りかける生前の江守清喜＝1983(昭和58)年1月



江守清喜は宴席でしばしば十八番の黒田節を披露した＝1983(昭和58)年5月



江守商事では新入社員研修会を妙見山歓喜寺で行うことが恒例となっており、江守清喜も必ず出席した＝1978(昭和53)年3月

私が物心ついた時から、父はとても忙しそうにしていました。食事の時も仕事の電話をかけていた姿を覚えています。家族に対しては厳しい反面、優しい父でした。日曜日には私たちをよく外に遊びに連れて行ってくれたものです。とにかく、人のことばかり考えている父で、他人への慈愛に溢れていました。父と接した人は誰もが自分が一番かわいられていると思っているようでしたね。倒産しかけた会社に救いの手をさしのべることも多く、よく関係者から感謝されていました。主人(江守幹男)とはあうんの呼吸で、お互いに全幅の信頼を抱いていたと思います。自宅でも二人で楽しそうに仕事の話をしていました。主人も父のことが大好きで、今でも何かある度に“お父さんは喜んでくれているかな”と話したりしています。江守商事が大きく成長したのは、会社に関わってきた全員の方々の努力のおかげ。本当に感謝しております。

【江守寿恵子(江守清喜長女、江守幹男夫人)】

Column

江守清喜の
在りし日々を再現

江守商事と関係の深い日華化学の本社敷地内に建つ「創業記念館」は、1994（平成6）年5月に建設された。江守清喜が使用した社長執務室を再現したものであり、設立の経緯は次のように説明されている。

当工場は、昭和23年6月福井大震災及び大水害により全壊した。初代の江守清喜社長は直ちに復興に着手、廃材により仮事務所を建設し、その一室を社長執務室とした。

戦災に次ぐ敗戦という未曾有の時代にあって、追い討ちをかけるような大災害に遭遇、加えて朝鮮動乱終結による油脂の大暴落により当社は企業存亡の危機に追い込まれた。

こうした激動の時代にあって、江守清喜社長はこの執務室において、己の経営信条により企業経営に専心した。爾来、本社ビル建設に伴い解体に至るまで社長室として使用されてきた。

旧建物の、大方の木材は腐食していたが、内部は往時のままを再現し「創業記念館」として再建した。当館によって、創業者江守清喜初代社長の経営信条並びに諸先輩の艱難辛苦を偲び、創業者精神の継承発展のよすがとしたいものである。（館内設置のパネルより）



幾多の来客を迎えた応接セットも往時のまま保存されている

館内には実際に使用されていた執務机や応接セット等が置かれているほか、江守清喜の愛用品等も展示されている。幾多の苦難を乗り越え、江守商事、日華化学を大きく成長させた江守清喜の在りし日々を再現しただけでなく、両社の歴史を後世に伝えている。



江守清喜が愛用した執務机。経営者として、そして一人の人間としての江守清喜の喜怒哀楽が刻み込まれている



1983（昭和58）年、江守清喜の喜寿を記念して清友会が贈った胸像



江守清喜の愛用品等も、江守商事、日華化学の歴史を語る貴重な資料として収納されている

3 Chapter3 章

ニュー江守の創造
を目指して

創業80周年を迎えた江守商事は「ニュー江守の創造」を掲げ、新たな飛躍へのスタートを切った。技術、情報を中心に専門商社としての機能を高めるとともに、企業体質の改革にも挑み、業容の拡大を続けていったのである。



全社員を前に「ニュー江守の創造」を宣言する江守幹男＝1986（昭和61）年

303作戦スタート

江守商事は1986(昭和61)年に創業80周年を迎えた。この大きな節目の年に、江守商事は『ニュー江守の創造』を社内外に宣言した。創業以来の伝統を継承しつつも、新たな発展を目指したのである。

その背景にあったのは、強い危機感であった。1985(昭和60)年度の江守商事の売上高は233億6200万円で、地方の専門商社としては全国的に見ても堂々たる規模にあったものの、当時の経済状況は江守商事にとって厳しさを増していたのである。社長の江守幹男は次のように記している。

「…江守商事は創業以来八十年間、日本の成長産業である繊維産業を中心に福井という絶好の土地で絹、人絹、合成繊維の異常な発達、急成長の中に江守商事の発展を位置づける幸運に恵まれたのであった。正に上がりのエスカレーターに飛び乗りその上を駆けのぼる様な勢いで、昭和三十年代四十年代と二桁の成長を為し遂げて来た。石油ショックを起点に五十年代は安定成長の時代であったが六十年代に入り急激な円高と共に、日本の繊維産業は下りのエスカレーターに切り変わってしまったのである。(中略) 我社は染料部を始めとして、主力の顧客の減産、縮小に合わせて営業成績も停滞し下りのエスカレーターに乗せられた兆候が出て来つつある。正に創業以来の一

大危機と云わざるを得ない。得意先が構造不況業種であったとしても我社は断じて不況企業に成ってはならないのである」(社内報『きずな』第20号=1987(昭和62)年発行より)

実際、当時の江守商事は収益性に問題があった。利益率は1%を切り、社内14部門の中に赤字部門も存在していた。こうした状況を変革するため、江守商事は江守幹男を中心に戦略会議を重ねていった。そして、303作戦の実行を決めたのである。303作戦とは、3年後(昭和63年度)に売上高300億円、経常利益3億円の達成を目的とした経営計画であった。

〈303作戦のビジョンと戦略〉

創造・挑戦

我社を取り巻く経済環境は、円高定着により加速度的に厳しく変革しつつある。従来の営業を踏襲すれば江守商事の明日は無い。

しかし、変革する江守商事に総力を挙げれば、変革出来るので2年間の短期計画303作戦を全社挙げて推進するものである。

●ビジョン

- I. 技術専門商社として戦略主導型経営を行なう。
- II. 福井の江守より、日本並びにアジアに通用する江守に成長を期す。
- III. 活力ある青年企業、しかも運命共同体である。

●重点戦略

1. 営業戦略
 - ①商品戦略
商権の獲得
特定業界に対してナンバーワン商品作り
 - ②仕入・物流戦略
重点仕入先の選定と集約仕入
中小専門メーカーの開発と育成・物流のトータルシステムの再構築(受注・配送)



創業80周年を記念した企業広告。“ゼロからの出発”を広くアピールした=1986(昭和61)年6月1日付福井新聞

- ③国際化戦略
 - 輸出入・三国間貿易の拡充
 - 技術専門商社としてのソフトを活用
 - 日華化学合併企業との連携強化
- 2. 財務戦略
 - ①低収益体質の改善
 - 固定費節減(損益分岐点引き下げ)
 - ②借金体質の改善
 - 遊休資産の活用
 - 自己資本比率のアップ
 - ③経費の節減
 - 変動費の節減
 - 総人員215名、2年間固定
- 3. 人財戦略
 - ①適材適所、信賞必罰、実力主義体制の推進
 - ②教育方針と教育計画の確立
 - ③企業人、社会人としての育成

●具体的方針

全員参画経営の推進
権限委譲と報・連・相の徹底実施

	61年度見込	62年度目標	63年度目標
売上高 (百万円)	25,500	28,866	31,425
経常利益 (百万円)	192	225	332
人 員 (名)	211	215	215

(江守商事グループ)

303作戦のスタートに際し、江守幹男は次のように社員に呼びかけた。

「…全社一体と成り若々しい企業体質に革新すべく多くの汗を流し知恵を絞って欲しい。一人一人が革新テーマを掲げ三〇三作戦に協力して頂く様、切にお願いするものである。二十一世紀に通用する技術商社として、真に得意先からよるこばれる商社となり北陸の江守から、日本の又更に世界に雄飛するニューエモリを期して、諸君と共に挑戦していこうではないか!!」(同前出)

303作戦が掲げたハードルは、当時の江守商事にとってはかなり高いものであった。当時、専務取締役を務めていた島川勝治(現相談役)は次のように振り返っている。

「かなり厳しい目標だったが、それだけにやる気がわいてきた。全社員が一生懸命目標達成に向かって努力していった」

創業80周年という大きな節目の年に、江守商事は新たな目標に向けて再出発したのである。

ニュー江守の創造を目指して

『ニュー江守の創造』の一環として、江守商事は機構改革を実施した。まず、1986(昭和61)年10月21日付で社長室の設置と営業本部の一本化が行われた。

社長室の機能は江守商事と関連会社(北陸化成工業、江守塗料、富山化成、日江興産)の中・長期経営戦略を立案するとともに、社長特命事項や与信審査等を行うことであった。一本化された営業本部は、染料(織材課・業務課)、化成品、合成樹脂、電子材料の各グループ、機械システム事業部、コンピュータ事業部(営業・システム課・保守係)、貿易部、物流センター、技術開発センター、各営業拠点(東京・大阪・名古屋・富山・敦賀)、関連会社(三栄化成品・サンコー)を統括することになり、営業力の強化が図られたのである。

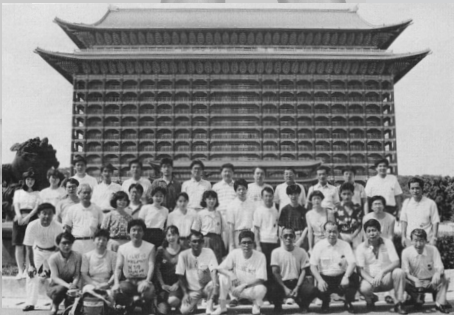
また、1987(昭和62)年9月1日付で、コンピュータ事業部が電子機器事業部と改称され、電子材料部を包括することになった。成長分野であるコンピュータ関連事業を強化することが目的であった。同年には貿易部も海外事業部と改称され、海外の事業展開の拡大を目指した。

さらに、1989(平成1)年には営業本部の改編を中心とした機構改革が行われ、建材

Column

303作戦成功を記念した
全社員海外旅行

“ニュー江守ゼロからの出発”を掲げてスタートした「303作戦」は見事に成功を収めた。そこで江守商事では、1989(平成1)年夏に作戦成功を記念した全社員対象の海外研修旅行を実施した。この海外研修旅行は社長の江守幹男が作戦成功時の公約として宣言しており、社員の士気を大いに高めることになった。研修旅行の行き先は台湾と香港・マカオに分かれ、それぞれが3班編成で7月から8月にかけて、3泊4日の日程で順次出発した。旅行後には参加した社員の感想文集『研修旅行を顧みて』が編纂された。



303作戦成功を記念して行われた海外旅行で

部が新設されるとともに、電子機器事業部内に金沢営業所が設置された。

こうした機構改革は、“ニュー江守”の創造を目指すことが最大の目的であり、そのための手段であった。

その一方で、役員の変更や中堅・若手社員の登用を積極的に進め、幹部社員が研修を重ねるなど、社員の意識改革にも力を注いだ。

「この時期は江守商事にとって踏ん張りどころだったが、社内には活気が溢れていた。303作戦は企業体質の刷新を目指したものと言える」(現監査役 豊田愷二)。

江守商事は現状維持を是とすることなく、より効率的で能動的な集団へ変貌していったのである。

1985(昭和60)年の主要取扱商品

染色関係	・染料	
	・顔料	
	・精練漂白剤	
	・染色助剤	
	・繊維仕上加工剤	
	・繊維加工樹脂	
	・捺染糊剤	
	・経糸用糊剤	
化成品関係	・CCM(コンピュータカラーマッチングシステム)等	
	・化学工業薬品	
	・合成樹脂	
	・溶剤	
	・原子力発電資材	
	・可塑剤	
	・顔料	
	・製紙用薬剤	
	・ガラス繊維	
	・界面活性剤	
	・医薬原料	
	・半導体	
	・電子材料 等	
	情報システム関係	・書店外商事務
・自動車整備業		
・ホテル会計		
・学校会計		
・製造受注管理		
・酒問屋販売事務		
・スイミングクラブ会員管理		
・染色生機在庫管理		
・鉄工部品管理		
・各種OA機器		
・オフィスコンピュータ 等		
機械関係		・産業用ロボット設備
		・制御用コンピュータ及びCAD/CAM各種センサー
	・物流機器	
	・レーザー機器	
	・繊維染色仕上機械	
	・公害防止関連装置	
	・省力化設備	
	・水処理装置	
	・ボイラー設備	

303作戦から GO-GO作戦へ～ 新たな飛躍を期すために

1986(昭和61)年度から始まった303作戦は1988(昭和63)年度で終了し、成功を収めた。当時、日本の産業界はバブル経済のただ中にあった。しかし、江守商事はいわゆる財テクには走らず、本業に邁進した結果としての業容拡大であった。江守清喜が生前から口にしてきた「資産は運用しない。利益は汗水たらして生み出すもの」という商いの哲学が、しっかりと受け継がれていたのである。

社長の江守幹男は303作戦について次のように記している。

「…三〇三作戦のキーワードは報連相であったし、燃える集団作りであった。当時から比べると報連相は可成り改善された様に思える。燃える集団作りは燃えている処と、まだ若干不完全燃焼のところもある様に見受けられる。その中、周囲が燃えてくればすべてが燃えてくるだろうと思っている」(社内報『きずな』第22号=1989(平成1)年発行より)

「…三〇三作戦を実施する三年前の我社の経営体質は極めて脆弱なものであった。(中略)そこで企業体質の大改革を打ち出し、年商三〇〇億、経常利益三億円、全部門黒字化を目標とし報・連・相の徹底を方針として、運命共同体的結束を呼びかけたのである。三〇三作戦は全目標を達成し、企業体質は一段と改革され社内の風通しも良くなり、報・連・相も実施されつつある。何よりもやれば出来るという自信が大きな収穫であった」(社内報『きずな』第23号=1990(平成2)年発行より)

現在の視点で検証すれば、303作戦を通じて経営基盤の強化を実現したことはもちろん、社員の意識や社内の雰囲気をも含め



GO-GO作戦が展開されていた当時の社内風景

た総合的な企業体質の改善につなげた。すなわちニュー江守の創造に成功したと総括できるであろう。さらに、その過程を通じて、21世紀の江守商事像を明確化していったのである。

そして、新たな目標としてGO-GO作戦を掲げた。1991(平成3)年度に経常利益5億5000万円達成を目標とする経営計画であり、その先には株式の店頭登録が視野に入っていた。新たな飛躍を期すため、江守商事の新しい挑戦が始まったのである。

〈GO-GO作戦のビジョンと戦略〉

●基本戦略

我社は、ボーダレスエコノミーの時代に国内外に技術専門商社としての基盤固めを行い、且つ将来の店頭公開への準備を進め、「開かれた会社」へと展開する。

●ビジョン

- I. 技術専門商社として戦略主導型経営を行う
- II. 福井の江守より、日本並びにアジアに通用する江守に成長を期す
- III. 情報産業として情報に付加価値を蓄積する

IV. 活力ある青年企業、しかも運命共同体である

●営業戦略

1. 商品戦略
 - ・ 商権の獲得、一次店化
 - ・ 特定業界に対してナンバーワンシェアの獲得
 - ・ 情報産業、ソフト戦略化の展開
2. 仕入・物流戦略
 - ・ 重点仕入先の選定と集約仕入
 - ・ 中小専門メーカーの開発と育成
 - ・ 物流の基本的見直しとトータルシステムの再構築
3. 国際化戦略
 - ・ アジア、アセアンを重点的に市場開発
 - ・ 輸出入・三国間貿易の拡充
 - ・ 技術専門商社としてのソフトを活用
 - ・ 日華化学合併企業との連携強化

●財務戦略

1. 収益体質の強化改善(損益分岐点引き下げ)
2. 開かれた会社として店頭公開出来得る諸規定等の整備、財務体質の抜本的改善を行う
3. オンラインに依る全社的高度コンピューター管理

●人財戦略

1. 適材を適所に採用し専門集団を作る
2. 信賞必罰、実力主義体制の推進
3. 教育方針の明確化と教育計画の確立
4. 企業人、社会人としての育成

●関連会社戦略

独立採算性の強化と企業体質の改善

情報システム事業の成長 ～福井銀行第3次 オンラインシステム構築

303作戦が展開されていた時期、江守商事の情報システム事業はコンピュータ、OA機器、銀行端末を3つの柱として、着実に成長を続けていた。この時期に特筆すべきは、1988(昭和63)年9月に福井銀行の第3次オンラインシステムを受注したことが挙げられる。江守幹男も「情報システム事業が成長した最大の要因は、福井銀行との取引があったから」と当時を振り返っている。

同システムはホストコンピュータから通帳までを一新する情報システム面の大改革で、江守商事は日立製のホストコンピュータ3台、汎用端末機553台、プリンタ617台など計1630台の端末機を納入。同年2月に同行と共同設立した株式会社エフ・イーシ

ステムもシステム開発に従事した。江守商事が同行に提出した見積書の額面は過去最高の56億6670万円にも及んだ。

同システムは1991(平成3)年11月5日に、当時としては地銀トップクラスのトータルバンキングシステムとして稼働。江守商事にとっても、ハード、ソフト両面からこのビッグプロジェクトをサポートしたことで、情報システム部門の総合力向上につながっていた。

エフ・イーシステムは以降も金融機関中心のシステム、ソフトウェア開発等を基幹業務に、江守商事と連携しながら業務を展開していった。

1986(昭和61)年10月には、日立製作所、ウラセと合弁で、ソフトウェアの受託開発を主要業務とする株式会社テクノシステムを設立。303作戦の一環として、コンピュータ市場へのさらなる展開を目指した。1990



OAショールーム開設5周年記念OAフェアには2日間で約700人が来訪し、大いに賑わった＝1987(昭和62)年10月1日

(平成2)年5月には、石川県内における事業強化を目指し、日立製作所、北陸電話工事と合弁で北陸江守コンピュータ株式会社を設立。同社は2003(平成15)年3月に江守商事と合併するまで、情報システム機器の販売、ソフトウェアの開発・販売等を行った。

また、コンピュータ事業部内では、日立と協力してSE、営業担当者の教育に力を注ぎ、その後のオリジナルソフトウェア開発やシステム構築を担う人材育成につながっていった。

こうした情報システム部門の成長は、社内の他部門にも刺激を与え、全社的な士気向上に大きく貢献していったのである。

創業85周年

1991(平成3)年、江守商事は創業85周年を迎えた。9月21日に妙見山歎喜寺で創業85周年記念報恩大法要が営まれ、法要後には石川県の山代温泉で祝賀記念パーティが盛大に開催された。

この時期、江守商事は株式公開という新たな目標を掲げ、グループ企業を含めた積極的な事業展開は、情報技術商社にふさわしいものとなっていた(表1)。

社内的にも、1989(平成1)年に本社社屋を改装し、1990(平成2)年12月からは日華化学と共同で東京の自社ビル(8階建て)建設も開始された。さらに、1991(平成3)年には、テクノポート福井、ソフトパー



全社員が出席して行われた創業85周年記念報恩大法要(妙見山歎喜寺)＝
1991(平成3)年9月21日

クふくいへの進出が決定するとともに、北陸化成工業もグリーンピア清水（丹生郡清水町）への移転が決まった。

また、株式公開を目指すため、1989（平成1）年、1990（平成2）年に増資を行い、

資本金は5億7400万円となった。1989（平成1）年10月には社員持株会も発足し、社員一人ひとりが企業発展の利益を享受できる仕組みも整備されていった。

1990（平成2）年度の売上高は365億9700

創業85周年を迎えた江守商事の事業展開

（表1）

繊維染料部門	<ul style="list-style-type: none"> ・ 染顔料 ・ 機能性色剤 ・ 洗顔料中間体 ・ 界面活性剤 ・ 機能性加工樹脂 ・ 機能性フィルム ・ プリントケミカル ・ サイジング剤 ・ CCM その他テキスタイルケミカル 	情報機器部門	<ul style="list-style-type: none"> ・ 汎用コンピュータ ・ オフィスコンピュータ ・ ワードプロセッサ ・ パーソナルコンピュータ ・ ワークステーション ・ ファクシミリ ・ 電話機・交換機 ・ 各種周辺装置・各種端末装置 ・ 業務ソフトパッケージ各種 ・ 業種ソフトパッケージ各種 ・ トータルネットワークシステム
化学品部門	<ul style="list-style-type: none"> ・ 石油化学製品 ・ 無機化学製品 ・ 電力関連資材 ・ 界面活性剤 ・ 医薬原料 ・ 金属表面処理剤 ・ 塗装原料 ・ 製紙用薬剤・希土類 ・ バイオテクノロジー製品 その他高機能製品 	電子材料部門	<ul style="list-style-type: none"> ・ 電子部品 ・ 印刷配線板 ・ ニューセラミックス ・ チップ梱包資材 ・ OEM生産 ・ 液晶
合成樹脂部門	<ul style="list-style-type: none"> ・ 熱可塑性樹脂 ・ 熱硬化性樹脂 ・ エンジニアリングプラスチック ・ 機能性複合材料 ・ 合成樹脂製品 ・ プラスチック成形加工機 その他樹脂関連副資材 	エンジニアリング部門	<ul style="list-style-type: none"> ・ 染色仕上機器 ・ 産業機器・省力化機械 ・ 立体駐車場・物流機器 ・ ボイラー設備 ・ 水処理装置 ・ 公害防止関連装置 ・ ハイテク関連機器 ・ 計装制御用コンピュータ ・ 建築機械設計施工
建材部門	<ul style="list-style-type: none"> ・ スーパーユニクルタッチ（特許品） ・ 内外装材 その他特殊建材 	海外事業部門	<ul style="list-style-type: none"> 韓国・台湾・香港・中国・フィリピン・タイ・シンガポール・インドネシア・アメリカ・ヨーロッパ他



明るい雰囲気にもまれた創業85周年記念パーティー＝
1991(平成3)年9月21日

万円(前年度比17.9%増)、経常利益4億4800万円(同18.9%増)の大幅な増収増益を達成し、1991(平成3)年度には売上高373億3900万円、経常利益5億5500万円となり、1989(平成1)年度から目標にしていたGO-GO作戦を成功させた。江守幹男は次のように振り返っている。

「303作戦、GO-GO作戦ともにハードルは高かった。それでも成功することができたのは、社員各自が“福井の江守では飽き足らない”という強い願望を持っていたからではなかったか。“日本の江守になって

いこう”という覇気があったと思う。2つの作戦を通じて社内のモラルがアップしたのがはっきりとわかった」

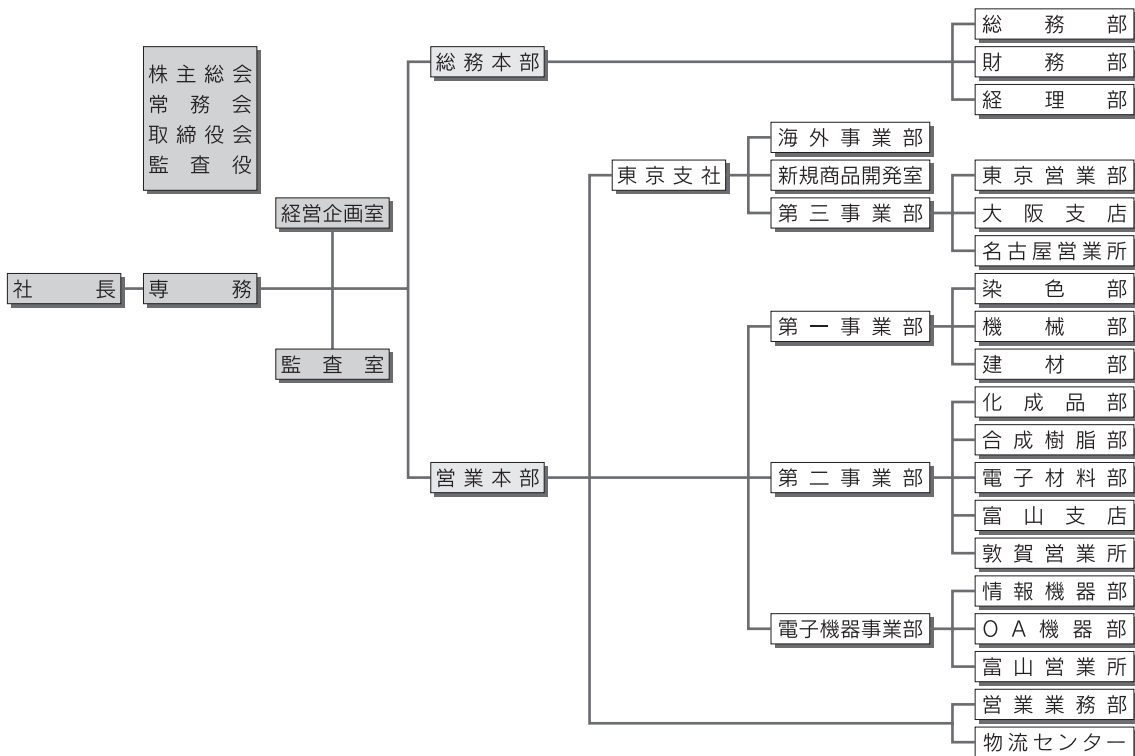
好景気の後押しもあり、江守商事の歩みはさらに力強さを増していった。



本社は1989(平成1)年に改装された。それまでは毎週月曜日、社員が総出で窓ガラスを清掃する習慣になっていた

組織図

1990(平成2)年4月現在



江守幹男が築いたもの

江守幹男は1992(平成4)年6月、社長職を退いて取締役会長に就任した。江守幹男が社長を務めたのは12年間で、副社長時代を含めても本格的に経営に携わったのは20年余りである。江守商事100年の歴史にあっては、決して長い歳月とは言えない。

しかし、その期間を抜きにして、江守商事の歴史を語ることはできないであろう。江守幹男が社長在任中、江守商事の売上高は2倍以上、経常利益は9倍以上に伸長し、社員数も倍増した。こうした企業規模の拡大はもちろん、強力なリーダーシップと果敢な行動力で情報技術商社への脱皮と

社員の意識を含めた企業体質の改革を図り、“ニュー江守の創造”を成し遂げたからである。

江守幹男は自らが掲げた情報技術商社について、次のように説明している。

「…在庫機能や金融機能、配送機能を持ち商品を右左に動かしている商社では今日は生きられない。商社無用論が出たのも流通のパイプが長く複雑で、徒らに流通コストが高くなり、その機能に価値を認められないからである。真に必要な商社は、マーケティング力を持ち、情報を正確に伝達出来る能力を持ち合さなければならない。又、生産材の商社であれ、ソフト商社であれ、専門の技術を身につけていなければこれからの日本の産業界の



江守幹男に率いられ、“江守丸”は荒波を乗り越えて大海原へと出帆した=1991(平成3)年9月

高級化・差別化のニーズに応えることは不可能であろう。ユーザーとメーカーの間に立ち、共に求め合う高度の商品を提供して、しかも市場開発を行なえることが、情報技術商社の責務であり条件である。大型商社では出来得ない分野であり、これからの日本に是非必要な機能である」(社内報『きずな』第24号＝1991(平成3)年発行より)

産業の趨勢が量から質へ、工業化から情報化へ、そしてグローバル化へと移行する時代にあつて、江守商事は世界を視野に入れた情報技術商社へと変貌していった。江守幹男は自らが経営に携わった時代を次のように振り返っている。

「私自身、“北陸の江守で終わりたくない”と痛切に感じており、副社長時代から新しい江守づくりを考えていた。江守には野武士的で野性味豊かな、たくましい雰囲気があり、こうした江守の財産とも言える部分を伸ばし、技術と情報、そして営業力を強化していきたいと思った。社長在任は10年余りだったが、その時代の日本は変化、激動の時代で、中身が非常に濃かった。そうした時代に、私のような行動的なタイプが社長を務めたのは、江守商事にとってタイミングが良かったのではないか。企業は自力だけで成長できるものではなく、景気や時代の変化といった外的要因をいかに追い風にできるかが重要になる。向かい風にしてしまった企業は終わる。その意味では、江守商事は幸運だったと思う。いい時代の中でいい顧客に囲まれていた。そして何より、いい社員がいた。社員たちには社長としてずいぶん厳しいことも言ったし、営業の現場で苦勞したことも多かったと思う。それでも皆、私についてきてくれた」

江守幹男は江守商事の副社長に就任直後、全社員に江守商事を船に例えて「荒波

の外洋で航海できるよう、喫水の深い体質に変えていく必要がある」と訴えた。その言に従うならば、江守商事という船は船長江守幹男に率いられ、大海原へと船出した。

水平線のその先には、世界が、そして未来が広がっていた――。

第3部

世界へ、そして未来へ

1 Chapter 1 章

21世紀への
挑戦

1992(平成4)年、江守商事の社長に31歳の江守清隆が就任した。若きリーダーに率いられた江守商事は、1994(平成6)年に株式店頭公開を実現。平成不況の逆風の中、IT事業の展開やグローバル化を積極的に推進するとともに、社内体制の強化を図り、新しい時代に果敢に挑んでいった。



株式公開を祝い、ダルマに目を入れる社長の江守清隆

若きリーダーの誕生

1992(平成4)年7月23日、福井市のフェニックスプラザで江守商事の会長・社長就任披露パーティが開催された。会長となった江守幹男の後任として江守商事の社長に就任したのは、幹男の長男、江守清隆である。当時31歳の青年社長の誕生であった。江守清隆は法政大学経済学部卒業後、長瀬産業に4年間勤務。1988(昭和63)年に江守商事に入社し、常務、副社長を歴任してきた。

パーティには栗田幸雄福井県知事(当時)や政財界、化学、染色、繊維機械、コンピュータの各業界、海外合弁事業の関係者など約600人が出席し、若きリーダーの就任の門出を祝福した。パーティ後には江守商事、グループ会社の全社員とOBが参加した懇親会も開催された。

この社長交代は「外的要因によるもの」(江守幹男)であった。当時、江守商事が株式公開(店頭登録)、日華化学が名古屋証券取引所二部上場を目指してそれぞれ準備を進めていたが、両社の社長を江守幹男が兼務していることが関係当局から問題視された。そのため、江守幹男が江守商事

の社長を退任することで江守商事の株式公開、日華化学の上場を円滑に進めることになり、江守清隆が社長に就任することになったのである。

「社長の交代に際しては“若過ぎる”のではと悩みましたが、江守商事には新社長を支えることができる人材がいた。大家族主義の社風の中で、子供の頃から清隆を知っている社員たちが、彼を一人前にしてやろうと結束してくれたことが嬉しかった。今にして思えば、交代はベストのタイミングであったと思う」(江守幹男)

「いずれは江守商事にと思ってはいたが、本当はもっと長瀬産業で社会人としての経験を積みたかった。江守商事に入社してからの4年間で各事業や人間関係など、社内を一通り見渡すことができ、改革によって必ず違うステージに進める企業だと思った。株式公開を成功させるためにも、社長就任の打診を受けることにした」(江守清隆)

江守清喜、幹男とともに日華化学の社長を兼務していたが、江守清隆は江守商事の経営だけに携わった。つまり、江守商事にとって初めての“専任社長”が誕生したのである。そのことが社内に新たな活力を生んでいった。

そして、江守清隆はその言葉通り、さまざまな改革を実行に移していった。就任以降、バブル崩壊後の市況悪化が深刻度を増していく状況下にあって、現状維持を是とすることは後退と同義であった。

若きリーダーの誕生は、江守商事の21世紀への挑戦の始まりであった――。



盛大に開催された会長・社長就任披露パーティ=1992(平成4)年7月23日



江守幹男から清隆へ、経営のバトンが手渡された

Column

アクアビル 完成

1992(平成4)年3月、江守商事と日華化学が共同で建設を進めてきた江守日華アクアビル(東京都墨田区駒形)が完成した。同ビルは地上8階建て敷地面積221㎡、延床面積1254㎡。名称が示す通り、水(AQUA)の流れをイメージしてデザインされ、外壁はマリンプル系のタイルで仕上げられている。テレビ会議システムやビル遠隔管理システムなど最新鋭の設備を備えたインテリジェントビルであり、両社の東京における拠点の社屋となった。1997(平成9)年3月に江守商事の東京支社が現在地(東京都千代田区鍛冶町)に移転したため、以後は日華化学の東京支店として使用されている。



日華化学と共同建設した江守日華アクアビル。現在は日華化学東京支店となっている



1997(平成9)年に現在地に移転した東京支社

株式公開を実現

1994(平成6)年2月2日。江守商事は株式公開(現在のジャスダック市場上場)を実現した。初値は公募価格を3.8%上回る1380円がつき、出来高は31万4000株であった。

江守商事が本格的に株式公開に向けて動き出したのは1989(平成1)年に入ってからである。社内にGP(ゴーイングパブリック)委員会が設置され、株式公開への準備を行ったのである。以来、社内ではGP委員会を中心に実務が進められ、日華化学との役員兼務の廃止を始めとする両社の関係の見直しや諸規定の整備、社員持株会の発足等に加え、幹事証券会社との打ち合わせ、申請書類の作成などが行われていった。



株式公開社内祝賀会で鏡割り＝1994(平成6)年3月19日



会長の江守幹男は記者発表の席上、株式公開を機に「国際化、ハイテク化、情報化をキーワードに、情報技術商社を目指す」と抱負を述べた＝1994(平成6)年2月2日

当時、江守商事は303作戦やGO-GO作戦が展開され、各事業部門が目標達成に邁進していた。その一方で、株式公開に向けた地道な作業が続いていたのである。当初は1992(平成4)年秋に株式公開を予定していたが、日本経済の低迷による証券市場の冷え込みもあり、公開実現は当初の予定より延期された。当時、常務取締役だった山崎信一(前監査役)は次のように振り返っている。

「公開が実現した感激は非常に大きかった。公開後は公開企業としての経営が求められ、社内のモラルアップにつながったと思う」

また、社長の江守清隆は株式公開を「江守商事の歴史に残る大事業」と位置づけ、次のように記している。

「…皆さんの努力、諸先輩の苦勞を形に出来たことを大変嬉しく思いました。しかし、このことは同時に江守商事の株を買っていただいた、たくさんの株主の方々の期待に応える新しい使命が我々に与えられた瞬間でもあるのです」(社内報『きずな』第28号=1995(平成7)年発行より)

そして、公開企業にふさわしい管理体制の確立に向け、社内体制の整備に取り組んでいった。

まず、月次ベースの各部各課単位の経常利益までの経営計画を策定・実施し、全社員の経営参加意識の向上と経営数字への理解を深めることを目指した。

さらに、経営の透明度、健全度を重視し、事実が正確に見える管理体制を実践していった。

株式公開は、企業としての質的向上を目指す、新たなステージへの出発点であった。

Column

江守きずな会 発足

1996(平成8)年、江守商事のOB会「江守きずな会」が発足した。OB間の親睦や情報連絡、相互共済を目的としており、江守商事総務部内に事務局が置かれた。年に1度総会が開催され、会員同士が旧交を温めている。



1996(平成8)年に発足したOB会「江守きずな会」

逆風に立ち向かう ～積極的な事業展開を推進

新体制となった江守商事を待ち受けていたのは、深刻度を増す平成不況であった。江守商事はバブル期に株式投資や土地投機の類に一切手を出していなかったが、それでも厳しい逆風下での企業経営を強いられることになった。

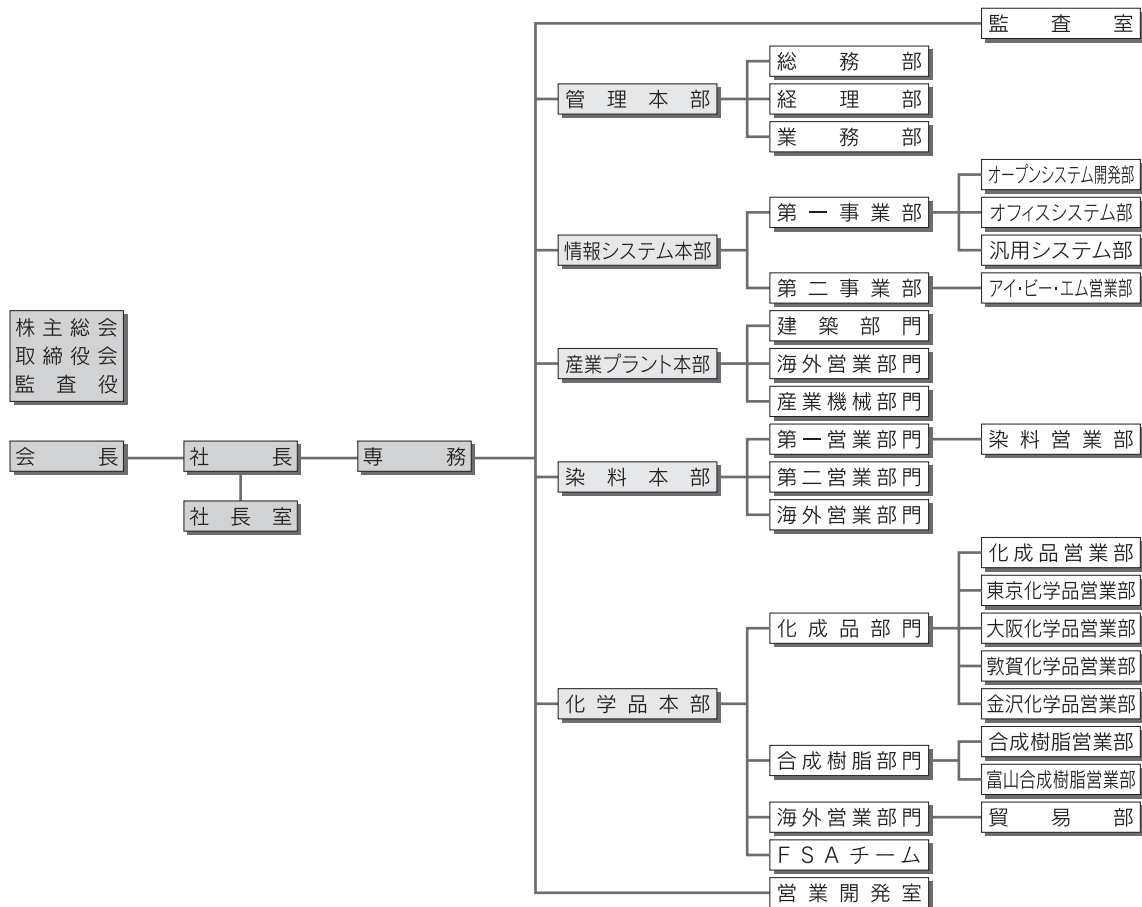
実際、1992(平成4)年度の売上高は386億700万円で前年度比3.4%増となったものの、経常利益は5億2200万円にとどまり、前年度比6.0%減となった。江守商事はGO-GO作戦に続いて1995(平成7)年度までに

経常利益10億円の達成を目指す「テン作戦」を展開したが、目標を達成することはできず、同年度まで4期連続の減益となった。それまでの江守商事を支えてきた染料や化学品分野は、国内の繊維、衣料産業等の競争力低下によって苦戦を強いられ、企業の投資意欲減退は情報事業の低迷に直結した。

しかし、江守商事はこの時期、グローバル化、ハイテク化、情報化をスローガンに掲げ、国内外で積極的な事業展開を推進した。社内的には1994(平成6)年、営業部門に本部制を導入。染料、化学品、産業プラント、情報システムの4本部制として、より

組織図

1994(平成6)年7月現在



機動的、能動的な組織を目指した。また、相次いで関連企業を設立し、江守グループ全体の総合力強化に努めた。

逆風の中にあっても、江守商事はひるむことなく将来への布石を打ち続けたのである。

情報システムの 新たな潮流に対応

江守商事は1993(平成5)年7月、日本アイ・ビー・エム株式会社と特約店契約を締結し、従来の日立製品に加えて、パソコンやワークステーション等のIBM製品の取り扱いを始めた。さらに、両社の製品を中心に多様化するユーザーニーズに応じて異なるメーカーの機器やソフトウェアを組み合わせさせたシステムを構築できる体制を整えた。つまり、マルチベンダー化への対応を進めたのである。

さらに、1994(平成6)年2月には、IBM特約店として事業を展開していたマエダコンピュータサービスから営業権と従業員の譲渡を受けて江守マエダコンピュータサービス株式会社を設立。江守商事情報システム本部、アイ・ビー・エム営業部と連携したIBM製品の拡販のほか、日立、IBM両製品を軸に事業の拡大を図った。同社は1995(平成7)年4月に江守システム開発株式会社に名称を変更し、事業をシステム開発に特化するとともに、営業部門を江守商事に移管した。

また、この時期の江守商事の情報システム部門は、“EMORI OFFICE 21”をコンセプトに掲げ、ビジネス環境におけるトータルソリューションの提供に力を注いでいった。官公庁への実績も向上し、1992(平成4)年8月に福井県庁から図書館シス

テムを受注したことを機に、県税システムや県庁ネットワークシステムを受注した。1997(平成9)年には福井銀行の第3.5次オンラインシステムも担当した。

さらに、1990年代初めから着手していたオープンシステムへの取り組みが、独自の物流システム開発につながり、現在の主力製品である「リアルタイムDCシステム」へと進化していった。

江守商事の情報システム事業は、1988(昭和63)年の福井銀行第3次オンラインシステム受注後から業績が伸び悩んでいた。そこで江守商事はこうしたマルチベンダー化、オープン化、ダウンサイジング化などを通じて、脱メーカー、脱ホストシステムを図っていった。情報システムの新たな潮流を見据え、時代に先駆けた事業の再編を実践し、さらなる成長を目指したのである。

その一方で、通信事業への参入もスタートした。1995(平成7)年9月、福井県の企業で初めてとなるインターネットのプロバイダ事業を開始。“INTERBROAD”(インターブロード)と命名されたインターネット接続サービスをスタートさせたのである。

さらに、1996(平成8)年4月には、JR福井駅前にパソコンショップ「マルチメディアCAN」をオープンした。江守商事としては初の小売部門を備えるとともに、インターネットカフェやマルチメディア工房に加え、パソコン教室も併設していた。

人に、よりやさしいインターネット。



INTERBROAD

1995(平成7)年9月、江守商事は福井県内の企業で初めて、インターネットプロバイダ“INTERBROAD”をスタートさせた

Column

グループ企業、関連企業が 相次いで設立

1990年代に入り、本編で取り上げた以外にも、江守商事のグループ企業、関連企業が相次いで設立された。

■江守リースキン(株)

[1993(平成5)年11月設立]

(株)トーカイのフランチャイズチェーンとして、資本金5000万円で設立。業務・家庭用モップや玄関マット類のリース、空調整備や清掃溶剤等の販売を行う。本社は江守商事の本社内に置き、事務所は物流センターに隣接して開設した。現在は、江守企画内でリースキン事業を展開している。

■江守企画(株)ドコモショップ福井店

[1995(平成7)年2月設立]

NTTドコモの準直営店として、福井県内では最初のドコモショップとなった。開業に合わせて設立した江守企画(株)が同店と江守トラベルサービスの運営を担うことになった。

■江守エンジニアリング(株)

[1995(平成7)年10月設立]

日華化学、三菱化成エンジニアリング(現三菱化学エンジニアリング)と共同で設立。化学工業、繊維、原子力、情報電子、食品医薬、環境保全などの分野における各種設備、装置、機器の設計施工、修理、保全等を業務とした。

■江守物流(株)

[1996(平成8)年4月設立]

取扱商品の保管・管理や配送を担当する物流業務を独立させた。別会社にすることで、コスト意識の徹底を目指した。



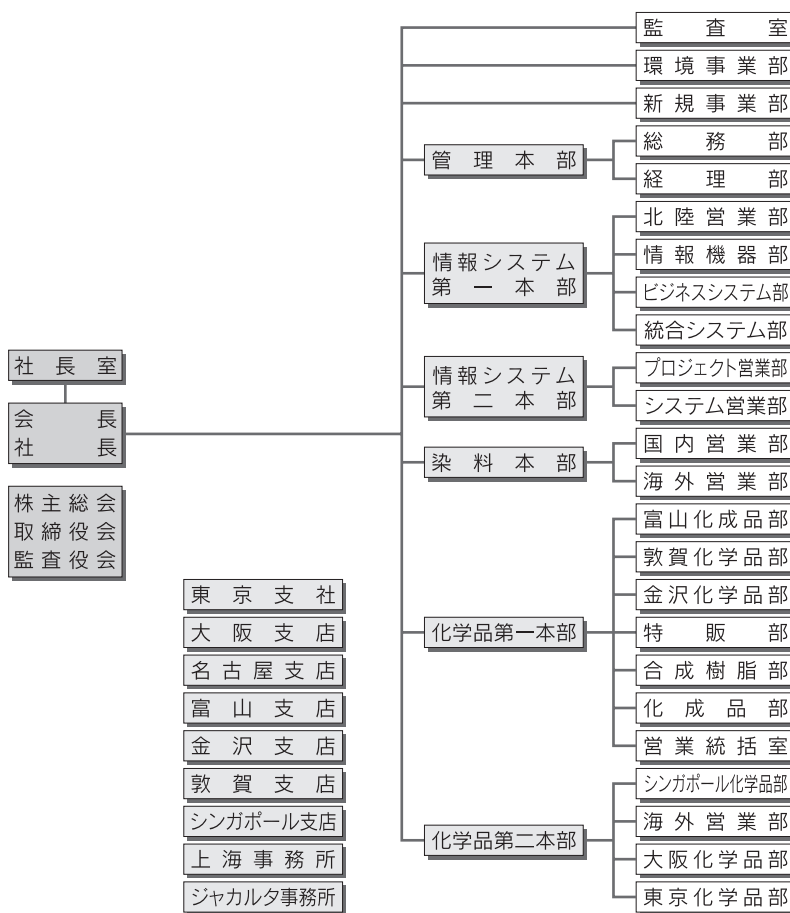
北陸で最大級のエンジニアリング企業として設立された江守エンジニアリング(株)の調印式で=1995(平成7)年9月28日

社内的にも、1996(平成8)年5月から社内ネットワークシステム“JEANS”を導入。本社内及び国内外の支社・支店・事務所にパソコンを設置し、電子メールを活用する

ことで情報伝達のスピードアップを促進した。また、イントラネットの運用も開始し、情報の共有化を図ることになった。

組織図

1998(平成10)年10月現在



Column

新たな拠点の整備～ 江守情報システムビル、 南福井江守ビル、本社別館

1994(平成6)年12月、情報システム部門の拠点として、福井県丸岡町(現坂井市)のソフトパークふくい(情報産業集積団地)内で建設を進めてきた江守情報システムビルが竣工した。鉄骨4階建て、延床面積は1093.86㎡。総工費は約3億円。それまで分散していた情報システム部門を集約することで、営業活動や開発業務の効率化を目指した。ビル内にはLANを構築するなど、情報システム部門の拠点にふさわしいインテリジェント化を実現していた。

1998(平成10)年4月には、福井市花堂東1丁

目に南福井江守ビルが完成し、江守物流、江守エンジニアリング、江守リースキン(現江守企画リースキン事業)が入居した。現在、ビル周辺には江守塗料、北陸カラーの社屋、危険物倉庫、立体倉庫、電材倉庫が建ち並び、江守商事グループの重要な拠点となっている。

また、1999(平成11)年7月には本社隣接地に別館と社用駐車場が完成。エコインテリア事業部、染料本部海外営業部、監査室、日江興産、談話室、社員食堂などが入居し、本社の機能向上に活用されることになった。



江守情報システムビル



南福井江守ビル

社内体制の改革

1996(平成8)年、江守商事は新しい社是・社訓を制定するとともに、人事制度の見直しに着手した。そのきっかけは、1994(平成6)年に青年重役会が取締役に「創業100周年の江守商事像」をテーマにした答申を行ったことにあった。

答申では、創業100周年に向けて江守商事が変わらなくてはいけない点として、時代に合った企業理念、企業ビジョンの明示等が挙げられており、それを受けて新たな社是・社訓の制定と人事制度の検討を行ったのである。

新しい社是・社訓は、江守清喜が商道の基本とした「報恩感謝・信用誠実・和衷協力」の精神を柱に、社員が日常の仕事に取り組む心構えを具体化したものとなった。

社是・社訓

●企業理念

我々は、企業活動のすべてに、報恩感謝・信用誠実・和衷協力を創業以来の理念とし、国際社会に貢献する。

●目的

我々は、永遠の繁栄のため、お客様第一主義に徹し、情報と技術で未来を切り拓き、個人の能力を最大限に発揮できる企業を目指す。

●行動指針

1. ビジネスに国境はない。

「良い商品、深い技術力、広い情報は世界中どこでも通じる」

1. 新たな価値を創造する。

「専門知識を掘り下げ、広い視野で新しい事に目を向けよ」

1. 夢と理想(ロマン)を持つ。

「未来を信じ、無限の可能性に挑戦せよ」

1. 時間には限りがある。

「価値のある行動を身につけよ。時間の無駄は最大の損失だ」

1. 謙虚であれ。

「決してうぬ惚れず、たえず反省し自分を磨け」

1. 自由闊達に議論せよ。

「自分の意見を出せ、聴く心を持ちとことん話し合え、しかし結論は絶対だ」

1. 豊かな人生を実現する。

「良識を身に付けた社会人として、顧客に愛される企業人として、心暖かい家庭人として健康で明朗な人格の向上に努める」

1995(平成7)年2月には、社内人事制度検討委員会が設置された。当時常務取締役の豊田愷二(現監査役)を委員長とする同委員会は、社内活性化を目的に能力主義を採り入れたオープン人事システムの導入について検討を重ねた。10カ月に渡る検討の結果、従来の年功序列制を廃止



世界へ飛躍し、未来を創造する一。
江守商事は、常に明日へのチャレンジを続けます。



Creative Challenge

EMORI

Since 1906

創業90周年記念広告

し、社員の能力を重視した新人事制度の導入が決まったのである。

新人事制度は1996(平成8)年4月1日からスタートし、社員一人ひとりの能力向上、ひいては江守商事の総合力を高めることに貢献していった。

江守商事はその後も積極的に人事制度、社内組織の改革を実行に移していくが、この時の人事制度改革がその嚆矢と言え、21世紀の江守商事を生み出す出発点ともなったのである。

さらに、1999(平成11)年にはISO取得推進委員会が発足し、2001(平成13)年2月までにISO9001(品質マネジメント)、2002(平成14)年2月までにISO14001(環境マネジメント)の認定資格取得が目標に掲げられた。ISO認証取得を通じて、社内のルールや業務の流れを明確化することで、国際的にも通用する21世紀型企业への脱皮を目指したのである。

20世紀最後の年となった2000(平成12)年の年頭、社長の江守清隆は社員に次のように呼びかけた。

「江守商事は、ご存じの通り創業1906年、今年で94年目を迎え、正に20世紀を生きてきたと言えます。当初は薬商から始まり、戦後の北陸繊維産業の復興で、江守商事も、福井県も大きく発展してきました。しかし繊維の競争力が失われつつある中、今日では情報事業や海外事業の拡大というふうに、江守商事も時代とともに顔が変わって来ました。(中略)2000年「ミレニアム」は江守商事がもう一段変わって行ける切っ掛けにしたいと考えております。社内活性化委員会やISOを通じて江守商事も変わっていかねばならないという事を前面に出して行きます。その根本になるのが、「企業風土・企業文化」を20世紀型から21世紀型へ変えて行く事です」(社内報『きずな』第33号=2000(平成12)年発行よ

り)

そしてこの年、江守商事は新しい社章を制定した。同年の江守商事のスローガンは“ハードからソフトへ”であり、新たに付加価値を創造できる商社となることを目指していた。当時、インターネットに代表される情報通信技術の発展は、商社が担ってきた流通機能を代替する形となり、商社不要論が声高に論じられるようになっていた。そうした状況下であって、江守商事は付加価値の創造に生き残りの道を見出そうとしたのである。

こうした考えがイメージされた新社章は、江守商事グループ全体が“21世紀型”の企業に転換していくシンボルとなった。制定に際しては、グループ全社員を対象に社内公募の形がとられた。審査の結果、エフ・イーシステムのシステム部金融システム2課グループの案が採用されることになった。

新社章の下で江守商事はこの年、21世紀に向けて社内体制の大きな改革を行った。2月に電子商取引(eコマース)委員会を設置。同委員会は電子商取引が急速に普及している状況が、従来の商社機能の縮小につながることへの危機感から生まれた。メンバーは社内公募され、電子商取引の活用法を検討することはもちろん、社内ベンチャーのとりまとめ役としての機能を備えていた。いわゆるe-ビジネス、e-カンパニーへの取り組みを強化していく過程で、将来の江守商事グループの中核となり得るニュービジネスの芽を育てていくことを目指したのである。実際に同委員会の活動から、2001(平成13)年に各種コンテンツ事業を行う株式会社ヴィームが誕生した(2004(平成16)年に江守商事に吸収)。

さらに、6月には執行役員制度の導入と

Column

パッケージソフトの開発・提供 ～EMORIブランドの確立を目指して

江守商事の情報システム部門は、システムインテグレータとして顧客の業務に深く関わってきた経験とノウハウを活用し、特定業種・業界を支援するパッケージソフトの開発・提供にも取り組んでいる。

■アプリケーションパッケージ

「Epac」シリーズ

[2000(平成12)年6月発売]

販売管理システム「商人あきんど」、EIAJ(日本電子工業会)-EDI標準受注出荷システム「驛人えきんど」、水産仲卸システム「一新太助いっしんたすけ」、ゴルフ場システム「名打人ぶれーやー」の4種類を開発。使いやすさと高いコストパフォーマンスを共通の特長とし、対象業界のペーパーレス化促進につながるシステムを目指した。



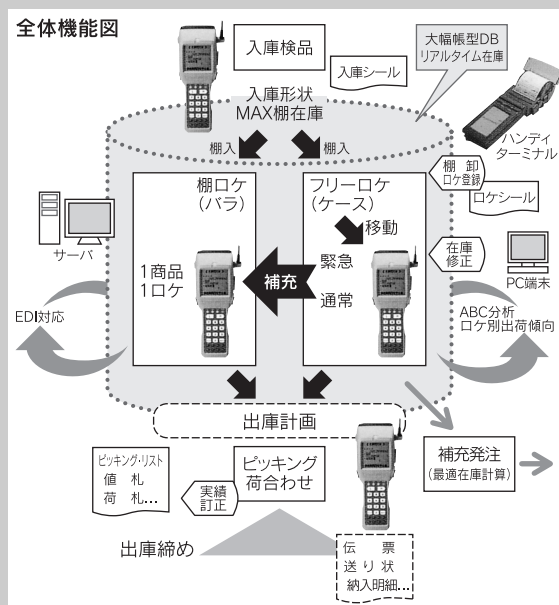
「Epac」シリーズ

■リアルタイムDCシステム

[1994(平成6)年4月運用開始]

入荷から保管、ピッキング、出荷まで、一連の物流業務のローコストかつスピーディな運用をサポートする物流管理システム。各種ハンディターミナルをフル活用して高精度な在庫管理を実現。作業進捗状況をリアルタイムでモニタリングすることで、適切な人員配置が容易に行える。さらに、ユーザーの業務内容や取扱商品、建屋等の条件に適したシステムの提案、稼働後のメンテナンスなど、充実したトータルサポート体制を確立している。

開発を担当した山本昇(現常務取締役情報システム第二事業部長)は「開発の基本はユーザーが困っていることをサポートすることにある。この分野はニッチ市場であり、競合品と呼べる他社製品も存在しない」と話し、リアルタイムDCシステムの好調な拡販が10年以上続いている。



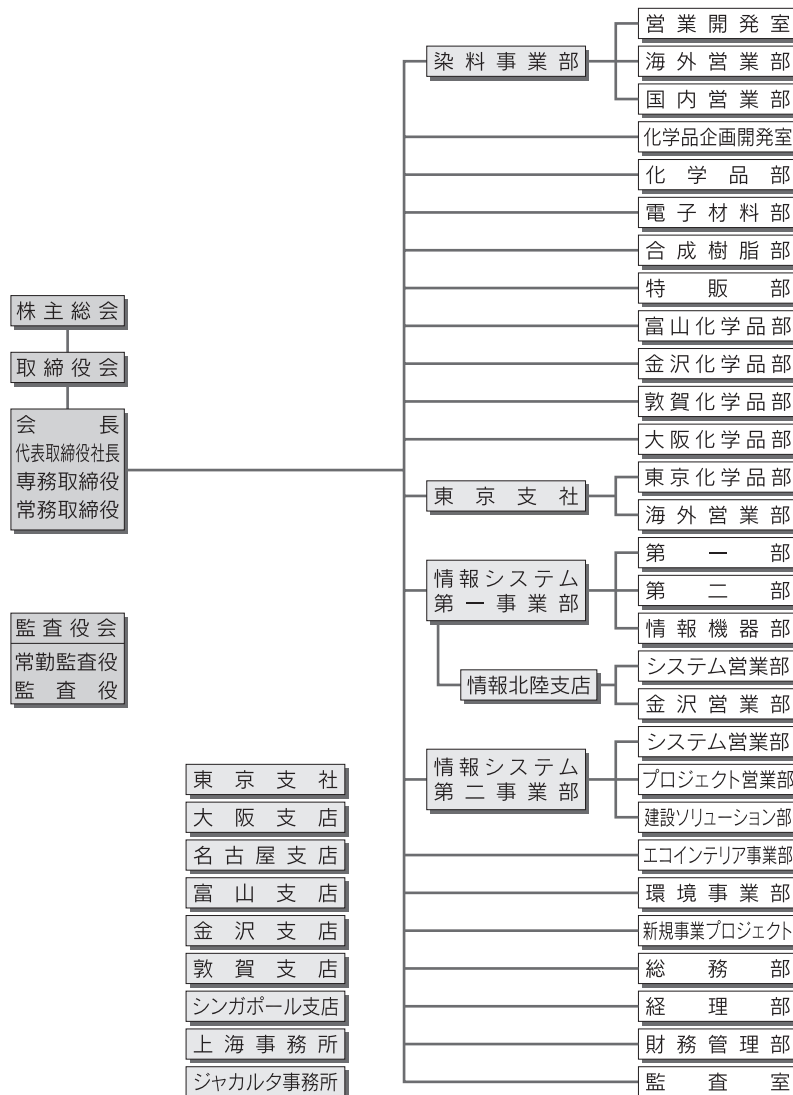
組織改革を行った。執行役員制度は経営と部門執行者を区別することで、経営のスピード化と効率化を図ることを目的としていた。そして、従来の6本部制と社長室を廃止し、新たに染料事業部、情報システム第一事業部、同第二事業部を設置。その他の事業部は社長直轄の体制とした。

また、7月には1、2等級の社員と関連会社役員を対象に年俸制を導入した。従来の

給与体系に役割・職務評価の要素を加味した制度で、その評価は社長が対象者全員と面談して決定される。年俸制の導入により、社員には主体性の発揮、自己責任と自助努力が一層求められることになったのである。

組織図

2001(平成13)年4月現在



21世紀への新たな一歩

平成不況下にあった1990年代は後に“失われた10年”と称され、経済のみならず日本の社会全体に不透明感が色濃く漂っていた。

そして、江守商事も一多数の企業が当時そうであったように一厳しい経営環境に直面することになったのである。

それは、この時期の経常利益の推移が如実に物語っている。

先に記した通り、江守商事の1991(平成3)年度の経常利益は過去最高(当時)となる5億5530万円に達していたが、翌年度から4期連続で減益が続き、1995(平成7)年度には2億517万円にまで落ち込んだ。

江守商事の経常利益が1991年度を上回るのは2002(平成14)年度(6億7400万円)まで待たなくてはならなかった。

社長の江守清隆は当時を次のように振り返っている。

「社長として業績を落とす辛さを知った。“失われた10年”の中でもがいても、もがいても業績は下がっていった。現状のままでは満足な利益が出ない会社になってしまうという危機感があった。そのためにも、新しい手を打ちながら、芽を育てていく必要があった」

その言葉通り、そして、これまで本章で述べてきたように、この時期の江守商事は新たな挑戦の連続であった。

従来の事業領域をベースに、情報、環境などの分野で新規事業を開始するとともに、海外における事業展開を積極的に推進し、「新しい手を打ちながら、芽を育てて」いったのである。

江守商事は1990年代から社内外で“Creative Challenge”というフレーズを用いてきた。その精神が具現化されていっ

たと言えるだろう。

そして、“Creative Challenge”は事業だけにとどまらず、体制面でも実践された。

組織、人事制度の変更や新しい社是・社訓、社章の制定などを通じて、業務の効率化はもちろん、企業風土、企業文化の改革にも果敢に挑んだのである。

改めて江守商事のこの時期を総括するならば、業績面ではまさに“失われた10年”であった。しかし、厳しい状況の中で試行錯誤を繰り返しながら育てた芽が、21世紀に花を開いていった。社長の江守清隆も「辛酸をなめたこの時期が、現在の江守商事のベースになっている」と言う。

江守商事は確かに、21世紀への新たな一歩を踏み出したのである。

2 Chapter2 章

進化

— Global Solution Partner として

21世紀。江守商事は「IT」「海外」「環境」をキーワードとした事業展開を推進し、“Global Solution Partner”としてのビジネスモデルを進化させていく。その一方で、組織改革やISO認証取得、新人事制度の導入など、社内体制の改革にも取り組んでいった。

北陸から世界へ。


 EMORI®
Global Solution Partner

 江守商事株式会社 本社 〒919-8510 福井市毛矢1-6-23 TEL 0776-36-1133 FAX 0776-36-4002
 金沢支店 〒920-0015 金沢市藤江町上丁318-1 TEL 076-233-1733 FAX 076-233-1735 www.emori.co.jp

2003(平成15)年に小松空港に設置された企業広告



(上) 創業95周年記念パーティーの鏡割り
(下) 創業95周年記念パーティーで行われたグループ全社員の記念撮影

創業95周年に誓う

～Global Solution Partner への挑戦

2001(平成13)年、すなわち21世紀最初の年は、江守商事創業95周年という節目の年となった。95周年は100周年へのステップであるとともに、21世紀において江守商事が勝ち残っていけるかを左右する重要な期間の出発点でもあった。

江守商事はこの年から新たなスローガン“**Global Solution Partner**”を掲げた。創業以来95年にわたって培ってきた技術・ノウハウを基礎に、創業100周年に向けて顧客満足度をさらに高め、国内外を問わず付加価値のある商品の提供・提案のできる企業となることを目指したのである。

21世紀に入って、江守商事は「IT」「海外」「環境」をキーワードに事業の展開を進めた。2002(平成14)年度の売上高は341億4600万円(前期比6.8%増)、経常利益は6億7400万円(同95.6%増)となり、連結でも売上高380億7100万円(前期比6.1%増)、経常利益7億2200万円(同66.1%増)。さらに2003(平成15)年度も売上高385億4700万円(前期比12.8%増)、経常利益9億4400万円(同40.1%増)、連結でも売上高431億3800万円(前期比13.3%増)、経常利益10億400万円(同39.1%増)となり、過去最高の業績を達成した。江守商事の21世紀は順調なスタートを切ったのである。こうした好業績に対して、社長の江守清隆は次のような認識を示した。

「…今こういった会社は、福井県内はおろか全国を探しても少ないと思います。小さい規模で急成長しているところは別ですが、我々ぐらいの規模があつて、5%以上の成長を2期続けている会社は少ないと思います。そういう意味で、江守商事は今まさに、時流に乗っていると思います」(社内報『きずな』

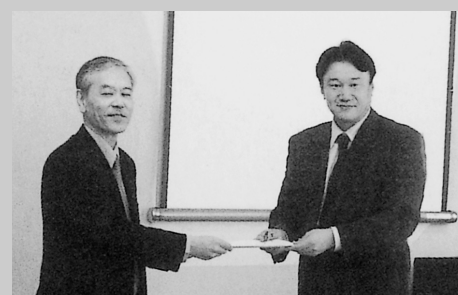
Column

ISO認証 取得

江守商事は2001(平成13)年3月に品質保証の国際規格であるISO9001、9002(94年版)の認証を国内全事業所で取得し、ISO9001は2003(平成15)年2月に2000年版に移行した。2000年版は品質マネジメントシステムであり、取得を機に顧客満足度の向上と継続的改善(PDCA)に取り組んでいった。

また、2002(平成14)年3月には、環境マネジメントの国際規格ISO14001の認証を国内全事業所で取得。全社で省エネルギー・省資源、廃棄物の減量化、リサイクルの推進を強化するとともに、グリーン調達の対象となる環境対応型商品の拡販を通じ、環境負荷の低減に取り組んでいった。

ISO9001、14001ともに運用の継続的改善が不可欠であり、江守商事では取得以降も監査室が運用監査を行っている。



ISO14001認証を取得

第37号=2004(平成16)年1月発行より)

そして、時流に乗ることができた2つの要因を挙げた。IT関連・海外関連事業の急成長と化学品・染料分野の堅調な推移であった。前者は江守商事の歴史の中では新規事業と言える分野であり、後者は創業以来の事業分野であるとともに、当時の売上の大きな部分を占めていた。つまり、規模の大きな事業分野が地盤沈下せず、新しい事業が伸びるといふ好循環が生まれていたのである。

もちろん、“時流に乗る”には、そのための自助努力が不可欠である。江守商事は前章で記したように、平成不況の逆風下にあっても、積極的に将来への布石を打ち続けてきた。その成果が、業績面ではっきりと表れてきたのである。

新しい組織、 新しいEMORI

江守商事は2002(平成14)年1月1日付で、ケミカル・環境事業及び管理部門にグループ制を導入した。さらに、同年4月1日付で情報事業部門にもグループ制を導入し、全社的な機構改革を実行した。その結果、江守商事の組織は従来のピラミッド型からフラット型に変わり、組織体系は次のようになった。(右記)

グループ制導入の目的は、組織の壁を取り除き、現場への権限委譲を強めることで独立採算を推進することであった。また、より小規模で目的を明確化した組織(グループ)に再編することで、新分野への進出や独立の促進を通じて、社内の活性化を図ることを目指したのである。

江守商事は1996(平成8)年から組織、人事制度の改革に着手しており、グループ制の導入はその総仕上げとも言えた。人事制

度検討委員会の委員長として、一連の組織改革に先鞭をつけた豊田愷二(現監査役)は次のように振り返っている。

「社員数の増加とともに役職も多くなり、いわゆる大企業病の症状が現れていた。一連の組織改革を通じてそうした弊害を取り除くことができたのではないかと。特にグループ制の導入を実行できたことが大きく、会社が変わったという実感が持てた。こうした組織改革は、清隆社長の強いリーダーシップがなければ実現しなかった。その意味でも、この時期で最も重要な動きに位置づけられると思う」

また、社長の江守清隆はグループ制の導入に関して、次のように語っている。

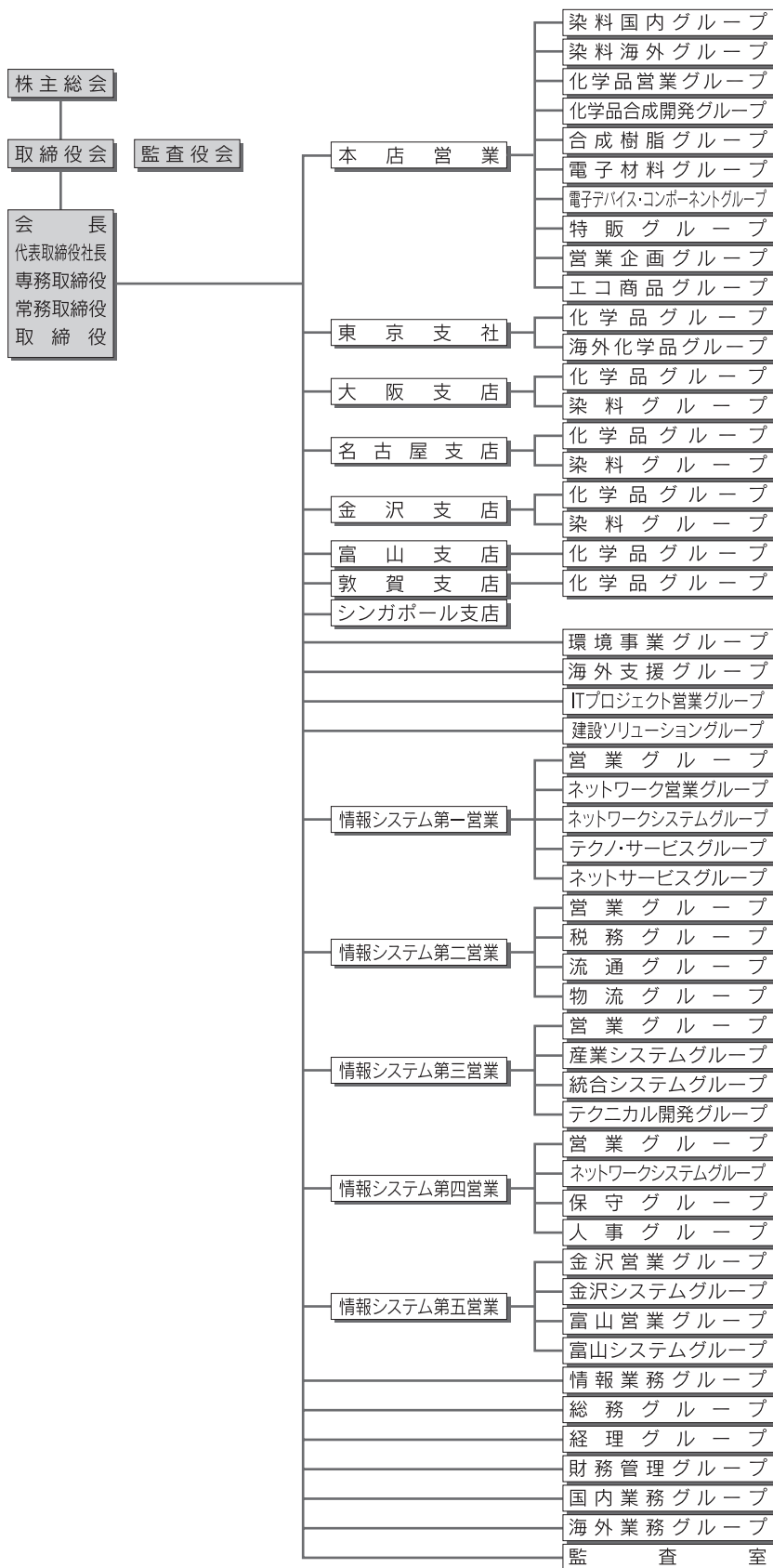
「…個々人の提案や試みによって新たなグループや事業を新設し、独立して頂くたいと思っていますし、こういったチャレンジが出来るのがグループ制だと考えています」(社内報『きずな』第35号=2002(平成14)年1月発行より)

実際、全グループ、拠点、統括の上に社長が位置するという組織のフラット化により、社内の意思決定、問題解決のスピードアップが加速した。また、社内に新たな縦・横・斜めのつながりが生まれ、従来には見られなかった事業のコラボレーションが実現することになった。さらに、若い社員をリーダーにしたプロジェクトも増えるなど、グループ制の導入は新たなビジネスモデルの構築につながっただけでなく、社内の機動力と活力の向上に大きく貢献していったのである。

また、江守商事は2002(平成14)年から営業マン全員がノートパソコンを持ち、社内の電話も携帯化した。それによって、各自が自分の机を持たないフリーアドレスのフロアとなり、業務の効率化につながった。江守商事はいち早く社内のIT化をスター

組織図

2002(平成14)年4月現在



Column

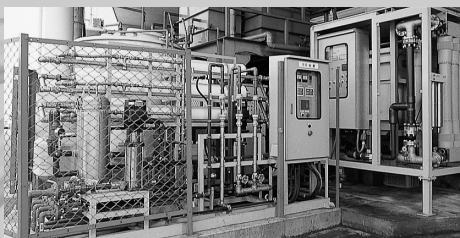
環境事業への 取り組み

江守商事は「環境」を21世紀の事業展開の重要なキーワードに位置づけている。

木粉とABS樹脂から成型された「エコデッキ」は、間伐材、製材端材などの廃木粉、非塩ビ系の廃プラスチックを有効活用し、複合化した商品。簡単な施工で居室とバルコニーを一体化させ、開放的なスペースを生み出すことができる。

また、飲料水用浄化処理から工場排水再利用まで、優れた浄化効果を発揮する高分子膜ろ過システムの開発・提供にも注力している。

さらに、生分解プラスチックなど、環境対応型商品の販売も行っており、繊維・化学産業との関わりから得た専門知識やノウハウを、エコビジネス分野に投入している。



膜分野でのパイオニア、日東電工との長年の協力関係をベースに企画開発した、高分子膜ろ過システム

トさせることで、仕事環境の改革にも積極的に取り組んでいった。

さらに、2004(平成16)年度から、社内のさらなる活性化を目指し、新しい人事制度を導入した。新人事制度は成果(業績・プロセス)を重視して等級や評価基準を変更し、キャリアや年齢に関わらず成果を上げた社員が報いられるものになった。また、職務内容の違いを考慮して、社内を商社部門と情報部門に分離して評価を行う1社2制度となった。

人事制度改革の背景を、社長の江守清隆は次のように説明している。

「…皆さんには一人一人が情報を発信し、受信して頂きたいと思います。情報のやり取りに今の江守商事には、もはや組織の垣根は全く存在しません。自分がレベルアップしていくために、自分が考えて行動して欲しいと思います。自分の能力をどれだけ会社で出せるかが重要で、そういった向上心のみが会社のポテンシャルを上げることが出来るからです。一人一人のレベルが上がり、それを評価されることによってみんながハッピーになるし、会社も儲かる、ということを実現していきたいと思います。最終的には江守商事の仕事にやりがいを感じながら頑張って、その中で成果を出してもらいたいと思っています」(社内報『きずな』第38号=2005(平成17)年発行より)

さらに、2003(平成15)年3月には日本界面活性剤工業厚生年金基金から脱退。加えて、適格退職年金も廃止し、10月に確定拠出年金日本版401Kに全面移行した。その結果、江守商事の退職金は自己責任により運用されることになった。

この処置に伴い、江守商事は2002(平成14)年度の当期純利益で創業以来初の赤字を計上することになったが、目先の利益よりも将来的なリスクを回避することを優先

したのである。まさに“痛みを伴う改革”であった。

こうした改革を通じて、江守商事に年功序列や縦割りの組織は存在しなくなった。社員にとっては、自己責任・自己改革が求められる一方で、自己実現の可能性が広がる組織になったと言えるだろう。

「改革を通じて、わかりやすい体制、新たな可能性を生み出せる組織の確立を目指した。もちろん、組織だけを変えても意味がなく、それに伴って社員の気持ちや行動が変わることが必要になる。江守商事の個々の営業力は大手商社に比べても決して劣っていない。社員一人ひとりが改革意欲を持つことで、会社全体が変わっていくはずだ」(江守清隆)

それぞれの社員が新制度に立ち向かっていくことが、新しい江守商事を創造し、未来を拓く原動力になるのである。

世界への挑戦

1990年代以降の江守商事の国際戦略は、それまでに築いた海外での基盤をより広く、深く耕していったと言える。

1990(平成2)年8月、碓井製作所、タイの実業家との合弁で「THAI USUI CO., LTD.」が設立され、アセアン諸国に進出している日本の電子機器メーカー向けにプラスチック部品の製造・販売がスタートした。同社は江守商事にとって、合成樹脂分野における初めての海外合弁企業であった。1993(平成5)年8月にはインドネシアにジャカルタ事務所を開設。従来は現地商社を通じてインドネシアにおける販売ルートを確認してきたが、インドネシア経済の一層の発展が予測されていることから、首都ジャカルタ市内に事務所を開設したのである。繊維加工材や機械設備、化学品等の市場

Column

江守幹男、 福井商工会議所 会頭に就任

2001(平成13)年11月1日付で、江守商事会長の江守幹男は福井商工会議所の会頭に就任した(2004年に再選)。江守幹男は1985(昭和60)年から5期16年に渡って副会頭を務めており、その経験と人格、識見の高さは衆目の一致するところであった。就任披露の席では「厳しい経済状況の中で、まなじりを決して課題に向かう。きらりと輝く会議所に全力を挙げていく」と決意を述べた。また、福井経済団体連合会、福井県商工会議所連合会の会長も兼務し、名実ともに地域経済界のリーダーとなっている。なお、江守幹男は、福井青年会議所理事長、福井経済同友会代表幹事、福井県教育長など数多くの公職歴を持ち、日蓮宗門徒総代なども務めている。

調査に当たり、海外事業の重要拠点として成長していった。

さらに、1994(平成6)年11月には、中国・上海に事務所を開設した。この時期、中国は目覚ましい経済発展を続けており、江守商事の顧客である福井の繊維・染色関係企業



合弁企業『THAI USUI CO.,LTD.』の設立調印式。左端は江守清隆(当時常務取締役)＝1990(平成2)年8月



シンガポール支店が入居するパークモール



バンコクに設立された『EMORI(THAILAND)CO.,LTD.』の物流拠点・AMATA WAREHOUSE

が相次いで中国に進出し、現地生産を開始しようとしていた。そうした状況を受け、中国経済の中心地・上海に拠点設置を決めたのである。上海事務所は現地進出企業に繊維加工材、化学品、機械設備等の情報提供を行い、江守商事の海外ネットワークの強化を目指すことになった。

1996(平成8)年4月には、中国上海の外高橋保税区内に子会社・上海江守貿易有限公司を設立した。同社を通じて、保税区的の特典を活かした輸出入業務に加え、中国国内での販売事業も行えるようになった。中国における江守商事の窓口を確立したのである。

同年の1月には、シンガポールに支店を開設。従来の海外拠点は染料事業が中心になっていたが、シンガポール支店は全本部が相乗りする形で化学品、産業プラントを含めたアジアビジネスの拠点と位置づけられた。三国間貿易やインド、パキスタン、ベトナム、ミャンマーなど成長が見込まれる国々の情報収集に加え、現地の電子部品関係を中心とした日系企業への営業活動にも取り組んでいった。

1997(平成9)年6月には、タイの首都バンコクに『EMORI(THAILAND)CO.,LTD.』を設立。同社は江守商事が資本参加しているプレジデント・ケミカル社のスワンパトラ会長との合弁企業であるが、実質的には江守商事の現地法人としての機能を有し、タイにおける合成樹脂や化学品、電子部品等の販売と輸出入を行うことになった。さらに、この年に発生したアジアの通貨危機を教訓に、アメリカやヨーロッパ市場へのアプローチも進展させていった。

ますますボーダレス化する ビジネスフィールド

こうした国際戦略は、21世紀に入って実を結んでいく。2004(平成16)年度の江守商事の売上高は437億4500万円(連結496億1000万円)、経常利益も12億2900万円(同13億5900万円)で、売上高は前期比13.5%(同15%)増、経常利益は30.2%(同35.4%)増の高い伸びとなり、過去最高の業績となった。この好業績を支えたのは、中国やタイを始めとするアジアを中心とした海外事業の伸長であり、海外事業の連結売上高は104億800万円に達し、前期を34.7%上回った。

江守商事の海外事業が大きく成長したのは、IT関連を軸としたアジア経済の活況という外的要因はもちろん、“**Global Solution Partner**”のスローガンの下で、社内の全ての事業部門が海外に目を向け、グローバルな視点でビジネスを進めるようになったからである。

従来、江守商事の海外事業は貿易部の流れを汲む海外事業部が窓口となっていた。しかし、海外事業が成長するにつれて海外事業部が“聖域化”してしまったのである。そこで江守清隆は顧客のグローバル展開(海外進出、海外調達)が進む状況を鑑み、2000(平成12)年に海外事業部を解散。「社内の各ライン、各拠点で海外事業を行う、全社員が海外営業を担当する」(江守清隆)という方針を打ち出した。さらに、グループ制の導入によって権限委譲とコラボレーション化が進展。社内の各グループは海外拠点との連携を強め、従来の海外事業の中心だった繊維関係に加えて、電子部品や合成樹脂、化学品等のビジネス案件が増加し、業績の向上につながっていった。

北陸に軸足を置きながら、世界とダイレクトに向き合う——。現在の江守商事のビジネスモデルが構築され、発展していったのである。

その一方で、海外拠点の充実にも努めた。2001(平成13)年7月にインドネシア・ジャカルタに現地法人「PT.EMORI INDONESIA」を設立。インドネシアの規制緩和と現地市場の豊かな将来性を考慮し、商社機能の充実を図った。同社は一般化学品や繊維向け染料、電子部品等の輸出入に加え、同国内での仕入れ、販売を手がけることになった。

中国関係では、2002(平成14)年10月に



上海江守染色技術有限公司は江守商事が30%、上海江守貿易有限公司が70%を出資して設立された。江守商事の孫会社に当たる



インドネシア現地法人PT.EMORI INDONESIAが入居するPERMATA PLAZA

中国山東省青島に上海江守貿易有限公司の青島事務所を開設し、華北地区の販売・物流拠点とした。2004(平成16)年5月には、上海江守貿易有限公司の子会社として上海江守染色技術有限公司を設立。中国国内における染色技術センター及び反応染料・分散染料の製造を事業内容とし、染色試験業務・染色技術開発・染料製造等を行う。原材料調達の多様化に伴い、品質向上に対するニーズが急速に高まっている中国の染色加工業界の現状を踏まえ、江守商事グループが持つ染色試験ノウハウや染色技術開発、染料製造・配合技術を提供することで、中国の染色加工業界の発展に寄与することを目指したのである。同年12月には上海江守貿易有限公司の北京事務所、2005(平成17)年7月には、広州に上海江守貿易有限公司の現地事務所を開設するなど、中国国内のネットワーク強化に取り組んだ。

上海江守貿易有限公司は、商習慣の違いやカントリーリスクもあって、設立から数年間は厳しい状況が続いた。江守商事本体もバブル崩壊の影響で減収減益が続いていた時期であったが、それでも海外展開の方針は揺るがなかった。その間も地道な活動を続け、中国国内の地盤を固めていった。その結果、21世紀に入って日本企業が相次いで中国に進出した際、現地における受け皿として先行者利益を得ることができたのである。

タイでは、2003(平成15)年11月に江守商事の子会社EMORI (THAILAND) CO., LTD.がBOI(タイ王国投資委員会)から国際購買センター事業に関する投資促進権の付与を受けた。これによって、BOIの承認を受けた原材料を輸入する場合、輸入原材料、部品に対する輸入税の免除などの税制上の特典や数々の恩恵が得られる。BOI

の認可を受けたタイの日系商社は数社しかなく、EMORI (THAILAND) CO.,LTD.、ひいては江守商事にとっての大きなアドバンテージとなった。

さらに、2004(平成16)年7月には、アメリカの現地法人「EMORI USA CORPORATION」をカリフォルニア州に設立。江守商事のアメリカにおける初の営業拠点であり、現地の日系電子部品製造メーカーや化学品製造メーカー等に電子部品や原材料の供給を行う。これまで、江守商事のアメリカ国内販売は現地企業に委嘱していたが、現地法人設立により、ユーザーへのビジネスサービスを強化し、一層の業容拡大を目指すことになった。

2004(平成16)年度からは上海への出張が国内出張扱いになり、江守商事のビジネスフィールドはさらにボーダレス化している。

「海外事業は利益が出ない時期もあったが、その時期に足場を固めたことで経験やノウハウを培うことができた。現在は社員が常に国内、海外両方に目を向けながら仕事をしており、海外から商材を輸入するビジネスも伸びている。今後の海外展開には、より高度な技術、高度な営業力が求められるだろう」(現常務取締役化学品事業部長 稲井田重則)

江守商事が掲げる“**Global Solution Partner**”とは「出入り業者ではなく、お客様にとって問題解決型の無くてはならない存在」(江守清隆)となることを意味する。ユーザーニーズに応じた商品の提案から調達、管理、配送までをトータルに受け持ち、ユーザーの海外展開を強力にサポートすることを目指しているのである。

“**Global Solution Partner**”としてのさらなる進化を目指し、江守商事の世界への挑戦が続いている。

Column

**揚原安麿取締役、
(社)日本青年会議所会頭に就任**

江守商事の取締役揚原安麿（現常務取締役管理・新規市場開拓担当）は、2003（平成15）年度に（社）日本青年会議所（日本JC）の第52代会頭を務めた。日本JC会頭は全国の774JC、会員約5万人のトップであり、福井県からは初めての選出となった。2003（平成15）年10月には福井県内で約1万4000人が参加して日本JC全国会員大会が開催され、揚原はその責任者も務めた。大会開催地と会頭の地元が重なったのは過去に例がなく、全国に福井を発信する格好の機会となった。揚原はJC活動の支援を続けてくれた江守商事への感謝を述べた上で、次のように述べている。

「…会頭が内定した一昨年7月からの一年半に、

これまでにないいろいろな経験をさせていただきました。内外の要職にある方々や各界の超トップの方々と一緒にすることも数多くあり、ここでいただいたネットワークをこれからの社業にしっかりと活かしていかなければと考えております。（中略）ようやく任期も終わり、2004年度は直前会頭としての役割の中で、これからは江守商事の揚原としての報恩感謝、社業への還元スタートとなります。近く迎える創業100年を前に、この10年間に学ばせていただいたことを糧に、より幅広いより大きな貢献ができるように頑張っている決意です」（社内報『きずな』第37号＝2004（平成16）年発行より）



（社）日本青年会議所の第52代会頭として、全国会員大会福井大会で挨拶する揚原

21世紀のIT戦略

～顧客から選ばれる

ビジネスパートナーを目指して

江守商事は21世紀に入って情報システム部門を最重点投資分野と位置づけ、部門の総合力強化に力を注いだ。企業の情報化投資が伸び悩む経済情勢下にあつて、情報システム部門は顧客満足度と品質の向上を通じて、顧客から選ばれるビジネスパートナーを目指していった。

そうした状況の中、情報システム部門を牽引したのは、江守商事が物流業界向けに自社開発した物流管理ソフト「リアルタイムDCシステム」であった。1994(平成6)年に運用を開始以来、バージョンアップを重ねながら、日用雑貨・ドラッグ系の卸売業者、小売業者の物流センターを中心に、全国規模で販売実績を伸ばし続けている。「リアルタイムDCシステム」は自社開発製品だけに利益も大きく、江守商事全体の業績向上にも大きく貢献しているのである。

「リアルタイムDCシステム」は、顧客のニーズに応える形で開発され、ユーザーの口コミや紹介によって売上が伸びていった。まさに「顧客満足度と品質の向上を通じて、顧客から選ばれた」のであり、情報システム部門の方向性を具現化した商品なのである。

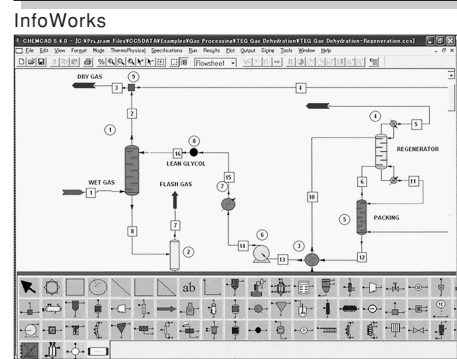
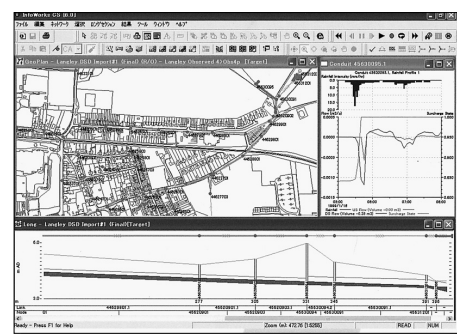
この他、ソフトウェアの分野では、上下水道/河川用シミュレーションソフト「InfoWorks」(英ウォリングフォード社開発)は、すでに業界の標準ソフトとして広く認知されている。2004(平成16)年9月には、化学プロセスシミュレーションソフト「CHEMCAD」(米ケムステイションズ社開発)の日本独占販売を開始するなど、特定業種・業務を支援するパッケージソフトの提供を続けている。

システム開発面では、金融機関の勘定系、

情報系を中心に幅広い業界の顧客にシステムを提供する一方、自治体や教育機関のIT化に対応したシステムの構築などで実績を重ねた。また、物流業界で培ったノウハウを流通業界に広げたシステム開発への取り組みも本格化していった。

2003(平成15)年8月には大阪市の株式会社トーア情報システム(現・株式会社ブレイン)を子会社化。富士通関連のシステム開発を主業務とする同社を江守商事グループに加えたことにより、情報システム部門の強化を図ったのである。

さらに、CMMI(アメリカを中心としたソフトウェアプロセスの熟成度向上手法)の活動を通じた品質向上、納期短縮、工数削減に取り組み、部門全体での顧客満足度の向上に努めている。2005(平成17)年4月には、官公庁、金融機関向けの情報システム部門でISMS(情報セキュリティマネジメントシステム適合性評価制度)の認証を取得。「顧客から信頼を一層高め、情報分野における“EMORIブランド”の確立」(現常勤監査役 宇野勝治)を目指している。



CHEMCAD

東証二部上場 ～公開企業から上場企業へ

2005(平成17)年4月11日、江守商事は同日付で東証(東京証券取引所)二部への上場を果たした。江守商事は2003(平成15)年秋から東証二部上場の準備を開始し、単元株数の引き下げや株主優待制度の導入などを通じて、個人株主の拡大を進めてきた。その結果、株主数も増加し、東証の上場基準を満たすことになったのである。

4月4日に行われた上場発表会見で江守清隆は、東証二部上場の理由として、信用力の向上と資金調達の円滑化を挙げた。その上で、M&A(企業の合併・買収)によるソフトウェア開発の充実、海外での新会社設立など、事業展開を加速化させる方針を

明らかにした。さらに、「数年内に、もう一段上のステージを目指したい」と語り、東証一部上場への意欲を示したのである。

つまり、東証二部は江守商事にとってあくまで通過点であり、将来に向けた布石が次々と、そして着々と打たれていった。東証二部上場に伴い、ジャスダック証券取引所への上場を廃止し、株主数の増加を目指して普通株式の分割(1株を2株)を実施した。2005(平成17)年9月には、株式の流動性向上と株主数増加を目的とした立会外分売(46万株)を行った。

1994(平成6)年の株式公開に続き、上場業務を担当した黒瀬則雄(現取締役総務・業務・IR担当)は次のように振り返っている。

「公開時の経験があったため、東証二部上場に向けた作業は比較的スムーズに進ん



東京証券取引所で上場通知書を受け取る江守清隆＝2005(平成17)年4月11日

だ。上場企業となったことで、社会的な責任はさらに大きくなった。今後は株主利益、企業価値の向上を一層重視していかなくてはならないし、経営にも中長期的な視点が必要になる」

その言葉通り、江守商事は東証二部上場を機に、コーポレートガバナンスのさらなる強化に努め、株主・投資家に対して一層の経営の透明性及び信頼性を高める経営を実現することを最重要事項としている。

社外取締役、社外監査役を選任し、客観的な視点による経営の監視を強化した。

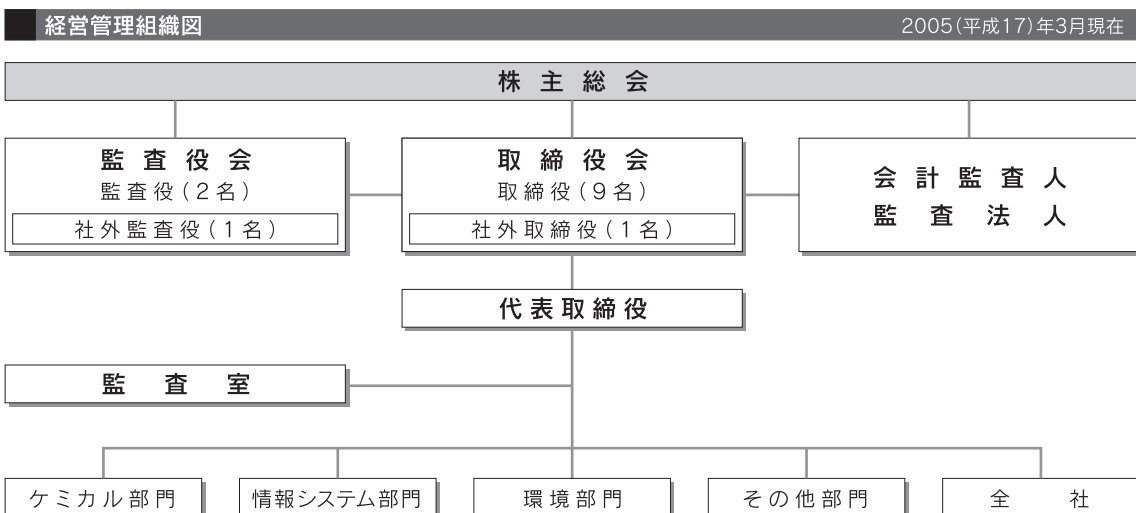
また、コンプライアンス委員会を設置し、法令遵守の徹底を図り、株主及び地域社会に対する責任を果たしていくことを経営の最優先課題とした。

上場当日、江守商事が新聞各紙に出稿した告知広告の中には、次のような一節が綴られている。

「…今回の東証上場を機に、更に皆様のご

期待にお応えすべく、役員並びに社員一同が一丸となつて努めてまいります。これまで以上に、信頼・信用を第一とすることはもとより、企業の社会的責任を自覚し、多くのステークホルダーの皆様へ愛される『二十一世紀のベストパートナー』に向けて邁進する所存でございます」

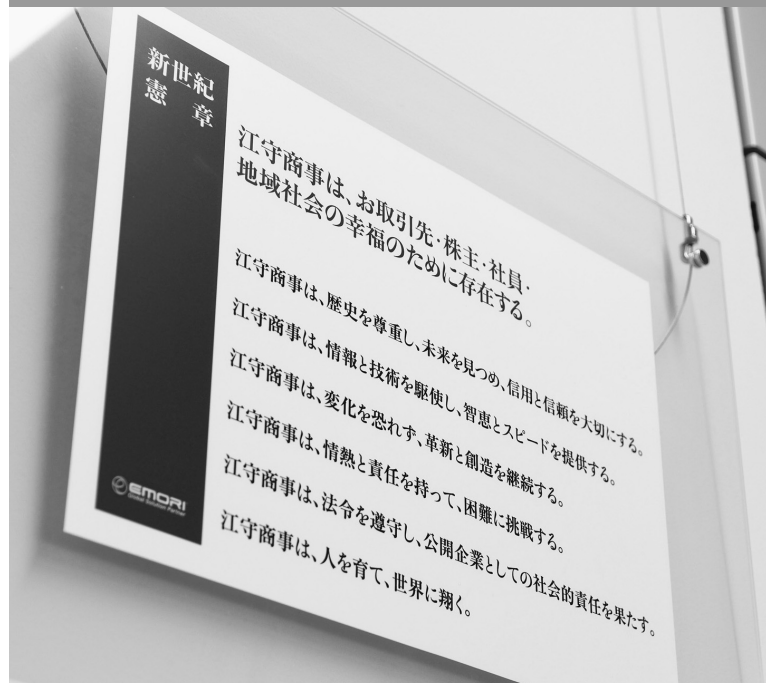
それはまさに、新たな目標に向けた江守商事の決意表明であった。



3 Chapter3 章

新しい歴史
の始まり

東証一部上場、新社屋の建設を実現して迎えた創業100周年。江守商事は『新世紀憲章』を制定するとともに『Mission with Passion (責任ある仕事を、情熱を持ってやり抜く。)] ~を新たなスローガンに掲げ、ゼロからのスタートを切った。創業100周年は創業元年。江守商事の新しい歴史が今、始まろうとしている——。



社内の各部署に掲げられた『新世紀憲章』のプレート

東証一部上場を果たす

江守商事が創業100周年を迎えた2006(平成18)年3月1日、江守商事は東証一部上場(指定替え)を果たした。福井県内の企業では4社目、33年ぶりの東証一部上場企業の誕生であり、江守商事にとっても、大きな節目の年に企業としての大きな勳章を手にしたのである。

2005(平成17)年4月の東証二部上場から1年足らずで一部への上場実現は、東証の現行規定では最短期間となる。その背景には業績の向上があった。2005(平成17)年度の連結売上高は547億2900万円と、初

めて500億円を超えた。経常利益は13億6000万円となり、4期連続で増収増益を達成した。2005(平成17)年中間期決算における上場株式数(10,500,000株)、時価総額(102億円)、株主数(7,126人)も東証一部上場の基準を大きくクリアした。また、1994(平成6)年の株式公開を機に、公開企業にふさわしい管理体制の確立を目指してきたことを見逃すことはできない。

「事実が正確に見える企業への変革を目指した。社内に聖域を設けず、悪い点は悪いと認め、改善していった。江守商事が二部から最短期間で一部に上場することができたのも、経営の透明性、健全性の高さ



東証一部上場の会見に臨む社長の江守清隆(中央)。右は揚原安磨(常務取締役管理・新規市場開発担当)、左は黒瀬則雄(取締役総務・業務・IR担当)＝2006(平成18)年2月20日



- 2006年3月 東京証券取引所市場第一部に株式を上場
- 2005年7月 中華人民共和国に上海江守貿易有限公司の廣州事務所を開設
- 2005年4月 東京証券取引所市場第二部に株式を上場
- 2005年4月 情報セキュリティマネジメントシステム適合性評価制度(ISMS)を情報システム第一善業で認証取得
- 2004年11月 福井市の日正興産株式会社(1985年11月21日設立)の全株式を取得し、子会社化
- 2004年12月 中華人民共和国に上海江守貿易有限公司の北京事務所を開設
- 2004年4月 中華人民共和国に上海江守染色技術有限公司を設立
- 2004年7月 アメリカにEMORI USA CORPORATIONを設立
- 2003年11月 タイにEMORI HOLDINGS (THAILAND) CO.,LTD.を設立
- 2002年10月 中華人民共和国に上海江守貿易有限公司の青島事務所を開設
- 2001年11月 東京都に株式会社ヴィームを設立(2004年11月26日解散)
- 2001年3月 品質マネジメントシステムISO9001、ISO9002を国内全事業所にて認証取得
(2003年2月/2000年版に更新)
- 1997年6月 タイにEMORI (THAILAND) CO.,LTD.を設立
- 1986年4月 福井市に江守物産株式会社を設立
- 1995年10月 福井市に江守エンジニアリング株式会社を設立
- 1995年1月 福井県坂井郡丸岡町(ソフトパークみくい)に情報システム本部を移転
- 1994年2月 福井市に江守マエダコンピュータサービス株式会社を設立
(1985年4月1日:江守システム開発株式会社に名称変更)を設立
- 1993年11月 福井市に江守リース株式会社を設立
(2000年1月20日:江守全額株式会社に名称変更)を設立
- 1993年7月 日本アイ・ビー・エムの特約店となる
- 1990年3月 資本金を5億7,400万円に増資
- 1989年8月 資本金を2億6,200万円に増資
- 1988年2月 福井市に株式会社エフ・アイシステムを設立
- 1979年12月 福井市に江守塗料株式会社を設立
- 1977年5月 資本金を8,200万円に増資
- 1971年2月 資本金を4,500万円に増資
- 1970年4月 金沢市に全沢出張所(現 全沢支店)を開設
- 1968年4月 東京都に東京出張所(現 東京支店)を開設
- 1965年3月 資本金を2,250万円に増資
- 1962年8月 名古屋市に名古屋出張所(現 名古屋支店)を開設
- 1968年5月 法人化し、株式会社江守商店となる(資本金750万円)
- 1968年3月 福井市にて薬種商を創業。名称を江守薬店とする
- 1966年3月 資本金を3,000万円に増資
- 1964年4月 資本金を1,500万円に増資、福井県敦賀市に敦賀出張所(現 敦賀市店)を開設
- 1961年9月 大阪市に大阪出張所(現 大阪支店)を開設
- 1970年11月 江守商事株式会社に名称変更
- 1973年3月 福井市に北陸化成工業株式会社を設立
- 1979年6月 日立オフィスコンピュータ北陸地区特約店となる
- 1983年4月 香港にEMORI&CO.,(H.K.)LTD.を設立
- 1988年9月 福井市に北陸カラー株式会社を設立
- 1989年10月 資本金を2億6,400万円に増資
- (2003年3月14日:当社に吸収合併)
- 1990年5月 金沢市に北陸江守コンピュータ株式会社を設立
- 1993年8月 インドネシアにジャカルタ事務所を開設(2001年9月:閉鎖)
- (資本金を7億9,800万円に増資)
- 1994年2月 日本証券業協会(現 ジャスダック証券取引所)に株式を店頭登録
- 1994年1月 シンガポールにシンガポール支店を開設
- 1998年4月 中華人民共和国に上海江守貿易有限公司を設立
- 1998年4月 福井市に南福井江守ビル竣工
- 2001年7月 インドネシアにPT.EMORI INDONESIAを設立
- 2002年9月 環境マネジメントシステムISO14001を国内全事業所にて
認証取得(2006年2月/2004年版に更新)
- 2002年9月 環境マネジメントシステムISO14001を国内全事業所にて
- 2003年8月 大阪市の株式会社トーア情報システム(1988年8月28日設立)の
全株式を取得し、子会社化(2004年4月1日:株式会社ブレインに名称変更)

ゼロから始める、創業元年。
積み重ねてきたのは、100年の信頼です。

おかげさまで、江守商事株式会社は
本日、東証一部に上場いたしました。

東京証券取引所市場第一部銘柄の指定を
機により一層皆様のご期待に応えたく、
役員ならびに社員一同が元となって努めて
参ります。100年の間にいただいた信頼・
信用を第一とすることはもとより、「ミッシ
ョン・クワイーズ・パッション」すなわち「責任あ
る仕事を情熱を持ってやり抜く」を胸に、
多くの皆様にご愛される「二十一世紀のベスト
パートナー」に向けて邁進する所存でござ
います。ゼロから始める、創業元年。100
年目からの江守商事に引き続きご指導と
ご支援を賜りますようお願い申し上げます。

二〇〇六年三月三日

代表取締役社長 江守 清隆

Mission
with
Passion

江守商事株式会社 本社:福井市毛吹1-8-23 TEL:0776-36-1131(内) www.emori.co.jp
拠点:東京・大阪・名古屋・岡山・金沢・東京・東京・東京・東京・東京・東京・東京・東京・東京・東京

が東証から高く評価されたことが大きいと思う」(現常務取締役管理・新規市場開発担当 揚原安麿)

2月20日に福井市内で行われた記者会見で、社長の江守清隆は東証一部上場の最大のメリットを「信用力」と位置づけるとともに、顧客や株主に対する責任の重さを改めて口にした。さらに、「海外」と「IT」を柱としたアジアの拠点整備やM&A(企業の合併・買収)等を積極的に進める意向を示した。

M&Aに関して、江守清隆は次のように説明している。

「例えば、『リアルタイムDCシステム』が大変売れています。これは弊社の技術とノウハウが、日本中で評価されているということですが、全てが福井からの営業、開発、サポートです。もちろん今のままでも、毎年1割ずつ伸びていくことは可能かも知れないし、今の状況でも素晴らしいのですが、もっと多くの人に知ってもらおう、もっとサポート体制を強化しようと思った時に、福井からだけではお客様の期待にお応えできないでしょう。だから、お客様の多い東京に、サポートできる会社をM&Aできればすぐネットワークが良くなり、お客様に接する機会も増えます。今から当社で新しい拠点を作ろうとしたら、体制ができるまで5年以

上かかってしまいます。それでは、ビジネスのチャンスを逃してしまふ。だからM&Aをして時間を買うのです。あと、もう一つが人材です。人材をコツコツ育てるというのも、非常に大切ですが、それだけでは時代の流れに間に合いません。M&Aだと人材を一瞬にして得ることができます。だから、M&Aに関しては最優先課題だと考えています」(社内報『きずな』第39号=2006(平成18)年発行より)

そして「10年後、早ければ7、8年後には売上高1000億円企業を目指す。その通過点として、中・長期計画の最終年度となる2009(平成21)年3月期に、売上高600億円、経常利益21億円を達成したい」と新たな目標を掲げたのである。

新世紀憲章を制定

～新たなスローガンの下に

江守商事は創業100周年を機に、新たな企業スローガン『Mission with Passion』を掲げた。このスローガンには「責任ある仕事を、情熱を持ってやり抜く。」という意味が込められており、社員一人ひとりの行動の原点となるものである。

さらに、江守商事は創業100周年を「ゼロから始める、創業元年。」と位置づけ、新たな改革への取り組みを開始した。「生まれ変わったつもりで、ゼロからスタートする」(江守清隆)ことで、現状を維持するのではなく、打破していくためであった。

2006(平成18)年3月には、社は社訓を一新し、『新世紀憲章』を制定。『Mission with Passion』の理念と、「それまでの社は社訓は素晴らしい内容だが、情熱のほとばしることは書かれていなかった。規格を飛び出す、現状打破になるようなものを」(江守清隆)という考えに基づいている。

その中で、江守商事の存在理由を「江守



江守商事は株主優待制度の一環として、福井の特産品などを1単元(100株)以上保有する株主に送り、好評を博している。(左:福井の銘酒「黒龍」、右:越前和紙の便箋セット)

商事は、お取引先・株主・社員・地域社会の幸福のために存在する」と明記。“満足”ではなく“幸福”という言葉を用いて、江守商事が「ゼロから始める、創業元年。」に挑む決意を表現している。

新世紀憲章に関して、社長の江守清隆は次のように述べている。

「百年という節目で、社是社訓の刷新、本社の新築、東証一部銘柄指定など様々なことがスタートしました。その中で、更に精神的に充実した会社としての歴史を刻んで行きたいと思っています。精神的に充実した会社とは、株主、取引先、地域社会、そして社員の皆さん、この全てに満足していただくということです。売上げや利益ももちろん大事なことです。それだけではなく、どれだけ中身があるか、お客様にどれだけ信頼されているか、マーケットからどのような信頼を得られるかといった、内面的なものを大切にしていきたい。その為には、社員の皆さんがイキイキと仕事をし、またはお客様から認められ、感謝されるというような事例を、ひとつひとつ積み重ねていくことが大切で、そのことは刷新した新世紀憲章に全て網羅されています」(社内報『きずな』第39号=2006(平成18)年発行より)

『新世紀憲章』は、江守清喜の時代から脈々と社内に流れる「報恩感謝・信用誠実・和衷協力」の精神を、新しい時代にふさわしい形に昇華させたものなのである。



「Mission with Passion」のロゴマーク

4事業部体制に

江守商事は2006(平成18)年4月1日付で組織の改正を行った。

その要点は、業容の拡大に伴い、ケミカル事業に事業部制を導入し、化学品事業部と電子材料事業部を設置したことであった。

江守商事は2002(平成14)年にグループ制を導入して以来、フラットかつフレキシブルな組織体制を敷いていた。

しかし、ケミカル事業は化学品、電子材料、合成樹脂、繊維加工材等、幅広い分野の多種多様な商品を取り扱っており、事業部による統括を通じて、業務をより迅速かつ効率的に進めることにしたのである。

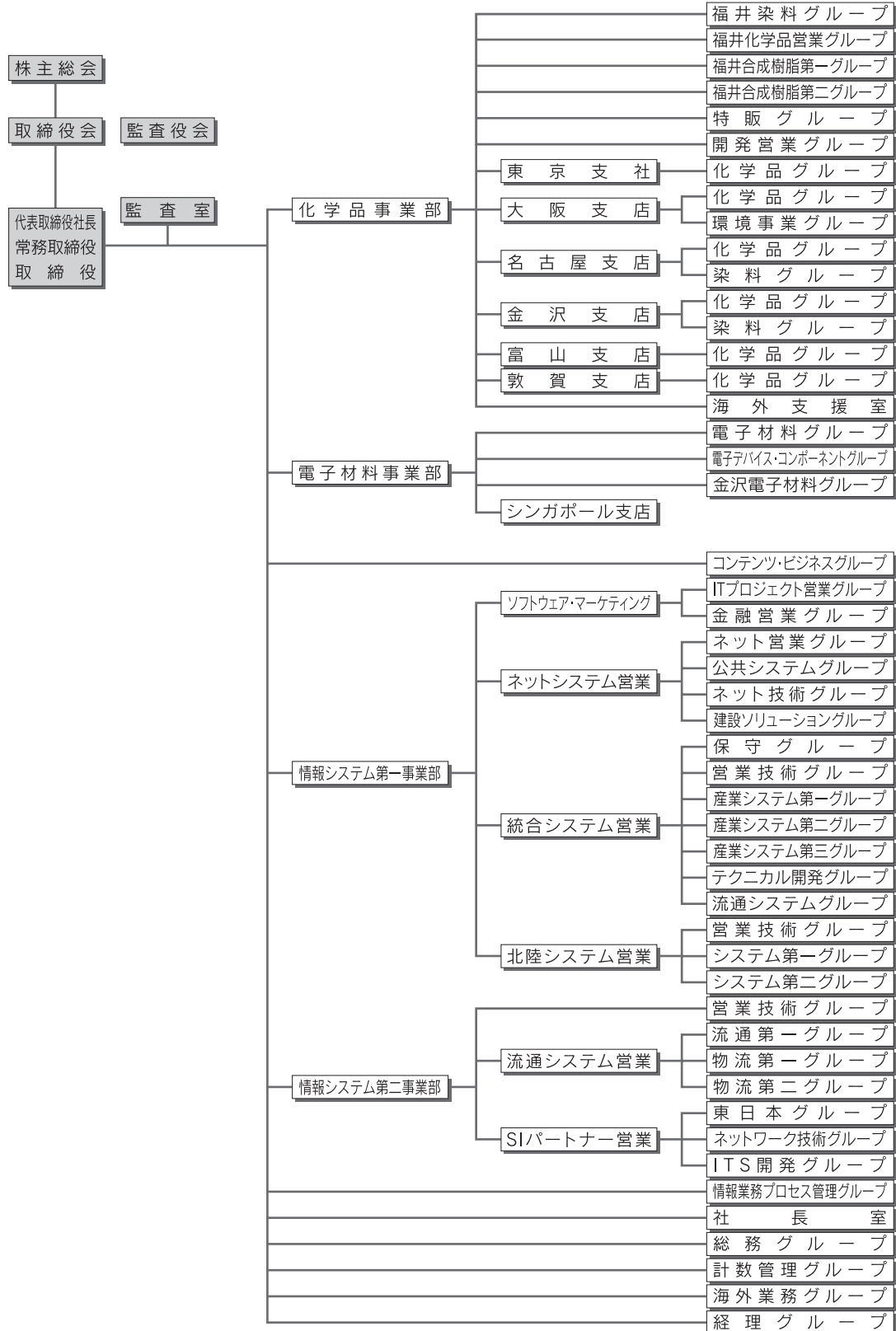
その結果、化学品事業部は本社と各支店・支社の関連グループ、EMORI & CO., (H.K.)LTD.、上海江守貿易有限公司の化学品・染料部門、PT. EMORI INDONESIA、EMORI USA CORPORATION、上海江守染色技術有限公司を統括。電子材料事業部は本社と金沢支店の関連グループ、シンガポール支店、上海江守貿易有限公司の電子材料部門、EMORI (THAILAND) CO.,LTD. を統括することになった。

また、情報システム事業では、特約店部門を統括する第一事業部、物流管理ソフト『リアルタイムDCシステム』を担当する第二事業部が中心となって事業を展開。2006(平成18)年6月29日付で社長の江守清隆が第一事業部長を兼任し、自ら新規市場の開拓に臨むことになった。

この組織改正により、江守商事は4事業部を中心とした体制で、事業を進めることになったのである。

組織図

2006(平成18)年8月現在



本社新社屋完成

2006(平成18)年3月16日、江守商事の本社新社屋の開所式が行われ、同月20日から業務がスタートした。6階建ての本社新社屋は江守商事創業100周年記念事業の中心的な存在であり、江守商事の新たなシンボルとなった。

構成

- 1階/駐車場、倉庫、更衣室、警備室
- 2階/エントランス、会議室、応接室
- 3階/情報システム部門
- 4階/ケミカル部門、海外業務グループ、大会議室
- 5階/管理部門、ソフトウェア・マーケティング、ネットワーク室、日江興産
- 6階/役員室、秘書エリア、VIP応接室、役員会議室

特徴

1. 機能的オープン構造

- 組織の壁がないフリーアドレス、1フロアオープン方式
- 駐車場と社屋の出入口が多く、最短の動線で移動可能

2. ビジネスを加速する情報装備

- FOMA、IP電話、無線LAN等の情報、電話、モバイルを統合したネットワークを整備
- 24時間対応可能な全社ネットワーク機能

3. 実用的セキュリティ対策

- ICカード社員証による入退出、データ利用権管理
- 顧客、企業データ、個人情報を守るためのアクセス権、ロック、持ち出し禁止、バックアップ等の多重措置

4. 人と地球に優しいランドマーク

- 全面ガラス張りのユニークなデザイン
- 多機能会議室、プレゼンテーションルームを設置



新社屋の営業フロアはフリーアドレス方式が継続され、組織の壁のないオープンな雰囲気になっている

本社新社屋に関して、江守清隆は次のように述べている。

「当社は百年の歴史があるけれど、今回の新社屋は近代的で先進的なビルです。色々な工夫もされていて、効率を高めることを主眼にしています。どのようなことを期待するかと言うと、ガラス張りの部屋が多いこともあり、常に周囲に見られていますから、まず歩き方が変わると思っています。そしてスピードが変わる。そうすると発想が変わり、仕事のやり方や質が変わり、お客様はそれを評価してくれて、さらに社員のやりがいも生まれる、これはまさに成功のスパイラルと言えます。そして結果として会社が変わるということを期待しています。新社屋に関しては、今できる最高のものを作ったつもりです」(社内報『きずな』第39号=2006(平成18)年発行より)

新しいステージで、ゼロからのスタートが始まる――。

新しい歴史の始まり ～江守清隆が語る江守商事の 現在、そして未来

江守商事にとって、創業100周年はさらなる進化を続けるための通過点だと言える。

新しい歴史の序章にかえて、江守商事社長、江守清隆の独白で本編を締めくくる。

創業100年の年に東証一部上場を果たしたのは幸運だった。1年足らずで二部から一部に上場することができたのは、社員が頑張った成果だと思う。一部上場によって、江守商事の社会的責任はますます大きくなった。株主の皆さんの負託に応え、業績を向上させていかなくてはならない。そして、それ以上にコンプライアンスを重視し、お取引先、株主、マーケットに信頼される会社でなければならない。法律を守り、良い情報だけでなく悪い情報も正確に適宜開示していくことが、我々の責任だと思う。

もちろん、社員各自が一つ一つの商売を誠実に行っていく必要がある。清喜前会長は「金は儲けなくていい。嘘をつかず、企業人である前に社会人として認められる人間になりなさい」と社員を教育してきた。つまり、信用や誠実性を忘れず、愚直なまでに真面目に商売をやっていくということ。会長も私もその薫陶を受けてきたし、私も日頃から社員には「商売は無くなっても取り戻せばいいが、失った信用は取り戻せない」と言い聞かせている。こうした姿勢は江守商事のベースとなっているし、今では伝統から常識になっていると思う。

一部上場を機に、連結売上高1000億円、売上高営業利益率3%という新たな目標を掲げた。業界の変化が激しいIT分野では、M&A等を利用し、事業拡大を考える。上場

企業に許されたエクイティを活用していきたいと思っている。しかし、自力で1000億企業に成長することが、江守商事にとっての大きなステップになっていく。また、売上高営業利益率が3%を超えることは、江守商事が付加価値の高い事業を展開しているという証明になる。

目標を実現するためには、“**Global Solution Partner**”という不変のテーマを追求していく必要がある。日本のマーケットは成熟し、地球はますます小さくなっていく。そうした状況にフィットしていかなくてはならない。お客様の海外志向は強くなっており、全員が海外営業という意識で世界に目を向けていく。国内だけでなく海外でもお付き合いしていかなくては、“**Global Solution Partner**”にはなれない。そして、問題解決能力を高めていく。江守商事と付き合うことでお客様が大きく変わる、そんな画期的な提案を行うことが真のソリューションであり、お客様の感動を呼び起こす



江守商事の未来を語る江守清隆

ことができる。我々はいつの時代も、お客様から選ばれる「パートナー」であり続けなければならない。

江守商事は人ありきの会社だ。創業以来、決して社員の個性を摘み取ってはこなかったし、それが社内に活力を生む原動力になってきた。

現在も自由な風土があると思う。経営方針の下で社員一人ひとりが自由に世界を飛び回り、情報を受発信し、社内外でコラボレーションを展開している。そうした動きをサポートするのが組織であり、会社だと考えている。個人が生き生き仕事することで、会社にも活力が生まれ、変化していける。

弊社の社員は、まだまだ可能性を持っていると思う。自分自身の可能性を信じて、思い切り仕事に取り組んでほしい。江守商事には個人の可能性を存分に発揮できるフィールドがある。自分一人では描けない大きな夢を、江守商事で実現してもらいたい。そのための環境を充実させていくのが、私の大きな役割だと思っている。

先人たちの努力によって築かれた1世紀の歴史に、新しい軌跡が日々刻まれていく。

“**Global Solution Partner**”として、新世紀憲章に謳われた「お取引先・株主・社員・地域社会の幸福」の実現を目指し、江守商事の進化は続く。

特別寄稿

江守商事株式会社 創業100周年記念誌
結びとして——。



会長 江守幹男

結びとして――。

当社は2006(平成18)年3月を以て創業100周年を迎えた。一世紀に及ぶ長い歴史は市井の薬種商を染料問屋、化学品商社、そして情報技術商社へ導いた。また、家業から企業へと進化を続けてきた。アジアを中心に国際化も開花させ、大輪の花を中国、タイをはじめアジア諸国に咲かせようとしている。

創業者である、祖父の江守清は福井藩士族の三男として生まれたが、一念発起し1893(明治26)年薬種問屋、田畑利兵衛商店(大阪市中央区道修町2丁目)に入店した。薬種商としての修業を開始、当時藤沢友吉(藤沢薬品工業株式会社(現アステラス製薬株式会社)創業者)が番頭を勤めていた。1906(明治39)年同店を退職し、故郷の福井市毛矢町で薬種商「江守薬店」を開業した。

明治、大正、昭和、平成、20世紀から21世紀へという大きな時代の流れの中、江守商事は幾多の危機を乗り越え商機を捉え、自らの変革を遂げながら北陸の地にこだわり、大家族主義を守って律儀な商売道あきんどを貫いてきた。

日本は欧米先進諸国に追いつき追い越すべく、猛烈な挑戦を展開した。太平洋戦争で本土の大半が焼土と化し完敗したが、戦後60年の復興発展は振り返ってみると目を見張るものがある。幸運にも恵まれたが、資源のないアジアの敗戦国が世界第二の経済大国に位置していることは誇り得ることである。

この100年は江守清喜翁の理念、江守魂ともいえる社員の団結の心とパワーが老舗を支えてきた。これからの新世紀は東アジアの時代が到来し、いっそうアジアは大変革をすることになるだろう。

ところで江守商事は戦火で焼かれ、福井大地震では全壊、全焼した。さらに朝鮮戦争末期の油脂大暴落で兄弟会社・日華化学を救うなど大きなピンチに遭遇するが、それをチャンスに変えてきた。戦後の繊維業界の活況、大躍進に支えられ業態を革新し、北陸線電化も機会と捉え福井の江守から北陸、さらには日本の江守へと発展していった。

また、情報機器の取り扱い及びソフトウェア開発への本格参入を契機にIT業界に進出。電子部品業界に業容を拡げた。技術を柱にした専門商社として国際化への道を進み、タイではエンジニアリングプラスチック精密成型工場の合弁会社さえ経営している。

これらは皆、お客様のお導きによるもので、田舎の染料問屋が次々と難関を突破し、創業100年を祝うごとく東証二部を経て、本年3月には東証一部に上場を果たすことができたのである。

これからは江守商事株式会社の200年に向けてのゼロからの出発である。「グローバル・ソリューション・パートナー」としてさらなる研鑽を積み、謙虚にダイナミックに新時代にはばたいてほしい。

最後に、お客様各位、関係役員社員各位、

当社をご守護頂いた諸天善神、先祖代々に心からなる御礼を申し上げ結びとしたい。

資料編

企業概要	152
グループ概要	154
企業データの推移	157
歴代役員	160
年表	162



商 号	江守商事株式会社 (EMORI & CO.,LTD.)
創 業	1906 (明治39) 年3月5日
設 立	1958 (昭和33) 年5月26日
代 表 者	代表取締役社長 江守清隆
資 本 金	799,320,000円
従業員数	267名 役員・出向者除く
事業内容	化学品・電子材料・合成樹脂・繊維加工剤・情報関連機器・システム開発・ 情報サービス・エコ商品・環境事業の国内販売及び輸出入
株式の状況	発行株式総数:34,000,000株 発行済株式総数:10,500,000株 株主数:7,523名
本 社	〒918-8510 福井県福井市毛矢1-6-23 TEL:0776-36-1133 (代) FAX:0776-36-4002 URL: http://www.emori.co.jp

2006 (平成18) 年3月末日現在

拠点概要

江守情報システムビル

〒910-0347 福井県坂井市丸岡町ソフトパークふくい1-6

TEL : 0776-67-7600 FAX : 0776-67-7611

東京支社

〒101-0044 東京都千代田区鍛冶町1-9-9 石川LKビル6F

TEL : 03-3257-2555 FAX : 03-3257-2551

大阪支店

〒556-0015 大阪府大阪市浪速区敷津西1-1-13

TEL : 06-6633-2441 FAX : 06-6633-2443

名古屋支店

〒450-0002 愛知県名古屋市中村区名駅4-2-28 名古屋第二埼玉ビル2F

TEL : 052-589-9800 FAX : 052-589-3800

金沢支店

〒920-0015 石川県金沢市諸江町上丁318-1

TEL : 076-233-1733 FAX : 076-233-1735

富山支店

〒939-8221 富山県富山市八日町243-18

TEL : 076-429-7100 FAX : 076-429-7102

敦賀支店

〒914-0064 福井県敦賀市結城町17-10

TEL : 0770-22-3962 FAX : 0770-25-6622

シンガポール支店

9 PENANG ROAD #07-24 PARK MALL 238459 SINGAPORE

TEL : 65-6338-0861 FAX : 65-6338-7408

上海事務所

200336 中華人民共和国上海市延安西路2201号上海国際貿易中心2612室

TEL : 86-21-6295-6633 FAX : 86-21-6295-5050

2006(平成18)年4月現在

主要取扱品目

化学品

有機化学製品、無機化学製品、石油化学製品、オレオケミカル製品、界面活性剤、塗料及びその原料、医薬・食品原料、製紙用薬剤、シリコン製品、環境衛生薬剤(殺菌・除菌・抗菌・防かび剤)、溶剤、洗浄剤、水処理薬剤、防水材料、各種試薬、バイオテクノロジー製品、肥料及び造園・園芸用資材、種苗・球根、飲料水、機能性繊維、フィルター類、工業用不織布、紙加工品、イオン交換樹脂、電力関連資材、原子力用高純度化学製品、希土類、防食資材、理化学機器

電子材料

電子部品、半導体、LCD、液晶、絶縁材料、磁性材料、金属樹脂・ゴム加工品、ハーネス関連、基板ユニット、包装材料等、貴金属薬品関連、ハンダ・フラックス関連、シリコンラバーフィルム、機能性フィルム

合成樹脂

熱可塑性樹脂、熱硬化性樹脂、エンジニアリングプラスチック、機能性複合材料、合成樹脂製品、プラスチック成型加工機及び周辺機器、各種金属材料、合成ゴム、顔料、接着剤、可塑剤、非鉄金属及び製品、ガラス繊維及び製品、その他樹脂関連副資材

繊維加工剤

染顔料、機能性色剤、染顔料中間体、界面活性剤、機能性加工樹脂、プリントケミカル、サイジング剤、その他テキスタイルケミカル、燃料、繊維材

情報関連機器

【ハード】

コンピュータ(汎用機、オフィス・サーバ、PC/UNIXサーバ、パソコン、ワークステーション、パソコン周辺機器等)、OA機器(FAX、CAD、CAM、TV会議、電子ファイリング)、ネットワーク機器(電話交換機等、LAN設備、WAN設備)、各種周辺機器(金融自動化機器、POS他)

【ソフト】

海外情報関連商品(上下水道・河川関連解析シミュレーションシステム、汚水・廃水処理プロセスシミュレーションシステム)、国内OEM商品(パッケージソフトウェア)、オリジナルパッケージソフト(土木建設業向け経営支援シリーズ、統合物流支援システム、E-Packシリーズ等)

システム開発

システム・インテグレーション、コンサルティング、ソフトウェア開発受託、トータル・ネットワークシステム、ERP、OA(業務改善提案)、LA(研究開発支援システム)、MES(生産現場系システム)、金融・公共業務支援システム開発、グループウェアシステム開発、SCM(サプライチェーンマネジメントシステム)、CTI(コンピュータテレフォニーインテグレーション)、SFA(営業支援システム)、データウェアハウスシステム、Webベースシステム、インターネット情報検索システム

情報サービス

インターネット・プロバイダサービス、企業間ネットワークシステムサービス、企業内統合ネットワークサービス(イントラネット)、マルチメディアコンテンツ企画・制作、ユースウェア(導入支援、利用教育、各種セミナー受託)、法人向けパソコンレンタルサービス、機器保守サービス(修理、予防保守、アベイラビリティ・マネジメント)、ホームページ制作

エコ商品

プラスッド(手すり・腰壁・デッキ・柵板・ドア取手・造作材・その他)

環境事業

高分子分離膜(MF膜、UF膜、NF膜、RO膜)及び分離膜ユニット、分離膜システム、排水リサイクルシステム、有価物回収システム、色素脱塩濃縮システム、アミノ酸脱色精製システム、各種水処理装置、各種濾過装置、省力化機械、公害防止関連装置、水処理用薬品

グループ各社概要

2006(平成18)年3月末日現在

■は連結子会社 □は持分法適用関連会社

■北陸化成工業株式会社

設立 1973(昭和48)年3月31日
 代表者 代表取締役社長 後藤利榮
 資本金 30,000(千円)
 従業員数 14名
 主な事業内容 合成樹脂、化成品の製造販売

〒910-3613 福井県福井市甕谷市29-22-17
 TEL: 0776-98-4670 FAX: 0776-98-4546

■江守塗料株式会社

設立 1979(昭和54)年12月1日
 代表者 代表取締役社長 後藤利榮
 資本金 20,000(千円)
 従業員数 8名
 主な事業内容 塗料販売、塗装、防水工事請負

〒918-8013 福井県福井市花堂東1-25-20
 TEL: 0776-36-6600 FAX: 0776-35-2125

■EMORI & CO.,(H.K.)LTD.

設立 1983(昭和58)年4月2日
 代表者 董事長 江守清隆
 資本金 1,800(千HK\$)
 従業員数 2名
 主な事業内容 染料、顔料、機能性化学品、機能性樹脂、
 色彩管理各種機器、機能性繊維素材等
 の輸入販売

FLAT D1&D2 15/F., TUEM MUN INDUSTRIAL
 CENTRE, 76 PUI TO ROAD, TUEM MUF N.T.,
 HONG KONG
 TEL: 852-2455-6711 FAX: 852-2455-6168

■株式会社エフ・イーシステム

設立 1988(昭和63)年2月24日
 代表者 代表取締役社長 江守清隆
 資本金 20,000(千円)
 従業員数 16名
 主な事業内容 コンピュータ関連全般にわたるソフトウエ
 アの開発、設計技術者の派遣及びシス
 テム開発請負業務、コンピュータシス
 テムの操作請負及び操作員の派遣業務、
 コンピュータ関連機器の販売業務

〒910-0347 福井県坂井市丸岡町ソフトパークふくい1-6
 TEL: 0776-67-7650 FAX: 0776-67-7611

■北陸カラー株式会社

設立 1988(昭和63)年9月1日
 代表者 代表取締役社長 江守清隆
 資本金 20,000(千円)
 従業員数 13名
 主な事業内容 小ロット染色の専門工場、染色試験

〒918-8013 福井県福井市花堂東1-25-20
 TEL: 0776-35-7415 FAX: 0776-35-7462

■江守企画株式会社

設立 1993(平成5)年11月1日
 代表者 代表取締役社長 江守清隆
 資本金 50,000(千円)
 従業員数 19名
 主な事業内容 ダストコントロール商品の販売及びリー
 ス、移動体通信機器の販売

リースキン事業

〒918-8013 福井県福井市花堂東1-25-20
 TEL: 0776-33-1881 FAX: 0776-33-1882

ドコモ事業

〒918-8112 福井県福井市下馬3-403
 TEL: 0776-33-3555 FAX: 0776-33-3533

■江守システム開発株式会社

設立 1994(平成6)年2月28日
 代表者 代表取締役社長 江守清隆
 資本金 88,000(千円)
 従業員数 8名
 主な事業内容 情報機器の販売、ソフトウェア開発

〒910-0347 福井県坂井市丸岡町ソフトパークふくい1-6
 TEL: 0776-67-7622 FAX: 0776-67-7607

■江守物流株式会社

設立 1996(平成8)年4月1日
 代表者 代表取締役社長 江守清隆
 資本金 50,000(千円)
 従業員数 8名
 主な事業内容 商品の保管及び管理、配送業務

〒918-8013 福井県福井市花堂東1-25-20
 TEL: 0776-36-8400 FAX: 0776-34-3554

■上海江守貿易有限公司

設立 1996(平成8)年3月29日
 代表者 董事長 江守清隆
 資本金 1,500(千US\$)
 従業員数 44名
 事務所 浦西(上海)、青島、北京、広州
 主な事業内容 化学品、電子材料、合成樹脂、繊維加工剤の販売

中華人民共和国上海市延安西路2201号 上海国際貿易中心2612室
 TEL : 86-21-6295-6633 FAX : 86-21-6295-5050

■PT.EMORI INDONESIA

設立 2001(平成13)年7月12日
 代表者 コミサリス 江守清隆
 社長 山口浩平
 資本金 500(千US\$)
 従業員数 10名
 主な事業内容 化学品、電子材料、合成樹脂、繊維加工剤の販売

PERMATA PLAZA 7TH FL.730JL.M.H. THAMRIN 57,
 JAKARTA 10350 INDONESIA
 TEL : 62-21-390-3272 FAX : 62-21-390-3274

■株式会社ブレイン

設立 1986(昭和61)年8月28日
 代表者 代表取締役会長 江守清隆
 代表取締役社長 濱田一成
 資本金 10,000(千円)
 従業員数 21名
 主な事業内容 コンピュータソフトウェアの開発及び販売

〒541-0048 大阪府大阪市中央区瓦町3-1-4
 トーア紡ビル6F
 TEL : 06-6203-3018 FAX : 06-6203-2900
 URL : <http://www.kk-brain.jp>

■EMORI USA CORPORATION

設立 2004(平成16)年7月1日
 代表者 President 江守清隆
 資本金 100(千US\$)
 主な事業内容 米国における主に日系企業の電子部品製造メーカーや化学品製造メーカー等への電子部品や原材料供給

11712 MOORPARK ST., SUITE 101 STUDIO CITY,
 CALIFORNIA 91604 USA
 TEL : 1-818-752-0267 FAX : 1-818-752-0267

■日江興産株式会社

設立 1985(昭和60)年11月21日
 代表者 代表取締役社長 江守清隆
 資本金 10,000(千円)
 従業員数 1名
 主な事業内容 損害保険及び生命保険代理

〒918-8510 福井県福井市毛矢1-6-23
 TEL : 0776-36-6100 FAX : 0776-36-7603

■江守エンジニアリング株式会社

設立 1995(平成7)年10月2日
 代表者 代表取締役社長 江守清隆
 資本金 50,000(千円)
 従業員数 12名
 主な事業内容 エンジニアリング設計施工、建築請負工事

〒918-8013 福井県福井市花堂東1-25-20
 TEL : 0776-36-6100 FAX : 0776-36-7603

■EMORI(THAILAND)CO.,LTD.

設立 1997(平成9)年6月1日
 代表者 代表取締役社長 江守清隆
 資本金 30,000(千BAHT)
 従業員数 19名
 主な事業内容 化学品、合成樹脂等の販売

10TH FL., BOONMITR BLDG, 138 SILOM ROAD,
 SURIYAWONGSE, BANGRAK, BANGKOK, 10500
 THAILAND
 TEL : 66-2-238-2606 FAX : 66-2-238-2608

EMORI HOLDINGS (THAILAND) CO.,LTD.

設立 2003 (平成15) 年11月27日
 代表者 代表取締役 江守清隆
 資本金 2,000 (千BAHT)
 主な事業内容 化学品、電子材料、合成樹脂の販売

10TH FL., BOONMITR BLDG., 138 SILOM ROAD,
 SURIYA WONGSE, BANGRAK, BANGKOK, 10500
 THAILAND
 TEL : 66-2-238-2606 FAX : 66-2-238-2608

上海江守染色技術有限公司

設立 2004 (平成16) 年5月10日
 代表者 董事長・総経理 筑後嘉英
 資本金 200 (千US\$)
 従業員数 4名
 主な事業内容 染料試験業務、染色技術開発、染料製造

中華人民共和国上海市普陀区真南路1670号
 TEL : 86-21-5284-3359 FAX : 86-21-5284-3541

THAI USUI CO.,LTD.

設立 1990 (平成2) 年8月15日
 代表者 代表取締役社長 スモンスワンパトラ
 資本金 85,000 (千BAHT)
 従業員数 347名
 主な事業内容 エンジニアリングプラスチックの精密
 成型加工

130/5 SOI SILOM 6, SILOM ROAD, BANGKOK 10500
 THAILAND
 TEL : 66-2-235-6683 FAX : 66-2-266-9648

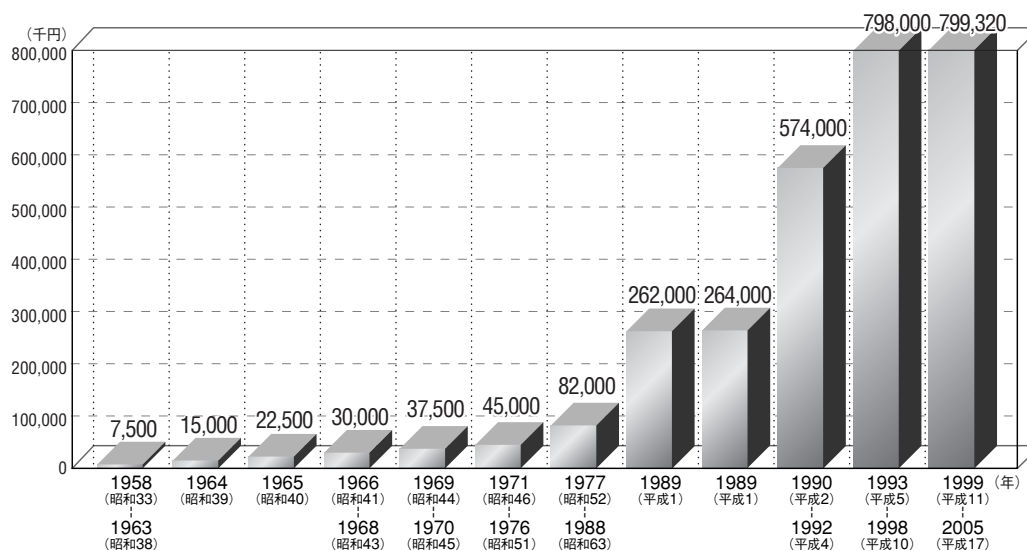
PRESIDENT CHEMICAL CO.,LTD.

設立 1979 (昭和54) 年7月1日
 代表者 MANAGING DIRECTOR
 PRAYUT SUWANPATRA
 資本金 40,000 (千BAHT)
 従業員数 70名
 主な事業内容 染料、化学品、合成樹脂の販売

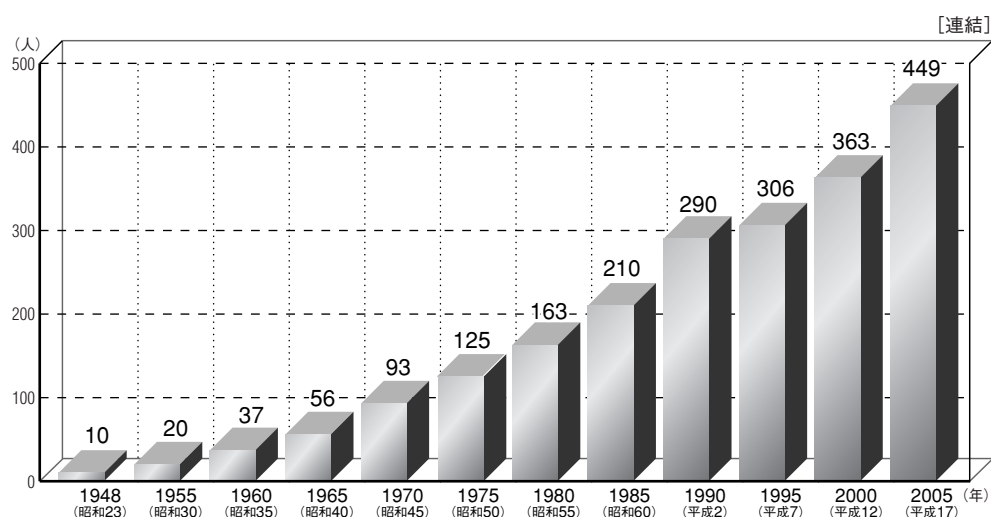
54/15-17 SOI SANTIPARD, SURAWONGSE ROAD ,
 BANGRAK, BANGKOK 10500 THAILAND
 TEL : 66-02-266-5822-3 FAX : 66-02-236-2008

資本金・従業員数

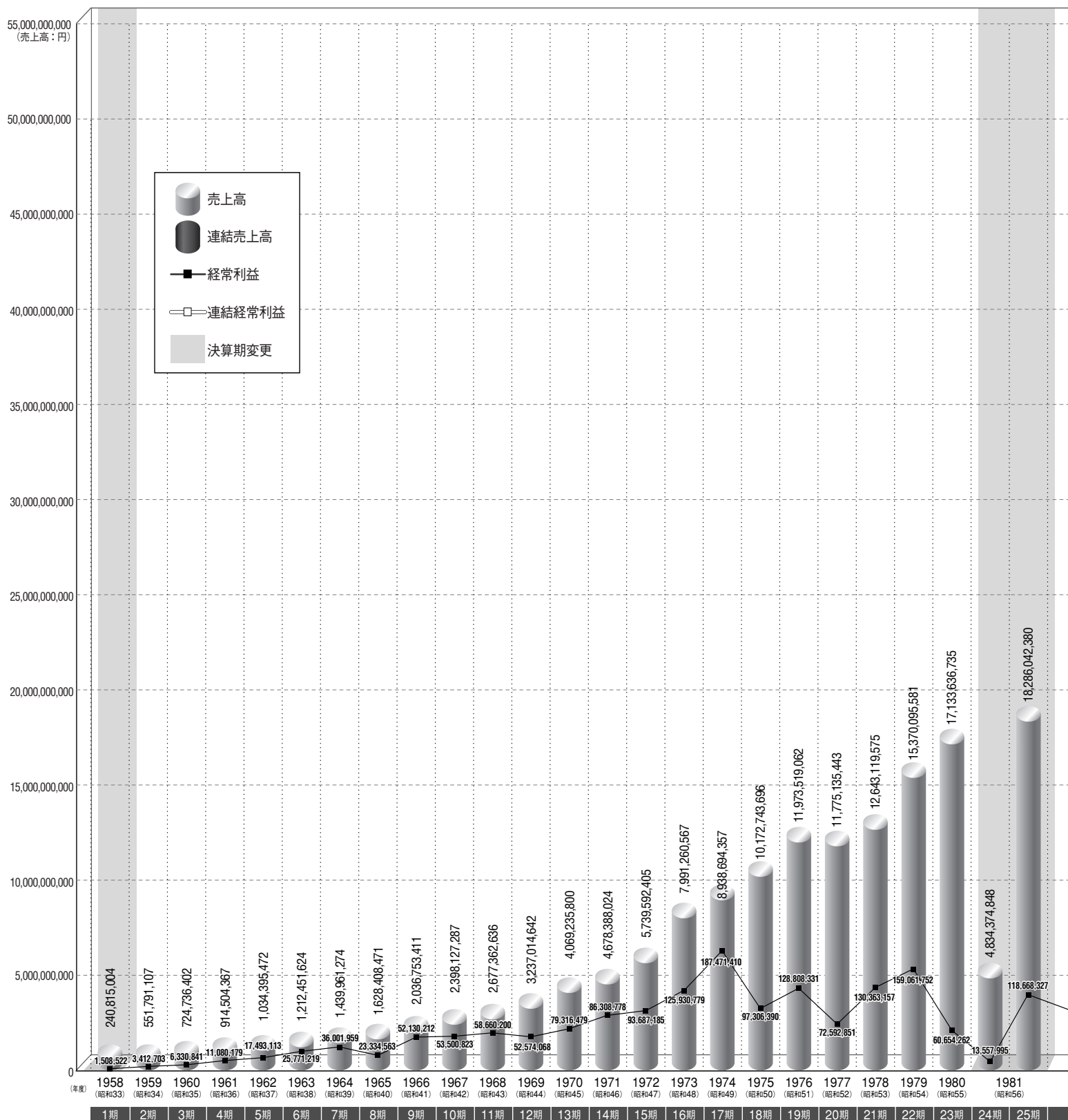
資 本 金

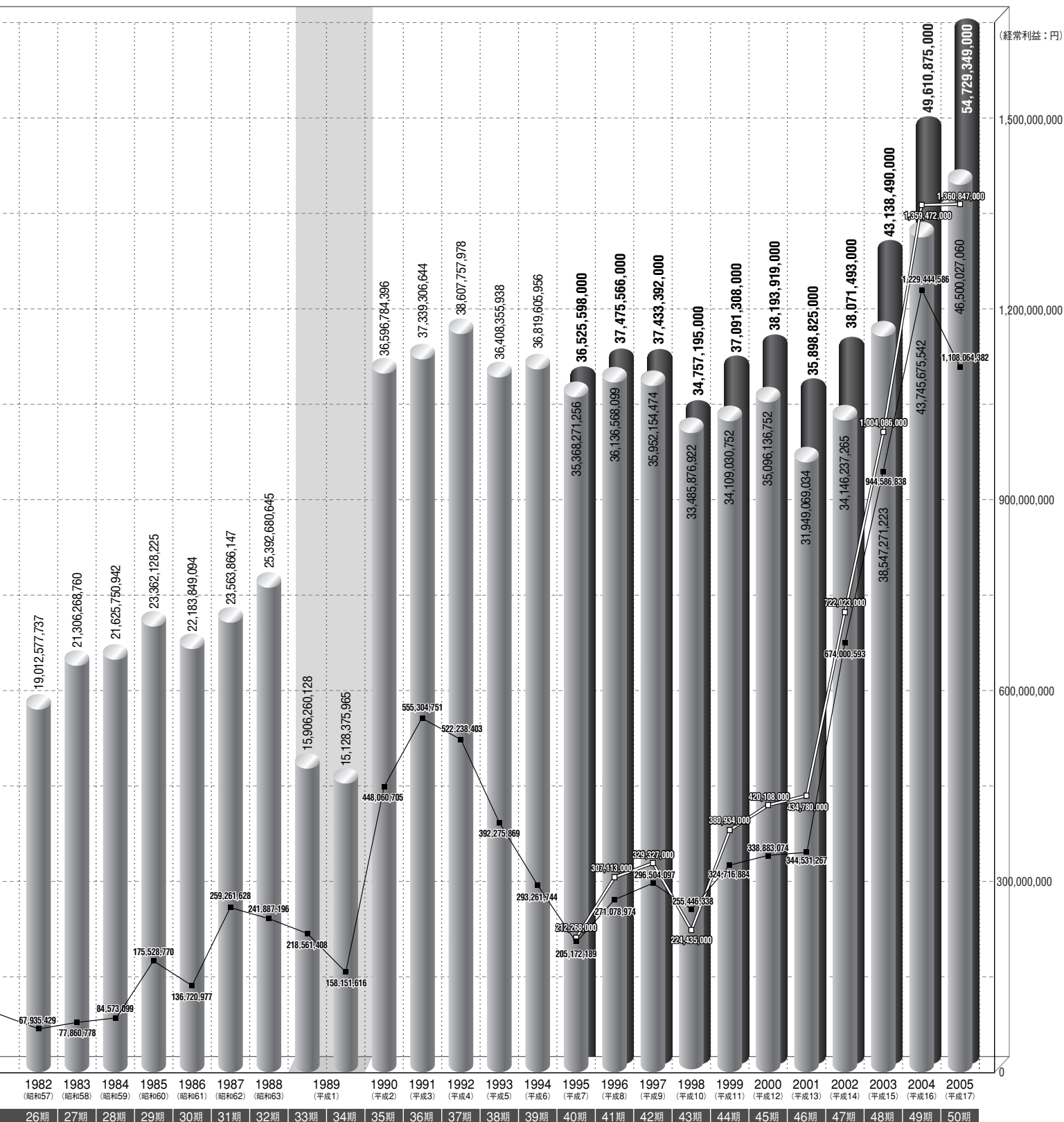


従 業 員 数



売上高・経常利益





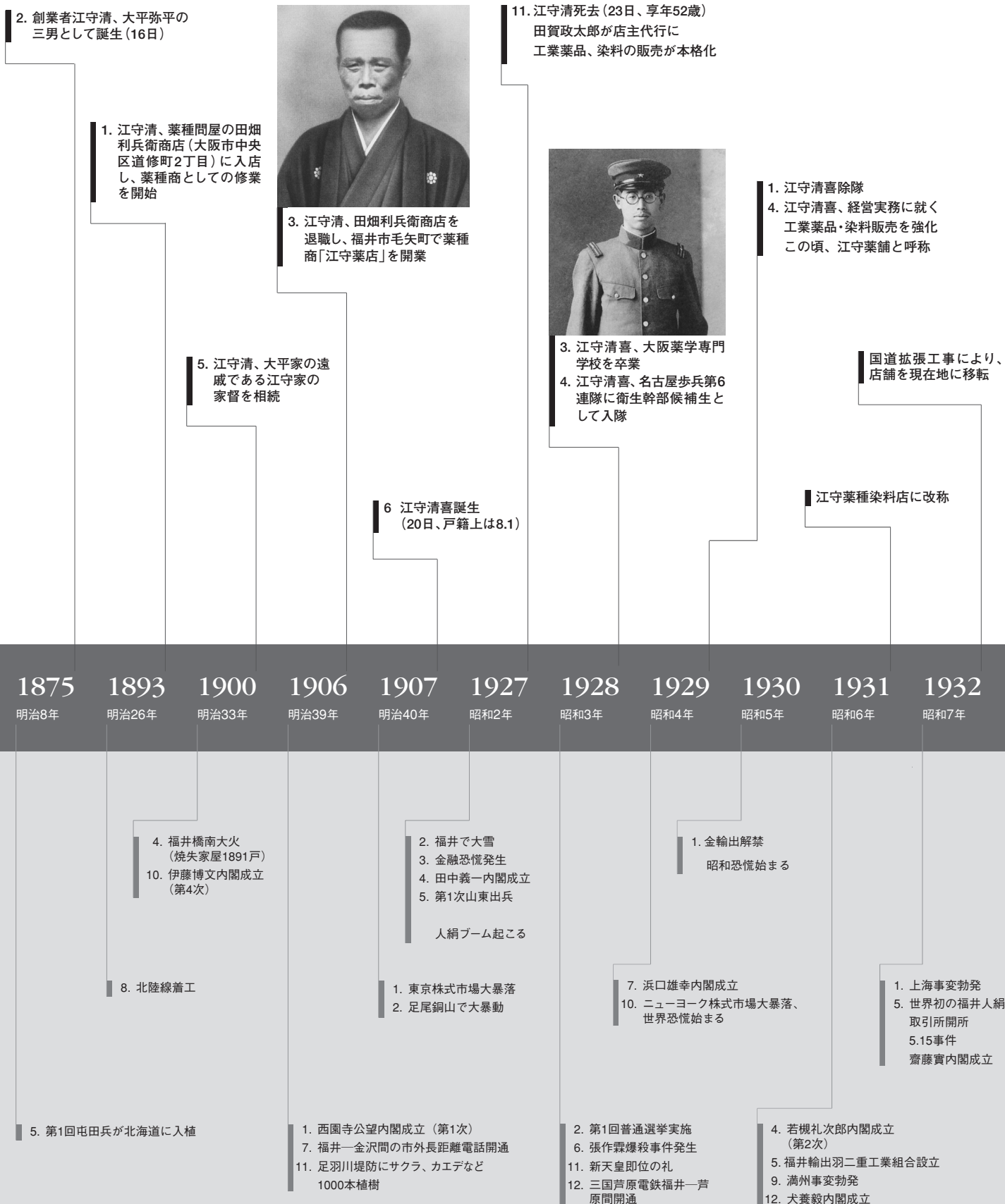
歴代役員任期一覽

2006(平成18)年6月末日現在

	1958 (昭和33)	1959 (昭和34)	1960 (昭和35)	1961 (昭和36)	1962 (昭和37)	1963 (昭和38)	1964 (昭和39)	1965 (昭和40)	1966 (昭和41)	1967 (昭和42)	1968 (昭和43)	1969 (昭和44)	1970 (昭和45)	1971 (昭和46)	1972 (昭和47)	1973 (昭和48)	1974 (昭和49)	1975 (昭和50)	1976 (昭和51)	1977 (昭和52)	1978 (昭和53)	1979 (昭和54)	1980 (昭和55)	1981 (昭和56)		
江守 清喜	代表取締役社長																									
江守 幹男	取締役											代表取締役副社長														
江守 清隆																										
平佐多 晶	常務											代表取締役専務														
能登松次郎	取締役											常務														
江守千代子	監査役																									
樋口福太郎	監査役																									
能瀬 重治					監査役											取締役									常務	
井上 要							監査役																			
新村 光治														取締役												
島川 勝治																				取締役		常務				
竹内 泰治																				取締役						
宇佐美 寛																				取締役						
田賀 道徳																				監査役						
小林 正博																				監査役						
湯口 幸雄																							取締役			
豊田 愷二																										
山崎 信一																										
安楽 晃																										
中尾侑之輔																										
増永 稔																										
川口 英雄																										
宇野 勝治																										
江口 重世																										
後藤 利榮																										
揚原 安麿																										
松本 清次																										
三宅 雅之																										
舩津 伸行																										
関口 英雄																										
林 宏樹																										
稲井田重則																										
山本 昇																										
黒瀬 則雄																										
筑後 嘉英																										
野坂 佳生																										
伏見 明																										
小玉 隆一																										



年表



5. 江守清喜、宮下精練剤工業所の経営に参画

企業整備令公布によりアミノ酸の生産統制が強化、中部第二アミノ酸工業所を設立

6. 田賀政太郎死去
江守薬局に改称

9. 日華化学工業所を日華化学工業株式会社に改組、江守清喜が社長に就任
日華化学がアミノ酸製造の農林省中央指定工場、繊維油剤製造の軍需省指定工場に

5. 宮下精練剤工業所を合資会社日華化学工業所に改称
江守清喜、貴族院多額納税議員互選人に選出

1933 昭和8年 1934 昭和9年 1935 昭和10年 1936 昭和11年 1937 昭和12年 1938 昭和13年 1939 昭和14年 1940 昭和15年 1941 昭和16年 1942 昭和17年 1943 昭和18年

3. 日本、国際連盟を脱退
7. NHKラジオの福井放送局開局
10. 福井で陸軍特別大演習が行われ、昭和天皇が行幸

1. 日本、ロンドン軍縮会議から脱退
2. 2.26事件発生
3. 広田弘毅内閣成立
11. 日独防共協定調印

5. 福井市新庁舎完成

7. 岡田啓介内閣成立
9. 室戸台風
10. 福井県輸出羽二重商業組合設立

1. 平沼騏一郎内閣成立
5. 福井市制50周年
8. 阿部信行内閣成立
9. 第2次世界大戦勃発

4. 国家総動員法公布

福井県下の人絹生産量が全国の68%を占め、人絹王国と呼ばれるようになる

2. 林銑十郎内閣成立
6. 近衛文麿内閣成立
7. 日中戦争勃発
11. 日独伊3国防共協定調印

1. 福井人絹取引所解散
5. 企業整備令公布

12. 太平洋戦争勃発

1. 米内光政内閣成立
7. 近衛文麿内閣成立（第2次）
11. 大日本産業報国会設立

7. 東京都制施行
10. 織物製造・加工、繊維雑品染色整理等の業種に企業整備通達



- 7. 福井市空襲により、江守薬舗倉庫1棟を残して全焼(19日)
江守薬舗仮店舗で営業開始
- 12. 江守清喜召集解除により、店主に復帰

- 9. 江守清喜、日本繊維油剤工業会理事に就任
江守商店の経理を単式から複式簿記に改める

日華化学経営悪化、江守商店、福井銀行、長瀬産業、田岡染料等の支援で危機を脱する

- 10. 久保義隆、日華化学社長に就任、江守清喜は副社長に

- 4. 江守薬舗本店舗建築
江守商店に改称

- 5. 身延山久遠寺、七面山に一同参拝
借入金の返済開始

- 1. 江守清喜召集を受け、鯖江陸軍病院衛生材料科長を拝命
日華化学、鉄意六一〇工場と改称し軍需省の燃料局に所属
日華化学で松根油を精製したテレピン油の生産開始

- 4. 江守ゆきを死去(16日)
- 6. 福井大震災で江守商店、日華化学全壊(28日)
江守清喜夫人、三女死去(28日)
- 7. 豪雨による九頭竜川堤防決壊で日華化学が浸水被害(25日)
- 8. 江守清喜五女死去(2日)
- 9. 江守商店店舗普請(10日)
- 11. 江守商店営業再開(1日)
- 12. 日華化学工場竣工(8日)

1944 昭和19年 1945 昭和20年 1946 昭和21年 1947 昭和22年 1948 昭和23年 1949 昭和24年 1950 昭和25年 1951 昭和26年 1952 昭和27年 1953 昭和28年 1954 昭和29年

- 2. ヤルタ会談
- 3. 東京大空襲
- 4. 鈴木貫太郎内閣成立
- 7. 敦賀市、福井市に空襲
- 8. 広島、長崎に原爆投下
日本がポツダム宣言受諾
東久邇宮稔彦内閣成立
- 10. 幣原喜重郎内閣成立
- 11. 財閥解体
- 12. 農地改革
婦人参政権確立
- 7. 小磯國昭内閣成立
- 11. 東京初空襲

- 3. 芦田均内閣成立
- 4. 新制高校発足
- 5. サマータイム制実施
- 6. 福井で大地震発生
- 10. 吉田茂内閣成立(第2次)
- 11. 東京裁判
- 12. GHQ、経済安定9原則発表
- 4. 労働基準法公布
独占禁止法公布
- 6. 片山哲内閣成立

- 2. 福井人絹取引所再開
- 6. 日本、ILOに加盟
- 9. サンフランシスコ講和条約、日米安保条約調印
- 6. 朝鮮戦争勃発
- 7. 警察予備隊発足
- 9. ジェーン台風で福井県内に大きな被害

- 3. 米のビキニ環礁水爆実験で第五福竜丸被爆
- 7. 自衛隊発足
- 12. 鳩山一郎内閣成立
- 2. NHK東京でテレビ本放送開始
- 7. 朝鮮戦争休戦協定調印
- 8. 日本テレビ、民放初のテレビ放送開始

- 4. 戦後初の衆議院選挙実施
- 5. 吉田茂内閣成立
- 10. 福井市と敦賀市が特別都市計画法の適用都市に指定され、戦災復興土地区画整理事業を開始
- 11. 日本国憲法公布

- 3. ドッジライン発表
- 4. GHQ為替レート1ドル=360円実施
- 10. 中華人民共和国発足
- 11. 湯川秀樹、ノーベル物理学賞受賞

- 4. 福井復興博覧会開催

小口配達用にオート三輪車・スクーターを購入



3. 江守商店創業50周年
11. 花堂倉庫落成
技術商社を目指し試験室開設
社是・社訓を明文化

5. 江守商店を株式会社江守商店に法人化(26日、資本金750万円)
6. 本社倉庫落成

4. 江守清喜、福井市社会教育委員に就任
11. 江守清喜、紺綬褒章受章
江守清喜、福井市公平委員に就任

5. 職務分掌及び権限規定を制定

5. 大阪出張所を開設



8. 名古屋出張所を開設
本社新社屋完成
9. 江守清喜、紺綬褒章受章

4. 敦賀出張所を開設
資本金を1500万円に増資

3. 資本金を2250万円に増資
江守清喜、福井商工会議所常議員に就任
江守清喜、紺綬褒章受章
10. 江守清喜、福井県教育委員に就任

1955 昭和30年 1956 昭和31年 1957 昭和32年 1958 昭和33年 1959 昭和34年 1960 昭和35年 1961 昭和36年 1962 昭和37年 1963 昭和38年 1964 昭和39年 1965 昭和40年

2. 岸信介内閣成立
8. 茨城県東海村の原子炉に原子の火がともる
10. ソ連、世界初の人工衛星スプートニク1号打ち上げ

4. 芦原町で大火、309戸全焼
9. 北陸線敦賀―米原電化工事着工
10. 日ソ共同宣言
12. 日本、国際連合に加盟
石橋湛山内閣成立

9. 日本のGATT加盟承認
10. 社会党統一
11. 福井経済同友会発足
自民党誕生

1. 日米新安保条約調印
5. 福井電話局自動化
6. 安保闘争激化
福井放送、テレビ放送を開始
7. 池田勇人内閣成立
9. NHK、カラーテレビ本放送開始
12. 池田内閣が国民所得倍増計画を閣議決定
染色業界が人絹から合成繊維の時代に

1. メートル法施行
4. 皇太子ご成婚
9. 伊勢湾台風
12. 三池争議始まる

12. 1万円札発行

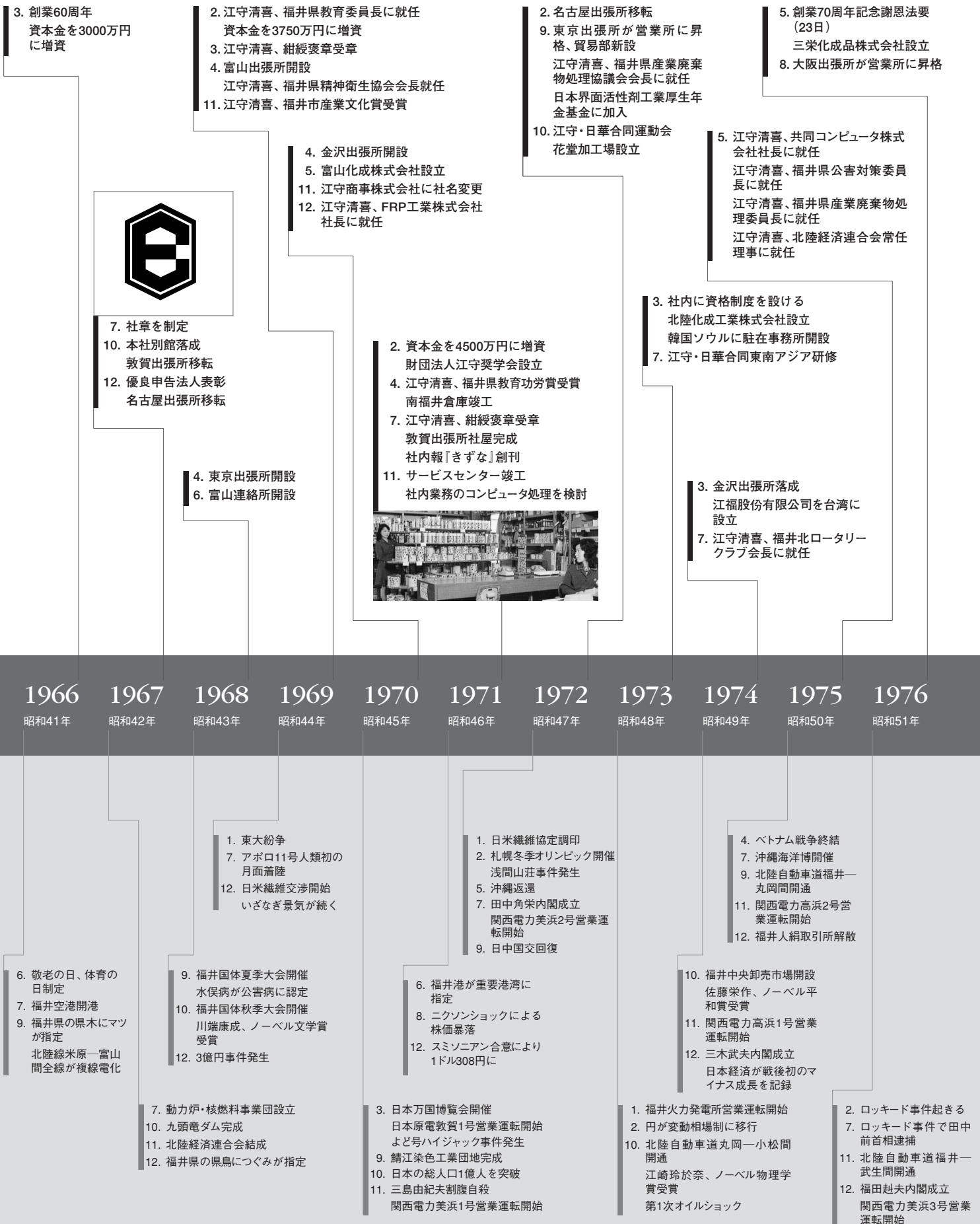
1. 北陸地方に大雪(38豪雪)
4. 北陸線福井―金沢間電化開通
11. ケネディ米大統領暗殺

3. 福井県議会、原発誘致を決議
6. 北陸トンネル開通、敦賀―福井間電化工事完成
8. 初の国産旅客機YS11試乗飛行に成功
9. 関西電力が敦賀半島に原発建設を発表
12. 奥越電源開発事業、正式決定

4. ガガーリン、人類初の有人宇宙飛行

1. 中小企業金融庫福井出張所開設
9. 台風23、24号が奥越地方に集中豪雨をもたらす
10. 朝永振一郎、ノーベル物理学賞受賞
11. 戦後初めての赤字国債発行を閣議決定

4. 日本、OECDに加盟
6. 福井市が市民憲章「不死鳥のねがい」を制定
新潟大地震発生
10. 東海道新幹線開業
東京オリンピック開催
11. 佐藤栄作内閣成立



- 1. 徳亜樹脂股份有限公司に資本参加
- 6. 名古屋出張所移転
江守清喜経営実務50周年感謝会開催
- 7. タイのプレジデントケミカル社に資本参加
- 8. 日立コンピュータ特約店に
- 12. サービスセンターが江守塗料株式会社に
金沢出張所が営業所に昇格

- 6. 在庫管理業務のオンライン化
- 7. 江守塗料新社屋落成
- 9. OAショールームオープン
- 10. 福井資源化工操業開始
- 12. 事業部制発足

- 3. 電子材料の販売を開始
福井銀行、日華化学と提携し
ファームバンキング開始
- 5. 技術開発センター開設
- 7. 東京営業所が支店に昇格

- 6. 「江守商事八十年史」発刊
- 9. MID事業部発足
- 10. OAショールーム開設5周年
記念フェア

- 3. 江守清喜、岩野製紙株式会社社長
に就任
- 4. 資本金を8200万円に増資
- 6. 江守清喜、日華化学会長に就任
江守幹男、日華化学社長に就任
- 11. 江守清喜、勲四等旭日小綬章受章
北陸化成工業事務所新築

- 3. 富山化成新社屋落成
コンピュータ事業部発足
- 6. 江守清喜、会長就任
江守幹男、社長就任
- 10. 創業75周年記念謝恩法要・式典
北陸3県で日立OA機器の販売
を開始
会計年度決算日を3月20日に変
更

- 3. 江守幹男、福井経済同友会代
表幹事に就任
- 4. 香港にEMORI & CO.,(H.K.)
LTD.設立
- 5. 江守商事創業77年・日華化学
創立45周年・江守清喜喜寿祝
賀会(1日)
- 6. 江守清喜胸像除幕式
- 8. 江守幹男、文部大臣表彰
- 11. 株式会社富山コンピュータ設立

- 3. 名古屋出張所が営業所に昇格
大阪営業所が支店に昇格
事業部制から本部制に組織変更
- 5. 江守幹男、北陸システム工業
会会長に就任
- 6. 青年重役会制度発足
- 9. FA機器の販売開始
- 11. 日江興産株式会社設立
- 12. 江守総業株式会社設立

- 4. 江守幹男、日本界面活性剤工
業会会長に就任
- 8. 売掛金、買掛金の管理業務を
オンライン化
- 10. 江守清喜、福井資源化工株式
会社社長に就任
- 11. 江守清喜、文部大臣表彰
- 12. 清友会発足

- 11. 江守奨学会創立10周
年記念式典
- 12. 中国から日本で初めて
重水を輸入



- 2. 江守清喜死去、享年79歳
(18日)
- 6. 江守清喜追悼法要・創業80
周年報恩法要(1日)
「ニュー江守」創造宣言
303作戦スタート
- 10. 株式会社テクノシステム設立
- 11. 敦賀出張所が営業所に昇格
韓国のコーロン・セレン株
式会社に資本参加
- 12. 金沢市に株式会社サンコー
設立

1977 昭和52年 1978 昭和53年 1979 昭和54年 1980 昭和55年 1981 昭和56年 1982 昭和57年 1983 昭和58年 1984 昭和59年 1985 昭和60年 1986 昭和61年 1987 昭和62年



- 3. 米ソ、200カイル体制を
実施
- 9. 連合赤軍、日航機をハ
イジャック
- 12. 北陸自動車道武生—
敦賀間開通

- 2. イラン革命
- 3. 新型転換炉「ふげん」運転開始
関西電力大飯1号営業運転開始
- 12 関西電力大飯2号営業運転開始

- 1. 北陸地方に大雪
(56豪雪)
- 3. 中国残留孤児が初来日
神戸ポートピア開催
- 10. 福井謙一、ノーベル化学
賞受賞
- 11. 福井県庁新庁舎落成、置
県100周年式典

- 4. 福井医科大学開校
北陸自動車道敦賀—米原間開通
- 6. 初の衆・参院同日選挙実施
- 7. 鈴木善幸内閣成立
日本、モスクワオリンピックをボイコット
- 9. イラン・イラク戦争勃発

- 3. グリコ・森永事件
発生
- 11. 1万円・5000円・
1000円の新札発
行

- 6. 比例代表制を導入した初
めての参議院選挙実施
- 9. ソ連が大韓航空機を撃墜

- 2. 日航機、羽田沖に墜落
- 4. 500円硬貨発行
- 6. 東北新幹線開業
- 11. 中曽根康弘内閣成立
上越新幹線開業

- 1. 関西電力高浜3号営業運転開始
- 3. 科学万博つくば'85開催
- 4. 公社民営化によりNTT、JT発足
- 6. 関西電力高浜4号営業運転開始
- 8. 日航機、御巣鷹山に墜落
- 9. G5でプラザ合意

- 4. 男女雇用機会均等法施行
ソ連・チェルノブイリ原発事
故発生
- 10. 福井臨工石油備蓄基地完成

- 2. 日本原電敦賀2号営
業運転開始
- 4. 国鉄民営化により
JRグループ7社発足
- 10. 利根川進、ノーベル
医学生理学賞受賞
ニューヨーク株式市
場大暴落
- 11. 竹下登内閣成立
連合発足

- 2. 株式会社エフ・イーシステム設立
- 4. 江守清喜翁を偲ぶ会、石碑除幕式(妙見山歓喜寺)
- 9. 北陸カラー株式会社設立

- 1. 東京支社移転
富山営業所が富山支店に昇格
- 3. 資本金を5億7400万円に増資
- 5. 北陸江守コンピュータ株式会社設立
- 8. タイにTHAI USUI CO.,LTD.設立
- 11. ソフトフェアinふくい90に出展

- 4. 江守トラベルサービスオープン
- 7. 日本IBMと特約店契約
敦賀営業所が支店に昇格
- 8. インドネシアにジャカルタ事務所開設
- 11. 江守リースキン株式会社設立

- 1. 新社は・社訓制定
シンガポール支店開設
- 3. 創業90周年
- 4. 中国に上海江守貿易有限公司設立
新人事制度スタート
マルチメディアCANオープン
江守物流株式会社設立
OB会「江守ぎずな会」発足
- 5. ブラジルのエロキミカ社に資本参加
社内メールシステム「JEANS」導入



- 3. GO-GO作戦開始
- 5. 江守幹男、藍綬褒章受章
- 6. 本社改築
- 7. 303作戦成功による全社員海外研修旅行
- 8. 資本金を2億6200万円に増資
- 10. 資本金を2億6400万円に増資
社員持株会発足
- 11. MID事業部閉鎖
会計年度決算日を3月31日に変更

- 9. 創業85周年記念謝恩法要・記念パーティ
- 11. 江守奨学会設立20周年記念式典
91北陸技術交流テクノフェアに出展
福井銀行第3次オンラインシステム稼働

- 2. 日本証券業協会(現ジャスダック証券取引所)に株式を店頭登録(2日)
江守マエダコンピュータサービス株式会社設立
資本金を7億9800万円に増資
- 8. 福井フェニックス祭りみこし大会で大賞獲得
- 11. 中国に上海事務所開設
- 12. 江守情報システムビル完成

- 2. 名古屋営業所が支店に昇格
- 3. 江守日華アクアビル完成
- 4. GO-GO作戦達成
テクノポートEMORIオープン
- 6. 江守幹男、会長に就任
江守清隆、社長に就任

- 2. 江守企画株式会社設立、ドコモショップ福井店がオープン
北陸化成工業新工場完成
- 4. 江守マエダコンピュータサービス、社名を江守システム開発株式会社に変更
- 9. インターネット・プロバイダ事業「INTERBROAD」開始
- 10. 江守エンジニアリング株式会社設立

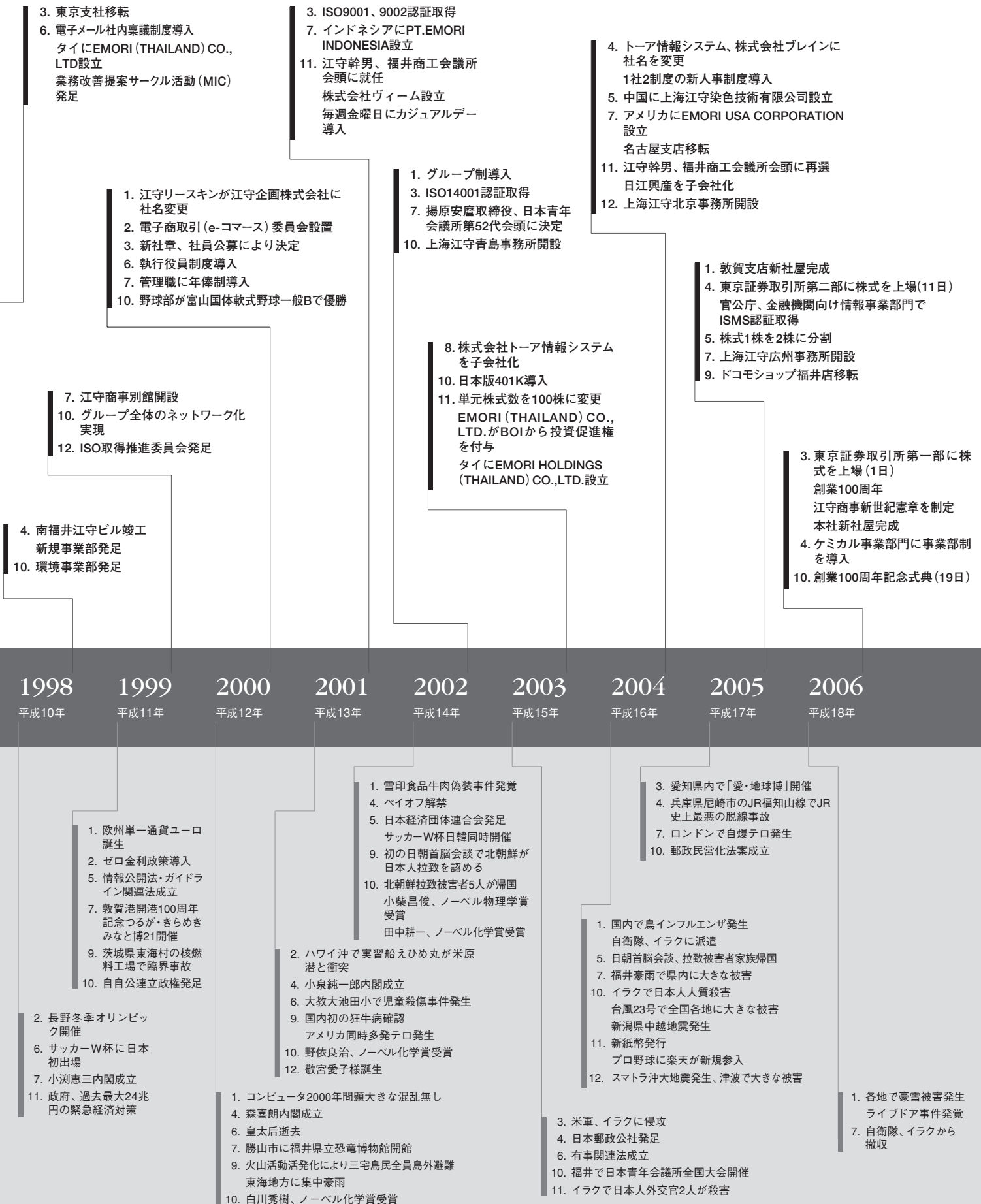
1988 昭和63年 1989 平成1年 1990 平成2年 1991 平成3年 1992 平成4年 1993 平成5年 1994 平成6年 1995 平成7年 1996 平成8年 1997 平成9年

- 3. 青函トンネル開通
- 6. リクルート事件発覚
- 8. イラン・イラク戦争停戦
- 1. 昭和三十九年、皇太子即位、元号が平成に
- 4. 消費税導入
- 6. 宇野宗佑内閣成立
北京で天安門事件
- 8. 海部俊樹内閣成立
- 11. ベルリンの壁崩壊
- 12. 日経平均株価が史上最高の3万8915円
- 4. 国際花と緑の博覧会(大阪花博)開催
- 8. イラク、クウェートに侵攻
- 10. 東西ドイツ統一
バブル崩壊、平成不況へ

- 2. 関西電力大飯4号営業運転開始
- 5. サッカーJリーグ開幕
- 6. 皇太子結婚の儀
- 7. 北海道南西沖地震発生
- 8. 自民党政権終わり、細川護国連立政権成立
- 4. 福井県立大学開学
- 6. PKO協力法成立
- 9. カンボジアPKO派遣
- 1. 湾岸戦争勃発
- 5. 高速増殖炉「もんじゅ」完成
- 6. 雲仙普賢岳で大火砕流発生
- 9. 台風19号で県内各地に被害
- 10. 敦賀火力発電所営業運転開始
- 11. 宮沢喜一内閣成立
- 12. 関西電力大飯3号営業運転開始
ソ連邦消滅

- 1. 橋本龍太郎内閣成立
- 2. HIV訴訟で厚相が国の責任を認め公式謝罪
- 9. 新党「民主党」結党
- 10. 新制度による初の総選挙
- 12. ヘルム・日本大使公邸人質事件発生
- 1. 阪神大震災発生
- 3. 地下鉄サリン事件発生
- 8. 高速増殖炉「もんじゅ」初送電
- 10. 鯖江市で世界体操選手権開催
- 4. 羽田孜内閣成立
- 6. 松本サリン事件発生
自社さ連立による村山富市内閣成立
- 9. 関西国際空港開港
- 10. 関西電力美浜2号営業運転開始
大江健三郎、ノーベル文学賞受賞

- 1. ロシアタンカー重油流出事故発生、福井県沿岸に大きな被害
- 4. 消費税5%に引き上げ
- 6. 神戸連続児童殺傷事件で14歳の少年逮捕
- 7. 香港が中国に返還
- 11. 北海道拓殖銀行、山一証券経営破綻



あとがき

2006(平成18)年3月に創業100周年を迎えるに当たり、その記念事業の一環として「江守商事創業100周年記念誌」を発刊する事が2005(平成17)年4月に決定され、編集委員会を設立、私ども編集委員一同この大役に取り組んでまいりました……。

当社の歴史は、創業者江守清から現社長江守清隆まで四代に亘り、一貫して報恩感謝を旨とし清浄なる商道を貫き、家業から企業へそして店頭公開企業・東証二部上場企業・さらに東証一部上場企業へと進化を遂げてまいりました。

本誌は、その獅子奮迅の記録として後世に伝えるべく、史実に基づいた記念誌にしたいと心がけてまいりましたが、戦災・地震などにより多くの貴重な史料を失いました。

幸いにも、多くの先人達により「江守商事八十年史」誌が史実に基づき発刊されておりましたし、故江守清喜会長著書「業務三昧」、さらに社内報「きずな」(1971(昭和46)年創刊)などの出版物があり、本誌を作成するに当たりその大部分の史料を活用させていただくこととなりました、改めてご苦勞をされた先人達に敬意を表するとともに、心から感謝申し上げたいと思います。

また、「江守商事創業100周年記念誌」にふさわしい方々に玉稿をお願い申し上げましたところ、快く執筆をお引き受けいただいた皆様方、さらには江守家をはじめ社内外の多くの方々から写真や資料の提供など、数々のご助言とともに頂戴できましたことに心から厚く御礼申し上げます。

なお、文中では慣例に従い失礼とは存じますが、ご芳名・御社名など敬称を略させていただいておりますが、何卒お許しの程お願い申し上げます。

最後に本誌制作に際し、ご協力をいただきました株式会社ライトブレーンのスタッフの皆様にご誌上をお借りして心より感謝申し上げます。

2006(平成18)年10月吉日

「江守商事創業100周年記念誌」編集委員会
委員長 豊田愷二

委員 宇野 勝治
山崎 信一
関口 英雄
酒井 宏政
漆崎香緒里

主要参考文献

江守商事八十年史
江守商事株式会社

追想 江守清喜
追想 江守清喜編集委員会

業務三昧
江守清喜

江守奨学会十周年のあゆみ
江守奨学会

日華化学創業五十周年記念誌
日華化学株式会社

社内報『きずな』
江守商事株式会社

江守商事
創業100周年記念誌

2006 (平成18) 年10月

発刊 江守商事株式会社
〒918-8510
福井県福井市毛矢1丁目6-23
TEL : 0776-36-1133(代)
<http://www.emori.co.jp/>

制作 株式会社ライトブレン
〒920-0364
石川県金沢市松島3-80
TEL : 076-249-9222(代)
<http://www.rightbrain.co.jp/>

印刷 ダイコロ株式会社
〒540-6591
大阪府大阪市中央区大手前1丁目7番31号
(OMMビル11F)
TEL : 06-6944-6311(代)
<http://www.daicolo.co.jp/>

協力 株式会社バウス・デザイン
株式会社ジークス
株式会社プランテック総合計画事務所



この印刷物は、古紙パルプ配合率100%再生紙と環境にやさしい大豆油インキを使用しています。

